

のも、存在すべからざるはずなりと。

かゝる外道の難問に對する會釋あり、曰く佛教の眞諦たる法身佛は外道所難の如く、寂滅無相にして說法あることなけれども、三大無數劫に修行成滿せる報身佛、應身佛あり、よく說法し、大慈悲を以て衆生を攝取し給ふ。即ち佛教は第一義諦の無我空を説くも、この空は有の外なる空にあらず、有宛然として空なるが故に、空を説くも因縁差別の有を壞せず、隨つて此因縁生の有の方面より見れば十界の差相歴然たり、此の如く有空中道の妙趣を説くは佛教なるが故に其半面のみ見て難すとも固より當らざるなりと。

思ふに大乘佛教は有空不二の妙理を説き、衆生をして止觀双修し、智悲双へ行じ、佛果菩提を成ずる道を示すものである。大智の故に無自性の法性を觀じ、生死に住せず、大慈悲の故に因縁の有を觀じ、衆生の救度を事として涅槃に住せず、かく有空不二、止觀双修、無我の大智と慈悲の妙行を全うするは、これ大乘佛教の二大精神にして、大乘の經論は何れも此理趣を説かぬものはない。上に擧げたる中觀論疏に「衆生寂滅即波若母、寂滅衆生即方便父三世佛由此而生」とは、以上の意義を示されたるものである。

前述の般若燈論に出づる外道との疑難應答は二教論に引用せられたる文意なるが、大師は何故に外道が佛教を難せし文を掲出せられたるや祖意量り難たけれども、思ふに世人、佛教は因縁生無自性無

我を本義とすと聽き、空理に悟入するを主とする寂靜主義ならんと解せんことを恐れ、無自性の空を説くも、因縁の有を離れざる空なるが故に、無我に住し妄我を離れ而も因縁の有に出で、大慈悲の妙業をなす。これ大乘佛教の本義なることを知らしむると共に、外道の所難の如く顯教の大乘佛教の第一義は無自性の空理にして、體もなく靈用もなき非人格の法である。かゝる非人格の法を教の本體とし、無神論的傾向ある教義を有神論的に説き、法身は靈活無碍の體にして衆生攝取の妙用あり、三世常恒に三平等句の法門を演説せる佛身なる旨を開説せるものは、密教なることを明かさんとして、かゝる文を引用せられたるものであらう。洵に冷灰なる一味の理を教の體とせる佛教に、靈氣を附與したるものは大師の佛教である。

印度の大乘佛教は衆因縁の有と無自性の空との不二平等を説きながら、尙空を偏重する傾きありしが、支那に入つて寧ろ其衆因縁の有を重んずる傾向を生じた。即ち萬有は衆因縁所生にして、生せし物それ自身に固定の性なきが故に、萬有互に相即無碍、自在にして、一に一切を攝盡する。圓融無碍を説く天台、華嚴の教義が成立するに至つた。

天台の一念三千、三諦圓融、華嚴の事事無碍圓融も、凡てこれ衆因縁無自性の理より成ずるものである。即ち萬有は其本性各々有自性ならば、互に障壁あり無碍し得ざるも、其本性無自性の故に、無碍無障にして、萬法互に相即し、一法に一切を圓具す。されば天台には

一切諸法無非心性 一性無性三千宛然 (法華玄義釋論)

といひ、又別行支記には

以三千法皆因緣生 是故一一即空假中 三諦互具非縱非橫

華嚴の五教章には

只由無性得成二多緣起演義鈔に曰く由事理無碍方得事事無碍

天台の一念三千、華嚴の事々無碍法界の理、何れも一塵一法無限の理趣を包含する實相法身の體なる旨を明かすものにて、眞言密教の當相即道即事而眞の説と卒ち見れば異なりがないやうである。されば學佛の徒の中には、天台の三諦圓融と密教の阿字の三諦と同なり、或は華嚴の事々無碍の事々の體を六大と説くは密教にして、其教理歸趣一なりと觀るものもある。而もかゝる所論はこれ未だ大師の天台、華嚴の教理もなほこれ無明因分の教として、これ以上に高く密教の立場を開示せられたる、立教開宗の根本精神を了せざるもの言である。上述の如く天台華嚴の二宗も衆因緣無自性の原理を出でず。衆因緣無自性の説は、これ衆因緣の假相に愛執する著我の妄執を拂除するを主とする教なれば、大師は此等の諸教は凡てこれ無明を帶せる因人の教なりと判せり。即ち始め小乘より法相、三論天台華嚴等の衆因緣無自性の原理に立つ教は、これ我執を空するを主とするものにして、直に法身大我の眞際に住し、大我の眞光を開見する道を示さるる教なりと見給うた。蓋し天台華嚴等は因緣無自

性の原理より、一念三千、事々圓融、有限相對の事々物々に無限絕對の現趣を觀んとするものなるも、大師の教よりいへばこれ眞の絕對無限にあらず、先徳の釋に

顯理所生末 密事能生源 文

といへり。所謂緣起所生の末法たる相對有限の現象につき、衆因緣無自性の義より事々圓融の説を立するも、此の如きはこれ相對有限物、相互の障壁を徹したるまでなり。こゝに事々圓融の義成するもこれ相對有限物の積集にして、眞の絕對無限にあらず、因緣無自性の原理よりしては、如何に諸法實相無盡法界の義を明かすも究竟は萬有は實在性なき、幻化、泡沫、影像の虛妄に等しきものと觀じ去ることに歸し、大空無我の消極觀に墮す。かゝる説の上には眞の即事而眞、即身成佛の義成立せざるが故に、大師は無自性法性の源底に色心本有の實在觀を立し毘盧遮那本地法身の靈格を證示し、一切衆生をして最初より毘盧遮那本地法身の三昧道に住する即身成佛の道を示されたのである。

而して天台の一念三千と華嚴の事々無碍法界説、これ紫朱辨じ難き教なるも、大師は大日經三劫段の釋文等に依り、天台より華嚴を勝れたりとなす。但し天台と華嚴の深淺談容易のことならず、二宗の差異種多の方面より論せねばならぬが、二宗の深淺を論する一義に、天台は事理無碍、華嚴は事々無碍にして、事々無碍説の事理無碍より一應勝るゝ義あるを所由として、華嚴の殊勝を説くことあるも、今天台より華嚴を勝れたりとなす所以は、此等の説に異なるか、即ち天台は因分に在つて因分な

ることを知らざるも、華嚴は因分に居ながら暗に果分の實在(祕密曼荼羅境界)を認むるが故に天台より華嚴を勝れたりとなす。されば先徳天台を醉中に居ながら醉へることを知らざるものに比し、華嚴をば醉中に自ら酔へるを幾分自覺せるに喩ふ。此義を委釋せんには、因心の無生を觀じ、此無生の一心に住するとき、諸佛の警覺開示を蒙り、無生の一心これ道の究竟にあらざるを知り、無生の一心より、立つて、毘盧遮那本地法身の果地に進趣する行相、即ち無生眞如の理に契合せる極致に於て、更に毘盧遮那法身の靈格の光明を仰ぐに至る菩提心の轉生の相を明す、十住心中の第八、九、十の住心につき敘せざるべからざるも、今は直に天台、華嚴の所明に依つて釋せん。

凡そ天台宗は法華經に依つて開宗せられたる宗である。而して法華經は敗種の二乗をして作佛得果せしむるを經旨とす。即ち如來成道第二七日海印定中一時炳現の自覺內證を説き給へる華嚴の會座に如聲如旨たりし二乗の作佛を明かすにあり。敗種の二乗も作佛得果し得る所以は諸法實相の理に依る。されば法華玄義の第九に法華經の經體を明し、實相一乘なりと云ふ。諸法實相とは所謂、三千圓具の妙理である。天台にては窮子そのまゝが長者なるが故に、因果不二の義を明かすも因を本とし理事不二の義も、事の色心の外に理の本有の色心なく、衆生の身心の當體、これ本有常住の法身毘盧遮那の體なる旨を説き、萬有の奥に深く潜める能生の本體とか、實在とか云ふものを立てない。故に摩訶止觀五之三に攝大乘論の阿黎耶説や、十地論の眞妄依法性義を破してある。天台に緣起の説ある

も、横に萬法の實相を觀する實相論が主で、萬有は本有無作の實相にして別に能造の體はない、十界の諸法は宛然と並び立ち、而も自性無性、體性互融の妙理を三千圓融の實相と名く、かく萬有は虛融にして三千圓具の妙體なるを知らず、諸法の上に差別の情を起し、寂光土の中に居ながら、自ら牢獄を造り、三毒の苦に逼迫せられつゝあるは、生死の衆生なり。如來かゝる迷途の衆生を愍み、萬有に我他彼此の差別なき、三千圓具の實相の理を説き、凡夫の迷情を破し、直に虛融の實相を觀達せしめんとするものである。大師は二教論、寶鑰、十住心論等にかゝる天台の所説を批判して、入佛道の初門なり、無相不可説の理を本とせる遮情教なり、無明因分の教にして、未だ如來自證の果分を明かさざるものと説示せらる。即ち寶鑰に第八住心なほ遮情教なる所以を釋して

非青非黃等言並是明法身眞如一道無爲之眞理佛説此名初法明道智度名入佛道初門言佛道者指金剛界宮大日曼荼羅佛於諸顯教是究竟理智法身望眞言門是則初門文

二教論に天台宗のなほこれ入佛道の初門なることを明して

喩曰此宗所觀不過三諦一念心中即具三諦以此爲妙至如彼百非洞遺四句皆亡唯佛與佛乃能究盡此宗他宗以此爲極此則顯教關楔但眞言藏家以此爲入道初門不是祕奧仰覺薩埵不可不思文

大師は空性無境の一心に證入し、恰も二乗の沈空に等しく、上は諸佛の求むべきを見ず、下衆生の度すべきを見ず、自ら無生の一心に住して、究竟の涅槃を體得せると謂ふ十住心中の第八住心に天台

の教義を配屬し給ふ。即ち第八住心は能攝の住心にして天台は其住心に配屬せられたる所攝の宗教なり。第八住心のみならず他の住心にても能攝の住心と所攝の宗教と、所明の理趣全然一致せざることもあるも、義の相應に依つて配屬せるものなり。

天台よりいへば大日經に明す第八住心は無相の一心に、沈空滯寂せるものなるやも知らざれども、天台は必ずしも無相の空理を教の極致とせるものにあらずして、一切諸法、三千三諦圓具の妙法なる理趣を示し、一念に具する三千三諦の實相を觀成するを宗旨とするものなれば、第八住心に配屬し、或は天台は言斷心滅の境を極致と釋するが如きは、當らざるべしと云うであらうが、眞言より見れば、天台も究竟は言斷心滅、眞諦無相の法を極致とすと云ふことに歸す。

蓋し高祖大師が天台を十住心中の第八住心に攝在し、或は無相絶離の法を極致とすと判せられたるは、天台宗の大成者たる智者大師の釋文に依れるものである。而るに支那に於ける天台宗は、荊溪湛然に依つて、其眞義發揮せられ、宋朝に入つて所謂山家、山外の法義の論争あり、後の天台學者は山家の四明知禮の説を智者大師及び荊溪尊者の正意を傳へたる正統派と目するも、虚心坦懷智者荊溪の釋を觀るに、山外の説或は智者荊溪の眞意を得たるものなるやも知るべからず。

山家と山外の異説を詳述する餘裕なきも、今密教より天台を判するにつき、要義と思はるゝ一二の點を擧ぐれば、事理の解釋の如きは山家は事理に各々總別ありとし、平等の理にも差別の別の義あり、

差別の事にも平等の物の義ありと論ずるに反し、山外は理惣事別にして理平等の中に差別の別を立てず、或は山家は空假中の三諦に何れも三千を具すと云ふも、山外は空中を理とし、假諦を事とし、事具の三千はたゞ假諦にありて空中になし、或はまた山家は安心を觀境とし、山外は眞心を觀境とす等の相違がある。而して第八住心は空性無境の一心に住する位なりといへば、平等の理中に直に差別の別を見ず、また假諦に三千を具するも空中に三千の差相を立せず、觀心より云ふも絶對の眞如心を觀すと云ふ山外の説に親しきものがある。されば先德にして天台の遮情教なる所以を明かさんとして、天台は差別の相を見ざる中道を至極とすとの義を立つるも、これらは天台の異解者と稱せらるゝ山外の説には當らんも、山家よりいへば、かゝる所難は凡て當らずと云ふであらう。

今山家四明の説、即ち平等の理中にも差別を見、空中にも三千を立し、安心を觀境とすと云ふ、天台正統説といはるゝ義も、なほ遮情教なりとの意を述するであらう。

高祖大師の所判よりいへば山外は遮情教たるは勿論、山家もまたこれ遮情教である。但し四明は天台の所謂有相家にして、無自性無相を道の至要とするものにあらず。

今家明三千之體隨緣起三千之用不隨緣時三千宛爾故差別法與體不二以下除無明有差別上故云（指要抄）  
大師に天台の三千宛爾の法體も、これ遮情なりとの釋あるを見ざれども、二教論に融三世間の華嚴の毘盧遮那佛を釋し、これ因分の一切を攝するも果分を攝せず、即ち華嚴の融三世間の毘盧遮那もこ

れ無明因分の域を出ですとの釋あるより觀れば、天台の三諦三千圓具の法體も、なほこれ緣起因分の現象についての說、即ち因緣生無自性の說を擴充して説けるものにして、未だ深く緣起の本際たる不二果分の眞境に至らざるものである。されば興教大師は顯教の三諦を緣起の三諦と名け、只一心緣起の諸法を談じて未だ法身法爾の三色を知らず、密教の極法に及ばずといふ。以上は四明の有相說を認めての判釋なるも、直に智者及び荊溪の釋に徴せば、天台は究竟無相一味の法を宗極とすといひ得らるゝであらう。

荊溪尊者の法華玄義釋籤の染淨不二門の釋に染を轉じて淨となし、つひに染淨の二法をも亡する、宗極に契證するには、三觀の中にも空中二觀の力用に依ることを明かし染淨の二相を亡するに至れば空中の能亡の用もまた亡する旨を釋して曰く

由<sub>二</sub>空中<sub>一</sub>轉<sub>レ</sub>染爲<sub>レ</sub>淨由<sub>レ</sub>了<sub>二</sub>染淨<sub>一</sub>空中自亡

止觀輔行五之三

當<sub>レ</sub>知四句求<sub>レ</sub>心不可得、求<sub>二</sub>三千法<sub>一</sub>亦不可得、(中略)亦縱亦橫求<sub>二</sub>三千法<sub>一</sub>不可得、非縱非橫求<sub>二</sub>三千法<sub>一</sub>亦不可得、言語道斷心行處滅故名<sub>二</sub>不可思議境<sub>一</sub>大經云生生不可說生不生不可說不生不生不可說即此義也當<sub>レ</sub>知第一義中一法不可得況<sub>二</sub>三千法<sub>一</sub>世諦中一心尙具<sub>二</sub>無量法<sub>一</sub>況<sub>二</sub>三千耶

此等の文は智者大師自ら世諦に三千の法を具するも、眞諦は不生不生不可說にして、言語道斷心行處

滅なりと釋せる明文ならずや。

或は法華玄義第六に感應妙を説き眞諦は不可得の理なれば、生佛共に無相にして、したがつて感應を論ずべからず、感應は俗諦の法門なりと云ふが如きは、密教に如來種々の三業は第一義諦妙極の境に通徹し、生佛本有の三密加持を明かす說に對比せばまた顯密二教の相異、及び大師が天台を遮情教なりと判じ給ふ意も自ら會せらるゝであらう。

若就<sub>二</sub>至理<sub>一</sub>窮<sub>二</sub>三世<sub>一</sub>皆不可得故無<sub>レ</sub>機亦無<sub>レ</sub>應故經言非<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>菩提有<sub>二</sub>去來今<sub>一</sub>但以<sub>二</sub>世俗文字數<sub>一</sub>故說<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>三世<sub>一</sub>以<sub>二</sub>四悉

檀力<sub>二</sub>隨<sub>二</sub>順衆生<sub>一</sub>說<sub>二</sub>云

智者大師の禪門要略の結文に

一切行人常歛<sub>レ</sub>念觀<sub>二</sub>四大五蘊空無所有<sub>一</sub>名爲<sub>二</sub>道

三千三諦圓具の表徳の釋あるも、第一義諦は不可得にして、入道の要は無生觀なるべき釋多し。況んや三千の法相はこれ本經になきところにして、智者大師華嚴經の十界各具、法華經の十如、智度論の三世間の文に依つて止觀に始めて明かされたる法門である。

若し直に本經の文を拜讀せんか、法華經の藥草論品には

如來知<sub>二</sub>是一相一味之法<sub>一</sub>所謂解脫相、離相滅相、究竟涅槃、常寂滅相、終歸<sub>二</sub>於空<sub>一</sub>

或は提婆達多品に

今皆修<sub>二</sub>行大乘空義<sub>一</sub>。○演<sub>二</sub>暢實相義<sub>一</sub>。  
或は安樂行品に

一切法空無<sub>二</sub>所有<sub>一</sub>。無<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>常住<sub>一</sub>。亦無<sub>レ</sub>起滅<sub>一</sub>。是名<sub>二</sub>智者所親近處<sub>一</sub>。

かゝる經文に依らば、諸法實相の理も、緣起無性より説くこと一層明かであらう。

天台の所明は其宗當分よりいへば、頗る表徳の義あるも、高き密教より見れば、なほ遮情の分域を出でないものである。但し其宗の當分よりいへばかの虎溪の懷則の佛心印記に

只一具字彌顯<sub>二</sub>今宗<sub>一</sub>。以下性具<sub>レ</sub>善他師亦知具<sub>二</sub>惡緣了<sub>一</sub>。他皆莫<sub>レ</sub>測。是知今家性具之功效在<sub>二</sub>性惡<sub>一</sub>。若無<sub>レ</sub>性惡<sub>一</sub>。必須<sub>レ</sub>破<sub>二</sub>九界修惡<sub>一</sub>。顯<sub>二</sub>佛界性善<sub>一</sub>。是爲<sub>二</sub>緣理斷九<sub>一</sub>。非<sub>二</sub>今所論<sub>一</sub>。

宇宙萬有、善惡染淨、一として性徳圓具の妙法ならざるはなく、一として三諦相即の實相ならざるなき理より、性惡を談じ、斷惑の實義不斷にあり、修證の眞意無作に存すとし、九界を斷じて佛界を求むるを却つて菩薩の無明となすが如きは、高妙なる教なれども、一面より見れば、存在するものゝ凡てをそのまゝに肯定し、あまりに不二平等に偏するもの、因果の中には因を偏重するものにして、大日經にはかゝる因の本心に住するを、なほ至極の法ならずとし如來の警覺開示に依つて、高き佛果を仰慕せしめ、更に進趣の道あるを知らしむ。

次に華嚴の教義を敍し、以て天台、華嚴より祕密眞言宗に至る理路を明かさんに、華嚴宗は華嚴經

を根本所依の本經とせるものである。而して華嚴の宗趣につき、賢首大師は探玄記第一に諸家の説の未盡理なるを指摘し、華嚴經の宗趣は因果緣起、理實法界なることを顯示せり。

今惣尋<sub>レ</sub>名案<sub>レ</sub>義<sub>レ</sub>以<sub>二</sub>因果緣起理實法界<sub>一</sub>。以爲<sub>二</sub>其宗<sub>一</sub>。即大方廣爲<sub>二</sub>理實法界<sub>一</sub>。佛華嚴爲<sub>二</sub>因果緣起<sub>一</sub>。因果緣起必無<sub>二</sub>自性<sub>一</sub>。無<sub>二</sub>自性<sub>一</sub>。故即理實法界理實必無<sub>二</sub>定性<sub>一</sub>。無<sub>二</sub>定性<sub>一</sub>。故即成<sub>二</sub>因果緣起<sub>一</sub>。是故此二無<sub>二</sub>唯一無礙自在法門<sub>一</sub>。故以爲<sub>レ</sub>宗。

因果緣起とは所謂衆因緣生の義にして、理實法界とは無自性の理なり、衆因緣生の事が舉體無自性の理、この事理の二、無二にして、無障無礙の故に、一塵一法に宇宙法界を含蓄する無盡法界、事々無碍の理顯はる。賢首大師探玄記及び華嚴經旨歸に事々無碍の原理を十種の方面より釋せり。

- 夫以法相圓融寔有<sub>二</sub>所因<sub>一</sub>。因緣無量略辨<sub>二</sub>十種<sub>一</sub>。一爲<sub>レ</sub>明<sub>二</sub>諸法無<sub>二</sub>定相<sub>一</sub>。故 二唯心現故 三如幻事故 四如夢現故 五勝通力故 六深定用故 七解脱力故 八因無限故 九緣起相由故 十法性融通故 於<sub>二</sub>此十中<sub>一</sub>。隨<sub>レ</sub>一即能令<sub>二</sub>彼諸法<sub>一</sub>混融無碍<sub>上</sub>。

何れも圓融無碍の所由を示すものなれども、第九の緣起相由、第十法性融通の釋文を見れば、事々無碍の説は衆因緣生、無自性の理より成れること一層明了に知り得らるゝであらう。

緣起無性故得<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>性相無礙義<sub>一</sub>。相關互攝故得<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>主伴無礙義<sub>一</sub>。文云菩薩善觀<sub>二</sub>緣起法<sub>一</sub>。於<sub>二</sub>法中<sub>一</sub>。解<sub>二</sub>衆多法<sub>一</sub>。衆多法中解<sub>二</sub>了一法<sub>一</sub>。云。

十法性融通力故者謂若唯約<sub>二</sub>事相<sub>一</sub>。互相礙不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>即入<sub>一</sub>。若唯約<sub>二</sub>理性<sub>一</sub>。則唯一味不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>即入<sub>一</sub>。今則理事融通具<sub>二</sub>斯無礙<sub>一</sub>。云。

かくの如く縁起の法は無自性にして、事々無碍の義を顯示する華嚴の宗趣を見れば、かの天台の一性無性三千宛然の理と相違なきが如し、即ち天台と華嚴の教理仔細に分別せば、二家の教格種々の點に於て異なるものもあるも因縁生無自性の義より圓融を説くに至つては二家殆ど一致である。而して大師天台より華嚴を勝れたりと見給ひしは、先きにも論せしが如く、華嚴は萬有の縁起を明かすに一法縁起すれば法界縁起する重々無盡の理を説くのみならず、其縁起の本源たる性起を明かし更に不可説絶慮と唱しつゝも、十佛自境界たる果分の實在を暗示す。華嚴に暗に認めながら、而も不可説に屬する十佛の自境界これ秘密の領分である。華嚴はかくも密教の領分たる果分の實在を遙かに指示するが故に、天台より殊勝なりとし、第九住心に配屬し給ひしものである。

華嚴の事々無碍法界の玄旨は、因果二分の中には、これ普賢因人の法門にして、其果分の佛境界は、其狀相を説くべからずとなす。五教章に曰く

夫法界縁起乃自在無窮今以要門略攝爲一二者明究竟果證義即十佛自境界也二者隨緣約因辨教義即普賢境界也初義者圓融自在一切一切即一不可説其狀相耳如華嚴經中究竟果分國土海及十佛自體融義等者即其事也不論因陀羅及微細等此當不可説義何以故不與教相應故地論云因分可説果分不可説者即其義也果分に圓融自在無碍の徳あるも、而も果界は唯佛與佛の境界にして、其狀相説くべからず、されば重々帝網、微細相容等の十玄門を以ても、其實相を陳説すべからざるとの義である。

凝然大徳の通路記に果分は不可説なるも、其體は理事、性相の無碍自在なるものなるべしと云ふ、これ豈に密教に果分の實相を開説して、性相常住、事理本有、三大圓融なりと顯示すると、懸かに契合せるものにあらずや。

問此果分者既是如來究竟自在圓滿大果爲是約理名果分耶爲亦通事爲果體耶若云局理者應十地所證即是果分十地是因證十如故又終頓等教皆證眞理應與今果全是一同以所證理無差別故云通事者既是不可説應定是理事法即是可説相故既言性海非理是何兩邊有疑請陳實義答究竟自在果海之法該羅事理貫括性相一切諸法入佛果中即是如來所知非已分不簡事理一切諸法唯望如來皆名果分章主大師所釋分明如玄記第十但文言性海者第事理性源故理智事理性相體義各有其性約本源故非謂眞理獨名性海

華嚴宗にて一切佛敎の究竟の歸趣なる如來果地を暗示し、而も果體は事理を該羅し、性相を貫括すと云ふが如きは、これ密敎の本分を懸かに釋するものにして、一切佛敎の所歸所入つひにこゝに至らば止まざるを示すものである。この一切佛敎の根本歸趣を高く明示せるものは、弘法大師の秘密眞言宗である。

大師は何故に印度支那等の前代の佛敎家の未だ曾て談せざりし、因分を超越し、直に果分に住する法身爲本の敎義を宣傳せんとし給ひしや此義を明かにせんには、多方面よりの論述を要するも、大師以前の佛敎を凡て無明因分の敎なりと貶し、此等の諸敎を超越し、直に此等諸敎の究竟の證果たる、

法身に超入する教を開示せられたるは、これ大師の宗教の一切佛教に卓越せる點である。他佛教は衆因縁無自性の義を本義とし妄我の否定に急にして、直に法身大我の眞光に觸るゝ道を開かざりしが故に、大師は法身本果を直證する法門を示されたのである。

佛教は衆因縁の現象を無自性なり無我なり苦なり空なり無常なりとし、その無自性の法性を觀じ、解脱を得んとするものなるが、かゝる解脱は三論宗等の如く空もまた空する遮情の極致たる一種の空觀あらざれば、起信論等の所明の如く、有限の善惡の一切を妄法と否定し、即ち生滅門に有する一切の諸性を遠離せる、絶言眞如の一味の法を空竟證悟の道體とする者となる。しからざれば天台宗等の如く一切有限の制約、障壁を徹し、善も惡も、淨も染もそのまゝに實相なりとの圓融觀となる。かくして到達せる法性實相、眞如法身には何んらの積極的靈用なき一味の法、所謂非人格の理たるに歸すかくの如く生滅より眞如、有限より無限に至らんとするは普通入道の徑路なれども、所謂入佛道の初門たるに止まり、法身無限の果體に直入する道ならず。かの淨土門は一念佛地に超入するを説くも、これ因果差別の方面に立したる佛身佛土にして、此身此土は罪惡の塊團なりとし、ひたすら彼岸の報身の救済に信賴する者にして、自己本有の法身の靈性を無視し、個人格の偉大を認めざるものにしてこれまた遮情教たるの域を出でず。

大師は直に法身の果地に立ち、法身のうちに生滅の萬有を見、萬有は法身の差別智印なり、法身の

靈相の顯現なり、即ち曼荼羅體なる祕旨を示し、衆生は法身如來の靈德を顯得すべき金剛子なり、菩薩子なり、佛子なれば、大菩提心を發起し、法身の三昧地に住し、法身の本誓を己が本誓とし、如來に替つて如來の事業を成ずる、即身成佛の道を開示せられたのである。瑜祇經に

堅住金剛性全成金剛體速轉自身分便同金剛身如秋八月霧微細清淨光常住此等持是名微細定

又は

當現世替諸佛現生救度有情名大金剛薩埵亦名大覺本有金剛

所謂顯教の諸家は下界に居て雲霧を拂うて月を見んとするが如く、大師の教は直に月宮に住し雲霧をも月の光と見るに似たり。

即ち顯教は有限より無限に至らんとするもの密教は無限より有限を見、有限の事々に無限の眞意義を顯得せんとするものである。洵に最初より佛地の三昧道に住し得べき道を示すものは眞言密教である。

上來述べしが如く、印度の佛教は衆因縁の萬有、即空の理なる所以を説き、生死即涅槃の旨を明かすも、自ら無生の空を偏重する傾きあり、支那に於て衆因縁無自性の表德的理趣發揮せられ、圓融觀となり、因縁生の事々に無限の理趣を觀んとするに至りしも、因縁生無自性説は、固と萬有に永劫の實在性なき義なれば、此義を如何に擴充して説くも、つひには因縁生の體は幻の如く影の如く虚妄非



眞實なりと云ふに歸し天台華嚴も法相三論等と同じく無我無自性の理に没入せんと傾き全然脱すること能はず。此遮情爲本の教を根本的に復活せしめ、有限に即して無限の理趣を開説し、衆生の色心に即して、毘盧遮那法身と同根一體なる玄旨を陳説し、凡身即佛の義を顯示せんには、一大實在觀を以てするより外なければ、大師は顯教の大乗教に萬有は衆因縁無自性なり、其無性は單なる空ならずして、不空の一心眞如なりとの説を、更に積極的に説き、無自性の性は法(非人格)に約していへば六一實の體なり、人(人格的)に約していへば毘盧遮那本地法身なり、而して人法固より不二なれども、大師の教義は寧ろ人を表とすと云ふべきである。かゝる大師の教義に依り、衆因縁生無自性にして如幻虚妄なり、生滅暫有なりと見られたる、生滅の萬法凡て法身如來の靈相の顯現にして、一切衆生は如來の徳を實現すべく甚深の意義ある、金剛子なり、佛子なりとの祕旨顯示せらるゝに至りぬ。蓋し法身佛常住の説は大乗經論の處々に出づる故に大師は二教論に

諸經論中往々有<sub>ニ</sub>斯義<sub>ニ</sub>雖然文隨<sub>ニ</sub>執見<sub>ニ</sub>隱義逐<sub>ニ</sub>機根<sub>ニ</sub>現而已

と示し給ふ。而も顯教の諸大乘經論の法身は、密教より見れば、眞如の理にして人法の中には寧ろ法を表とせるもの、随つて眞の人法不二の義未だ顯れず、法身如來の普遍の靈用を釋するものあるを見るも、其實體を明かすに至つては、無相無體と釋するは殆んど一致である。起信論に眞如法性を法身と稱するも、これ不生不滅の理である。

大智度論第九等に出づる眞身の釋の如きは、密教の法身觀と異ならざるが如きものあるも、且らく法華玄論の説に依らば、これまた法身よりも報身を主とせる尊にして、其法身に至つては、無相の空理である。大般涅槃經は智者大師の説の如くこれ佛性を明かすを以て經體とせるものである。而も佛性と法身體一のゆるに、佛性常住を明すと共に法身常住の義を説き而も頗る表徳の尺あるを觀るも、これまた法體を釋するに至つて無自性無相に墮す。

高貴徳王菩薩品之五に曰く

善男子一切諸法本自空、何以故一切法性不可得故善男子色性不可得<sub>中略</sub>見<sub>ニ</sub>一切法性不<sub>レ</sub>空者當<sub>レ</sub>知是人非<sub>ニ</sub>是沙門<sub>一</sub>不得<sub>レ</sub>修<sub>ニ</sub>習般若波羅密<sub>一</sub>不得<sub>レ</sub>入<sub>ニ</sub>於大般涅槃<sub>一</sub>不得<sub>レ</sub>現見<sub>ニ</sub>諸佛菩薩<sub>一</sub>是魔眷屬善男子一切諸法性本自空亦因<sub>ニ</sub>菩薩<sub>一</sub>修<sub>ニ</sub>習空<sub>一</sub>見<sub>ニ</sub>諸法空<sub>一</sub>

かゝる經文は卷中至るところに見るのである。また彼の華嚴經の如きは、實に法身無限の靈用を説くものであるも、而も其本體を釋するに至つては、無自性の理である。佛昇須彌頂品第九一切法無生、一切法無滅、若能如是解、諸佛常現前、無<sub>レ</sub>取亦無<sub>レ</sub>見、空寂無<sub>ニ</sub>眞實<sub>一</sub>諸佛本來空、或はまた

分<sub>ニ</sub>別一切法皆悉無<sub>ニ</sub>眞實<sub>一</sub>如是解<sub>ニ</sub>諸法<sub>一</sub>則見<sub>ニ</sub>廬舍那<sub>一</sub>

又は

無礙寂滅觀、是則佛正法、十方世界中、一切如來所、一念悉徧至、  
或は十地品第二十 二五二

一切法空寂、先來無性相、同若如虛空、大師亦如是

かゝる經文は全卷に滿てるのである。即ち顯教の諸大乘は等しく眞如法身を究竟の歸趣とし、眞如法  
身につつき、頗る積極的釋あるを見るも、人法不二の實義未だ顯れず、小乘教以來の法爲本の義勝れ、  
法身も無自性眞如の理であると云ふ釋が多いのである。かく諸大乘の等しく説かんとして、未だ明か  
に説かず、至らんとして未だ至らざりし、法身の果地に立ち、法身の實在法身の説法、法身無限の靈  
用を明かされたるは大師の宗義の根基にして、また一切佛教の歸趣である。大日經疏第二十卷に曰く  
何況如來法身而不能成就如自在神力加持神變耶然常途説法或云法性或云法身寂靜如空無所動作都  
不説具足如是力用以爲凡起神變皆是爲之心三昧之力而不言法體如是此其未了也

法身如來の靈體靈用は、金剛頂經大日經其他の密教の經典に説かれたるものなるが、大師に依つて其  
旨趣明かに發揮せられたものである。

顯教は俗諦には佛あり衆生あり、迷悟、染淨、眞妄の差別を認むるも、其眞諦は一如無相の非人格の  
法と觀るは、本來の教格にて、未だ人と法との不二の實義が十分に顯れて居ない。かの阿彌陀佛も無  
自性の涅槃に没入し去ると云ふが如きは、天の一方に幽かに認めたる明星も忽ち蒼空に没し去り、空

しく虛碧を望むが如く、眞諦は衆生とか佛とか云ふ假人を絶せる一味の法と説くものである。この佛  
なく衆生なき無自性の眞諦の奥底に佛あり衆生あり、十界曼荼羅の嚴存を説き、佛と衆生との感應道  
交加持瑜伽の道を明かすものは密教である。以て知るべし、密教は一般佛教の如く無自性無我を觀じ  
無相の理を體得せんとするが如きにもあらず、また佛陀と衆生との感應加持を明かすもかの一神教の  
如く全智全能なるものは神のみにして、人は罪惡の塊團なれば自己に何等の神性もなく、一切の個人  
性を没却して、たゞ神の恩恵にのみ依らんとするにもあらず、また淨土門の如く、ひたすら他方の佛  
身佛土に往詣せんことを教ゆるにもあらず、衆生と佛陀との感應道交の道を明かし佛と衆生と永く隔  
たれると見る而二の隔執たる根本無明を斷じ、自己本有の佛、即ち無限の靈性を顯得する祕旨を説く  
ものである。大師の祕藏記に曰く

本尊與吾無二無別故吾三密鏡能照同本尊一非唯本尊與吾無二無別一切已成未成諸佛亦同與吾無二無別故諸佛  
三密鏡能照與我同諸佛萬德圓滿眷屬圍繞故吾亦萬德圓滿眷屬圍繞諸佛法界身故吾身在諸佛中吾法界身故諸佛在  
我身中

上來普通佛教、即ち顯教は因縁生無自性を本義とし、而も無自性無我のうちに法身大我を求め、究  
竟の歸趣とせんとして、未だ法身大我の實義を説かざること、密教は最初より法身大我を教の本體と  
なせるもの、即ち密教は一切佛教の歸趣なることを敍せしが、なほこの義を明かにせんがため二教論

に於ける四家大乘に對する大師の判釋の要旨を述ぶるであらう。

佛教は因縁生(俗諦)無自性(眞諦)を本義とすといへば、俗諦は有にして眞諦は空なりと説くが、本來の教意のやうに思はるゝも、かゝる因縁生無自性を原理とする顯教中に、また實相家と縁起家の二門あり、實相家にては眞諦の空を説くも、縁起家にては寧ろ眞諦の有を主張するものである。實相家とは因縁生法の無自性を觀じ、無生實相に契達せんとするを教ゆる宗にして、かの三論宗である。また三論宗より一進轉せる天台宗もこの教系に屬するものである。次に縁起家とは無自性の法性より衆因縁に依つて萬有の生起する義を委説する宗である。縁起家よりいへば法性は無自性にして、隨縁々起すといひながら、一面法性の不變常住の體の存すべきを説く、これ生起の第一原理として法性の實有を許さずば萬有の生起明かし得ざるゆゑであらう。かの眞如縁起を明かす起信論及び華嚴宗等は眞如法性の無自性隨縁を説くと共に眞如の不變の理を談ず、其他眞如の實在を認めながら、眞如は不變常住の一面のみにして、無自性隨縁の義なしと見る法相宗は何れも眞諦の妙有を明かすものである。大師は無自性法性の源底に本有の色心、六大一實の法體を立せらるゝが故に、眞言宗は眞に眞諦の實有を説くものである。隨つて二教論に於ける法相、三論、天台、華嚴の四家大乘と眞言密教との淺深優劣の判釋を見るに、衆因縁無自性を説き眞諦の理を主張する三論宗に對しては、これ衆生の妄我を除かんがために、無自性皆空の理を示すものなれば、かゝる教は佛道に入る初門にして、未だ佛

道の本體たる法身自證の法を明かさざるものなりと釋し、同じく三論宗の教系に屬し、三論の教義より開展せる天台宗の說に對しても、眞諦空を説く三論宗の喩釋と同じく、入佛道の初門なりと判じ給ふ。

蓋し天台の如きは理具の三千を談じ、三身の果を説き、卒ち見れば眞諦空の教系に屬せざるが如く思はるゝも、かの因果不二を明かし、一念本具の三千を知らざるを因とし、三千の實相に契ふを果とす而も極致は因も泯亡し果も泯絶し、實相の理もまた不生不生なりと云ふが如きに至つては、これ道の至極を不可得絶離と云ふものにあらずや。荊溪尊者法華玄義釋籤に曰く

緣因果理一用此一理爲因理顯無復果名豈可仍存因號因果既泯理性自亡

因果も泯し、實相も泯せる不生離言の極致は、單空無相ならずとするも、衆生と佛との假人を絶せる一味の法と見るものである。智者大師法華玄義に曰く

諸諦不可說者諸法從本來常自寂滅相那得諸諦紛紜相礙一諦尙無諸諦安有

これ弘法大師、天台宗も三論宗と同じく、寂滅絶離を宗極とし、何れも入佛道の初門と判じ給ふ所以である。

眞諦有の教系に屬する法相、華嚴の兩宗に對し、此等の宗に眞諦を妙有と説きながら、而も不可說なり、不可思議なりと云ふ。その不可說の眞諦果海の實相を開演せるは祕密眞言宗なることを明かさ

る。二教論に華嚴宗の果分不可説これ密教の本文なることを釋して

喩曰十地論及五教性海不可説文與彼龍猛菩薩不二摩訶衍圓性海不可説言一懸會所謂因分可説者顯教分齊果性不可説即是密藏本分也何以知然金剛頂經分明説故有智者審思之

また法相宗の四重二諦に依つて顯はるゝ第四の勝義勝義、一眞法界は、これ因人の思議を絶せる果境にして、たゞ如來の正智の所證なりと云ふ。此勝義々々諦これ密教の本分なることを判じて曰く、

喩曰此章中勝義々々廢詮談旨聖智內證一眞法界體妙離言等如レ是絶離即是顯教分域言因位人等四種言語皆不能及  
唯有自性法身以如義眞實言能説是絶離境界是名眞言秘教金剛頂經等是也

顯教の大乗佛教の所説を仔細に見れば眞諦空を立する説と、眞諦有を唱ふる兩義あるも、眞諦は無相不可説不可思議なり、佛なく衆生なき一味の法なりと見る義一致せり。即ち衆生、佛等の人は因縁生の假にして、法は眞實なりとは顯教本來の教格である。されば大師は以上の四家大乘に對する判尺終り、四家大乘の説を總括し以て密教との相異點を示さんとして、二重の二諦の義を立せり。初重の二諦は俗諦には佛あり、衆生あるも、眞諦は無相一味の法なれば、佛なく衆生なしと見る顯教の説にして、四家大乘の義を初重の二諦に攝し、後重の二諦とは密教にして、佛なく衆生なき一味の法と見る顯教の眞諦の極致に佛あり衆生あり、十界曼荼羅を開説せる義である。即ち知る大師の佛教は、最初より顯教所説の生死迷妄の俗諦を超越し、顯教の究竟の目的たる眞諦果地を立脚地とするものなる事

を。始めより一般佛教に説く俗諦を超越し眞諦に立つところに、大師の宗教は印度以來の俗諦は幻化なり、迷妄なり、虚偽なり、罪惡なり、無常なり、苦なり、無我なり畢竟厭離すべき有爲の法なりとの厭世寂靜の消極思想を全然脱出するを觀るべく、また眞諦に佛あり衆生あり、此佛と衆生の加持感應を説き、自己無盡の靈性を顯得する道を明かすこれ大師の教の宗要なるを思ふべきである。かくの如きは卒ち觀れば一般佛教と原理を異にせる新たなる宗教を開説せられたるが如きも、而もこれ因縁無自性の性に具する無盡莊嚴藏を開見せられしもの、一般佛教の自然に到達すべき究竟の歸趣を證示せられしものにして、これ最新の佛教にしてまた最後の佛教である。

密教は法性を六大一實の體と説き、萬有はこの六大法身の顯現なりといへば、これ法體も本有なり、その法體より縁起せし衆生の身心も、これ本有の金剛薩埵なりといへば、人體も本有なりと云ふこととなり、普通佛教に人も空なり法も空なりと云ふに反して、人法の本有を説き、却つて人法二執を帶することになりはせぬかと云ふ疑難があるが、大師の教義よりいへば寧ろ人法の本有を説くを宗極とす。今先徳の釋文を鈔出し、密教は人體の本有を説くこと、及び人法の本有を立するも、普通佛教に云ふ二執に墮せざる義を明かすであらう。本母集に曰く

問自宗意於五蘊和合人身存本有義可乎、答云云

疑云若存本有義者從緣生故無自性佛法之通相也既稱五蘊和合豈成本有義乎若依之云爾者高祖解釋中能入金

剛智所入金剛定能證金剛人。既稱金剛。寧非存人本有乎。爾者如何。答於和合人體。可存本有義也。其旨顯難勢之一篇。凡今宗兩部之諸尊三密法以爲所入。故一本尊身語意並名金剛三業。行人能令三業同於本尊。以之爲成佛之極。是則六大所和合身爲本有金剛體。文義共分明也。但至難者緣生無性之談。常途顯略之所判也。○若爾者談人本有。是密教不共也。順常途不可致難勢也。假人實法爲宗。卽一代顯教開示人法法爾。是祕密眞言此旨高祖處々解釋不違。毛舉其故者顯教中雖立二諦。以眞諦爲實。以假諦爲權。權故迷悟人體並假名無實也。所謂他受用應身等悲智薰習無相現應。故其體實無也。九界迷情業因感果。故舉體虛無如幻化也。依此義。故萬法悉歸法身之理體。無相無念言語道斷是名果分。如此所談九種住心分齊初重二諦建立也。今難勢所舉種々義門。皆是此門境界也。

今六大互相不二。故如々一體而和合成人體。此大曼荼羅身。○人法義只是不二。而二建立也。豈獨法稱本有不名人體乎。卽身義云如是六大法界體性所成之身。無障無碍同住實際。常住不變。此釋明六大所和合人身判。常住不變。何可及。疑殆乎。但至難者因緣生故。無自性者常途所談也。今教中雖立因緣。於法爾體約義開。因緣云云。色心理智剋其實體。並不二而顯其精靈之時。人體顯現成。本有佛體。依此義。故三種世間四種曼荼羅通稱佛體也。諸教未知此義。於假相色心理智。建立人法。故爲假人實法。祕密教深義。色心精靈爲人體。此義甚深也。深可尋問之。以常情不可致難勢者也。

以上はこれ高祖大師の教義は人法の本有を明かす義を述せるものなるが、以下人法本有を説くもこれ普通佛敎に云ふ二執と異なる旨を釋する文を掲出せん。菩提心論の三摩地段に曰く

問前言二乘之人有法執。故不得成佛。今復令修菩提心。三摩地者云何差別。答二乘之人有法執。故久久證理沈空。滯寂限以劫數。然後大心。又乘散善門中。經無數劫。是故足可厭離。不可依止。今眞言行人既破人法上執。雖能正見眞實之智。或爲無始間隔。未能證於如來一切智智。故欲求妙道。修持次第。從凡入佛位者。卽此三摩地者能達諸佛自性。悟諸佛法身。證法界體性智。成大毘盧遮那佛自性身受用身變化身等流身。

以上菩提心論の論文につき諸家の註釋あるも、道範阿闍梨の記を掲げんに

此問答意如何問意上言二乘有法執。故不得成佛。今令修月輪觀三摩地。似法執。何差別乎。答意眞言行人遇此自心卽佛之教。時之顯教所斷人法二執。卽輪圓具德知之故。彼人法二執。既輪圓具德知之。故彼人法二執。既破之。仍以二乘法執常途義相。不可難。如實知自心實談。顯乘居地下。隔霧爲月障。眞言行者本住月宮。以霧爲月光。爲障拂之多。勞送年劫。爲光見之無煩。無經時。問眞言行者何自元住月宮乎。答教力勝知。無盡莊嚴恒沙已有。故大師言淺略門者教力劣。故頓不能引初心。凡夫深祕門者法力勝。故此生令得超昇佛位。

賴瑜法印の顯得鈔に曰く

此等法然本有義。勿猥謬自然等計。所以遮九種住心緣起妄假之色心談。性德果海本具輪圓之性相。故以遍計分別之情。謂不可圖想。以三密相應之智眼。獨應知見。

又曰く

此教意明。無盡莊嚴藏本具。故證自心實際。時萬德莊嚴自具云々。意云諸顯教所絕離。性德圓海法身內證三密四曼法云。無盡莊嚴藏也。此是性德果地法門不同。緣起因分之因果。故云當知眞言果悉離於因果也。若爾何同顯乘義耶。又

遮情遣迷之上表德顯實法然寧同<sub>二</sub>外道自然等計<sub>一</sub>乎所謂天臺一心三觀法門華嚴法界緣起具德雖謂<sub>二</sub>希有甚深<sub>一</sub>猶是他受用等四種言語九種心量正所<sub>二</sub>緣詮<sub>一</sub>之緣起因分三諦相即十支無碍之法也

今宗不<sub>レ</sub>爾於<sub>二</sub>彼祕教不能傳及果性不可說<sub>一</sub>更以<sub>二</sub>自性法身如義語<sub>一</sub>一心<sub>二</sub>能所<sub>一</sub>緣詮<sub>二</sub>之本有性德六大無碍四曼不離之義也故知雖<sub>二</sub>圓融名言似<sub>一</sub>同能緣詮言心既全別故宗家云如<sub>レ</sub>是絕離並約<sub>二</sub>因位<sub>一</sub>談非謂<sub>二</sub>果人<sub>一</sub>也又云諸教絕離密藏本分云々至<sub>レ</sub>如<sub>二</sub>彼判<sub>一</sub>理祕密同<sub>二</sub>者恐不<sub>レ</sub>知<sub>一</sub>如義語不二心<sub>二</sub>故也我等先德深達<sub>二</sub>此義<sub>一</sub>故於<sub>二</sub>理祕密<sub>一</sub>存<sub>二</sub>優降<sub>一</sub>也故大師釋云法佛三密四種言語不能<sub>レ</sub>及曼荼四身九種心識不得<sub>レ</sub>緣云雖<sub>レ</sub>然於<sub>二</sub>果海內<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>遮<sub>二</sub>六大事<sub>一</sub>相即四曼本有具德亦有<sub>二</sub>緣起<sub>一</sub>故大師判<sub>二</sub>眞生不<sub>二</sub>三門各有<sub>一</sub>法爾隨緣<sub>二</sub>二義<sub>一</sub>也若爾何亡<sub>二</sub>能化所化斷惑證理之道<sub>一</sub>矣故知今宗亦不可<sub>レ</sub>云<sub>二</sub>惣無<sub>一</sub>因緣生<sub>二</sub>因緣是佛家大宗故<sub>一</sub>云

顯教の諸教は凡て無明因分の域を出でざるものにして、密教は最初より果分を出立點とし、三密本有觀を立するものなることは、佛教學者のうちにも、其意を了解せるもの甚だ少なきやう見られ、祭長を厭はず陳述したのであるが、上來の叙述は凡て祖訓と先德の釋例に依るものである。但し顯教を學する人にして、密教は顯教と同じく、衆因緣無自性の原理に立つと見るが如く、密教内の學匠中にも、これと唱和したものがあつた。今それを叙する餘裕がないが、若しかゝる問題を研究せんとするものは、近くは元祿年間に同時代に出でて、阿字本不生説について、互に説を異にし、論議せられたる運啟、淨嚴等の諸師の書に依つて知るを便宜なりと思ふ。

密教は果分の法門にして、十界曼荼羅の實義を説き、衆生身心の本性、法身如來と同根一體なりと云ふは、深く緣起の實際を談するゆゑである。小乗佛敎は我等の身心は惑業に依つて感得したる苦果なりといひ、法相大乘は小乗の惑業の緣起説を認めながら、更に緣起の根底を深く尋ね、第八識所變なりといひ一乘敎は眞如緣起の義を明かす。但し後々の説は前説を否定するにあらずして、前説の不備を補ひ、所明益々甚深となるのである。即ち阿頼耶緣起説は小乗の業感緣起説を認めながら、深く緣起の根本を明かし、第八阿頼耶識の上に惑業の緣起を説き眞如緣起説は阿頼耶緣起を認めながら、阿頼耶緣起に即して不生不滅の眞如の緣起を明かすまでである。眞如緣起にては身心共に眞如一心の發現なりと云ふも、而も身心は眞如と無明和合し、無明有力に依つて生ぜし、妄的發現なり。しかして身心の中、心の本性は眞如一心と同體なるも、身は實在性なき迷妄たるを免がれず、さればかゝる説を根底としては即心の成佛を談じ得るも、即身成佛の義説き難し、即ち身心共に實在性を有し、身心共に實在の正當なる發現なる理趣顯れずば、即身成佛の義趣明かならず大師は即身成佛義を立せんとして、深く眞如法性の源底を尋ね、六大法身の祕義を開示せらる。こゝに於て惑業苦の緣起そのまゝ六大法身の靈相の發現にして、衆生の身心毘盧遮那法身なる祕義成せり。以上は即身成佛の義理の一端なるが、密教はかゝる義趣を説くのみならず、現身に即身成佛し得べき實修の法門あること、及び密教にも遮情の觀門として、從緣生無自性の義を明かす等叙すべきこと多きも、凡て次節に譲るで

あらう。

### 三 秘密の意義

佛教の經論の中に秘密の語を往々用ゐらるゝを見るが、法相宗の如きは三時教の初、二時を隱密説とし、第三時を顯了説として、密の語を却つて顯の言より劣れる意義に用ゐるも、多くの場合は高祖大師十住心論に

隨各各所愛所珍名之と釋せられたるが如く經論所明の宗として、尊重すべき理趣を秘密と稱するのである。

法華涅槃律藏等亦有<sub>二</sub>祕名<sub>一</sub>各隨<sub>二</sub>所望<sub>一</sub>得<sub>二</sub>斯名<sub>一</sub>耳律藏望<sub>二</sub>世間外道<sub>一</sub>得<sub>二</sub>祕名<sub>一</sub>法華約<sub>レ</sub>引<sub>二</sub>攝<sub>二</sub>乘<sub>一</sub>有<sub>二</sub>斯名<sub>一</sub>涅槃據<sub>レ</sub>示<sub>二</sub>佛性<sub>一</sub>得<sub>レ</sub>之世間外道經書中亦有<sub>二</sub>斯名<sub>一</sub>隨<sub>二</sub>各々所愛所珍<sub>一</sub>名之而已<sub>レ</sub>並是<sub>二</sub>小祕非<sub>一</sub>究竟說<sub>二</sub>大日經說<sub>一</sub>勝上大乗句心續生之相諸佛大祕密<sub>二</sub>約<sub>二</sub>祕密<sub>一</sub>有<sub>二</sub>大小<sub>一</sub>

各々經論の尊重すべき理趣を秘密といへば、秘密の意義實に淺深重々であるが、今解釋せんとするは、秘密眞言宗の秘密の意義である。眞言秘密教に無量の法門あり、また子細に檢すれば、教義の變遷開發あり、隨つて秘密の意義自ら一様ならざるも、究竟に約していへば、法身如來の身口意の妙體妙用これ秘密の體である。即ち法身の身口意は不可思議にして、その實相は等覺十地の菩薩も、なほ

見聞の境にあらざるが故に秘密と云ふ。而も如來所説の眞言即ち語密を秘密と云ふこと多し、これ眞言に無量の義趣を含し、因人の思慮を絶するゆゑである。

眞言梵曰<sub>二</sub>漫恒攝<sub>一</sub>即是眞語、如語、不妄、不異之音龍樹釋論謂<sub>二</sub>之祕密號<sub>一</sub>舊譯云<sub>レ</sub>咒非<sub>二</sub>正翻<sub>一</sub>也(大日經疏)第一

諸經中説<sub>二</sub>陀羅尼<sub>一</sub>或陀羅尼或明或咒或密語或眞言如是五其義如何陀羅尼者佛放<sub>レ</sub>光光之中所<sub>レ</sub>説也是故陀羅尼與<sub>レ</sub>明其義不<sub>レ</sub>異咒者佛法未<sub>レ</sub>來<sub>二</sub>漢地<sub>一</sub>前有<sub>二</sub>世間咒禁法<sub>一</sub>能發<sub>二</sub>神驗<sub>一</sub>除<sub>二</sub>災患<sub>一</sub>今持<sub>二</sub>陀羅尼<sub>一</sub>人能發<sub>二</sub>神通<sub>一</sub>除<sub>二</sub>災患<sub>一</sub>與<sub>二</sub>咒禁法<sub>一</sub>相似是故曰<sub>レ</sub>咒密語者凡夫<sub>二</sub>乘不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>知故曰<sub>二</sub>密語<sub>一</sub>眞言者如來言眞實無<sub>二</sub>虛妄<sub>一</sub>故曰<sub>二</sub>眞言<sub>一</sub>然皆是舉<sub>二</sub>一邊<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>名也(秘要記)

准<sub>二</sub>大日經<sub>一</sub>一切經必具<sub>二</sub>三種義<sub>一</sub>謂淺略深祕淺略則以<sub>二</sub>多名句<sub>一</sub>顯<sub>二</sub>其義<sub>一</sub>深祕<sub>二</sub>一字字具<sub>二</sub>無量義<sub>一</sub>又字相即顯字義則祕

(梵網經開題)

秘密の經に眞言あり、この眞言には、一字に無量の義趣を包含し、これを念誦すれば一念に三藏を具し、一唱に無量の重罪を消滅して、頓悟涅槃の深益あり、而してかゝる奥旨は、たゞ諸佛自證の境にして、因人の思慮を絶するが故に、眞言を稱して秘密と云ふ。

首首楞嚴經に

諸佛密咒祕密之法唯佛與佛自相解了非<sub>二</sub>是餘聖所<sub>一</sub>能通達<sub>二</sub>但誦<sub>二</sub>持之<sub>一</sub>能滅<sub>二</sub>大過<sub>一</sub>速證<sub>二</sub>聖位<sub>一</sub>

六波羅密經に佛教素怛纜、毘奈耶、阿毘達磨、般若波羅密多、陀羅尼門の五分に攝し、この五法藏を

乳、酪、生蘇、熟蘇、醍醐の五味に比し、第五の陀羅尼門を醍醐に配し、契經中に第一となすが如きは、これ前四藏の多名句に異なり、一字一文に無量の理趣を含し、一々の文字、これ入法界門なるゆゑである。

眞言陀羅尼の一字一文に如何なれば、かゝる無邊の義趣を含し、無量の功德を有するやと云ふに如來三大無數劫に積集せる功德力を以て加持し給ひしゆゑである。かく如來加持に依るが故に、眞言陀羅尼の文字は實に如來の加持身にして、無邊の功德を持するのである。

諸衆生入道因緣種種不同若應以文字語言得度者則如來不動實際以自在神力加持彼彼聲字而演說之若衆生如法修行得與三密相應時則知世諦不異第一義諦也(大日經疏第六)

復次世尊以未來世衆生鈍根故迷於二諦不知即俗而眞是故慇懃指事言祕密主云何如來眞言道謂加持此書寫文字以世間文字語言實義是故如來即以眞言實義而加持之若出法性外別有世間文字者即是妄心謬見都無實體可求而佛以神力加持之是則隨於顛倒非眞言也已知所加持處如來以何法加持耶謂以如來無量阿僧祇劫所集功德而作遍一切處普門加持是故隨一言名成立中皆如因陀羅宗一切義利無不成就云(大日經疏第七)

因緣生の俗諦の事法の中、即生即滅、殊に假法の義勝れたるは、聲塵の文字である。かゝる聲字を如來の三密に契證する法門とし給ひしは、これ眞俗二諦不二の理趣に迷へる衆生に、俗即而眞の義を知らしめんがためである。または云ふべし、此土の衆生は六根の中、耳根利にして、聲字により義趣を

了解し易き傾向あるゆゑである。但し如何に如來の威神力を以て加持せんとしても、加持せらるゝものから、即ち聲字本來實相法身の體でなくは、加持の義成せざるも、六塵本來法身の體なるが故に、よく加持し得らるゝのである。しかれば何れの國土の聲字に約しても、加持の實義成就し、文字即入佛道の法門、即ち眞言たるを得るも如來出世の跡、印度なるが故に、今悉曇の文字について眞言の實義を示すのである。

かくの如く、眞言陀羅尼はこれ如來の加持し給ひしものなるが故に、如來の加持身である、この加持身より、つひに本地身を知り、自己本有の無盡莊嚴を開見せしめんとして、この一字含千里の眞言陀羅尼の念誦を説くものは、祕密眞言宗である。

經云祕密主云何眞言法教者即謂阿字門等是眞言教相雖相不異體體不異相相非造作修成不可示人而能不離解脫現作聲字一一聲字即是入法界門故得名爲眞言法教也至論眞言法教應遍一切隨方諸趣名言但以如來出世之迹始于天竺傳法者且約梵文作一途明義耳經云謂阿字門一切諸法本不生故者阿字是一切法教之本若見本不生際者即是如實知自心如實知自心即是一切智智故毘盧遮那唯以此一字爲眞言也(大日經疏第七)  
如來一三昧門聲字實相有佛無佛法如是故即是故不流即是如來本地法身為欲以此法身遍施衆生故還以自在神力加持如是法爾聲字故此聲字即是諸佛加持之身此加持身即能普作隨類之身無所不在當知加持聲字亦復如是是故行者但一心諦緣觀此聲字自當見佛加持身若見加持身即見本地法身若見本地法身時即是行者



自身云(大日經疏第七)

多名句を顯教とし、眞言陀羅尼を祕密教とせば顯教と稱する釋迦如來所説の經中にも眞言陀羅尼あり、即ち大般若經、大寶積經、守護經、最勝王經等に神呪を説く。しかれば顯密二教の眞言陀羅尼に區別ありや。元來悉曇の文字一々に無盡の義趣を包含し、一々の文字入佛道の法門なり、如來の法門身なりと云ふは、この文字に即して佛法の第一義諦たる不生の實義を表はすゆゑである。しかるに小乘大乘、顯教密教等教法の淺深に隨ひ不生の意義に自ら異なりある。否不生の義を明かすに淺深の相違あるより教法に勝劣が生じたのである。不生の義を無自性、無相、空寂、眞如等の意に解せば顯教にして、不生不滅、法身常住等の表徳の義に釋せば密教である。眞言陀羅尼は各々不生の義を詮顯するも、その不生の意義に淺深ありつひに眞言陀羅尼に顯密の差別を見るに至る。十住心論第十に曰く

問毘盧遮那所説名祕密釋迦所説名顯教者釋迦説中亦有眞言及祕密之名與之何別

答釋迦所説眞言簡多名句得祕名彼眞言義亦迥機根量約祕密有大小眞言亦有大小故菩提場經云我名眞言亦名大眞言初眞言者應化身所説眞言次大眞言者究竟法身所説眞言問眞言與大眞言何別答譬如大乘與小乘若就淺略門説淺深云何不同且就初阿字釋世天乃至如來所説眞言皆有阿字是阿字本不生義於此不生有無量不生世間咒術眞言約除寒熱等病説不生護世四王眞言約疫癘等不起説不生帝釋眞言約十不善災橫不起明義梵王眞言約欲覺不起説不生大自在眞言聲聞眞言約盡無生智説不生緣覺眞言約十二因緣不起説不

生諸菩薩眞言約各各所通達説不生他緣乘約生法二空二障不生明義覺心不生乘約諸戲論不生説義一道無爲乘約無明不動明不生極無自性乘約

かく眞言の一々の文字に不生の義を明かす。而も不生の義に淺深重々あるが故に眞言に顯密の不同あることを示さんとして、第八住心まで釋し、第九十の不生の釋を缺く、何故に大師は第九第十の不生の釋を缺き給ひしや、御意付り知り難きも第九第十の不生の釋は近く前卷及び當卷の初めに出づるが故に、釋を略せられたるか。蓋し以上の世天、二乘、菩薩等の眞言の不生義の釋は、大日經疏第七卷の釋に依られたるものにして、疏に第九十の不生の釋文あるゆゑ、賴瑜法印は衆毛鈔に疏の文に準じ、第九十の不生の尺の闕略を補うて

應言極無自性乘約淨菩提心明不生祕密莊嚴心約大悲胎藏曼荼羅究竟不生明義

第十住心の眞言の不生の義、遮情表徳重々の説あるも、今は眞言の不生の義が祕密教の祕密の意なる旨趣の顯はるゝ、方面を釋するであらう。但し主として大日經疏及び高祖大師の御釋に依るのであるが、大日經疏には眞言の實義たる不生を釋するに中觀論等を引用し、因緣生無自性空の意に解せらるゝを往々見るのである。その表徳の釋に至つても釋相一準ならず、空と不空と畢竟平等にして一切の相を具す、これ大空三昧の義なりとの三諦圓融の理より釋せられ、或はまた眞言の不生は空なり、空の自性は不空なり、不空は淨菩提心なり、またこれ如來法身なり、或は眞言の不生はこれ無相法身

なり、この無相法身より無盡の身口意の三密門を示現す、或はまた眞言の字義たる不生は法身如來身口意平等の體なり、而して法界に遍在し、萬有を攝持せる法身の身口意の三密の體は唯佛與佛の自證の境にして、因人思慮を絶するが故に祕密と云ふ、かくの如く眞言の字義たる不生の表徳の釋に至つては、法身如來の身口意の三祕密の體を不生の實義となすものである。眞言はもとこれ語密の一法に名を得たるものなるも、其眞言の表する不生の實義は、三祕密の體なり、この眞言の表する法身如來の三祕密、これ祕密教の祕密の意義にして、密教は一切衆生に法身の三祕密を體得せしむる道を説くものである。

然此悉曇字母乃至世間童子亦常修習何能頓辦<sub>三</sub>如是事<sub>二</sub>耶然此諸字皆是如來以<sub>三</sub>加持神力<sub>二</sub>從<sub>三</sub>如來內證體性<sub>二</sub>而流<sub>三</sub>出之<sub>二</sub>故能有<sub>三</sub>是不思議業用<sub>二</sub>若人明解<sub>三</sub>此中意趣方便<sub>二</sub>即是通<sub>三</sub>達<sub>二</sub>三菩提道<sub>一</sub>也(大日經疏)第十四

眞言之體即是法界之體也若了<sub>二</sub>知眞言之體即同<sub>三</sub>法界<sub>二</sub>等<sub>一</sub>於大空<sub>三</sub>自然能得<sub>二</sub>無相三昧<sub>一</sub>故悉地現前當<sub>三</sub>生<sub>二</sub>如<sub>一</sub>是信解也(大日經疏)第十一

阿字門一切諸法本不生(中略)見<sub>三</sub>本不生際<sub>二</sub>者即是如<sub>三</sub>實知<sub>二</sub>自心如<sub>一</sub>實知<sub>三</sub>自心<sub>二</sub>即是一切智々(大日經疏)第七

此心即是佛心佛心者即是眞言心也(大日經疏)第十一

上來所說阿字門即是顯<sub>三</sub>示自身我<sub>二</sub>即我自身本不生亦無滅不生不滅者即是如來之身(大日經疏)第十九

以<sub>三</sub>如來身語意畢竟等<sub>二</sub>故此眞言相聲字皆常常故不<sub>三</sub>流無<sub>二</sub>有<sub>一</sub>變易<sub>三</sub>法爾如<sub>二</sub>是非<sub>一</sub>造作所成(大日經疏)第七

今此眞言門祕密身口意即是法佛平等身口意然亦以<sub>三</sub>加持力<sub>二</sub>故出<sub>三</sub>現子世<sub>二</sub>利<sub>一</sub>益衆生也(大日經疏)第七

祕密教の祕密は、眞言の表する不生の義なりとの聲字義等の釋に

阿聲呼<sub>三</sub>何名<sub>二</sub>表<sub>一</sub>法身名字<sub>二</sub>即是聲字也法身有<sub>三</sub>何義<sub>二</sub>所謂法身者諸法本不生義即是實相

聲字實相者即是法佛平等之三密衆生本有之曼荼也

二教論に祕密の意義、究竟に約していへば、法身の自境界なりとの釋と旨を一にするものである。

問若如<sub>三</sub>所談<sub>二</sub>者說<sub>一</sub>法身內證智境<sub>二</sub>名曰<sub>三</sub>祕密<sub>一</sub>自外曰<sub>三</sub>顯何故釋尊所說經等有<sub>二</sub>祕密藏名<sub>一</sub>乎又彼尊所說陀羅尼門何藏攝歟

答顯密義重々無數(中略)今謂<sub>三</sub>祕密<sub>二</sub>者究竟最極法身自境以爲<sub>三</sub>祕藏<sub>二</sub>又應化身所說陀羅尼門雖<sub>三</sub>是同名<sub>二</sub>祕藏<sub>一</sub>然比<sub>三</sub>法身說<sub>二</sub>權而不<sub>一</sub>實祕有<sub>三</sub>權實<sub>二</sub>隨<sub>一</sub>應攝而已

或はまた祕密教の祕密は眞言を念持し、種々不思議の悉地を得る、その不思議の果について云ふことある。即身義に大日經の不捨<sub>三</sub>於此身<sub>二</sub>逮得神境通<sub>一</sub>遊<sub>三</sub>步大空位<sub>二</sub>而成<sub>一</sub>身祕密<sub>二</sub>文<sub>一</sub>を引けり、此の經文

の身祕密を善無畏三藏は現身に五神通を得、虚空に超昇し、其身を隱没する、世間の悉地の意に解し、

大師は現身に法身如來の三祕密を得する出世の悉地の義に釋し給ふ。悉地の果に種多あることを本經

儀軌に示されたるが、蘇悉地羯羅經には上成就、中成就、下成就の三部に分ち、各部にまた種々の悉

地あるを明かす、大日經疏には世間出世等悉地無量なるも究竟に約していへば出世悉地、即ち法身の

三秘密常住の身を得るにある旨を述ぶ。

悉地有三衆多種、或世間或出世間或無量差別今此成就者即是出世間第一成就所謂成<sub>レ</sub>就第一常身、此常身即是諸佛金剛不壞身也(大日經疏第十二)

上來所述の如く、十住心論、聲字義、梵網經開題等の釋に依れば、秘密とは多名句を以て一義を顯す顯教に簡ひ、一々の字に無量の義を具する意である。而も一々の字々に具する無量の義趣とは、究竟に約していへば法身如來平等の三秘密身である。また二教論に依るも秘密とは法身如來の自體である。また即身義に依り悉地の果よりいへば、法身の三秘密を凡身に逮得するを密教の正意となすものである。

しかれば眞言宗の秘密とは、其體法身如來の三秘密身にして、この教の正意は一切衆生をして法身と同體不二の自覺を成せしめ、法身の本誓を己が本誓とし、法身に代つて如來の淨業を作す旨を明かすにあり。

#### 四 釋摩訶衍論

上述の如く秘密の意義にも種多あり、秘密の法門また無量なるも、大師は法身の三密を凡身に體得する即身成佛をその正意とし、この義を顯揚せられたのである。その即身成佛の實修門に至つては、

入壇面授の上にあらざれば説くを得ざるが故に、今其教相の一方面を敍するであらう。密教の正意を顯明する法門として、釋摩訶衍論の不二説、大日經の如實知自心、金剛頂經の四種曼荼、五智各具、高祖大師の三大圓融説あり、今此等諸説の梗概を記し、密教の正意を更に明かにしようと思ふ。

釋摩訶衍論は大乘起信論の註釋書である。起信論は華嚴宗の圭峰禪師の起信論註疏には、小始終頓圓の五教の中では、正しく終教の教義を説き兼ねて頓教の旨を示し、深く見れば圓教の義を含むと述べられしが、釋摩訶衍論も慈行、通法、普觀等の顯教の人の所釋に依れば、圭峰禪師の説と大差なく、華嚴五教の頓教終教の教理を明かすものと觀る。即ち眞如門は頓教、生滅門は終教の法門、立義分は不二の文あるも、不二とは不可説無相の果海、第五圓教の法門なりと觀る。

然るに大師は此論は華嚴の圓教以上、即ち圓教にてなほ不可説とする十佛の自境界たる如來果地の實相を明かすものにして密教の立脚點と根本義を開演せる密藏肝心の論藏とし給ふ。大師は此論に依り如何なる義を顯示せられたるやを知らんには。二方面より觀るを便宜なりとす。即ち一は顯密對辨門にして、一は自宗不共門である。先づ此論の如何なる法相に依り顯密對辨せられたるやを窺ふに、二教論には此論の五重の問答を引證せられ法相、三論、天臺、華嚴、即ち十住心の六七八九の住心の淺深を判せらるゝと共に、顯教は凡て無明妄執を帶せる因分の機根を本とせる教、密教は因分を超越せる如來果地の教にして、顯密二教因果二分の相違あることを示す。寶鑰にも五重問答の文を引證し、

四家大乘の淺深を判する憑據とし給ふ。なほ二教論には攝不攝問答、得不得問答及び金剛頂經の開題等には眞如生滅の二門、或は眞如生滅不二の三門の法相に依り、顯密二教の淺深を判す。即ち顯教の教たる眞生二門は祕密の不二門に攝せらるも、眞如生滅は不二門を攝するを得ず。

高祖大師の高範に依れば、釋論の不二は自性本地法身、祕密曼荼羅の自體にして、顯教の無相眞如の源底に本有の色心を開見し、十界の衆生の色心は本來毘盧遮那如來の智身なる祕義を説き無盡の色心の體性は各々其自體を動せず、而も無障無碍にして冥然同體をなし、多にして一、一にして多、この一多不二これ不二果海の實相なりとす。即ち顯教の教に依れば、一切衆生は生滅門の迷子にして、この生滅の自體たる五蘊の無自性空を觀じ、生滅の妄境を解脱し無相眞如に歸入すべき旨を明かすものである。然るに密教は最初よりかゝる生滅眞如の二門を超越する不二果海を開説し、この不二門のうち十界曼荼羅の建立を明かし一切衆生は生死の迷子にあらず、本來不二果海の眞際に住する曼荼羅の聖者たる理趣を説く、即ち顯密對辨門よりいへば、不二門のみ密教にして、眞如生滅の二門は顯教である。この顯密對辨門に依り密教は最初より高く如來の果地に住する道を示すものなることを知るべく、また眞如、生滅、不二の三門俱に祕密なる自宗不共門の釋に依り、果海に十界曼荼羅を建立し、而二(生滅)不二(眞如)の旨を示し、佛と衆生の感應加持を説き、現身に證得佛果地の理趣を開演する祕旨を思ふべきである。其自宗不共門の義は大日經開題、教王經開題、最勝王經開題、梵網經

開題、金剛般若經開題等に釋摩訶衍論を引き自宗不共の深義を明かす。これら釋相多端なれば今凡て省略す。

## 五大日經

大日經一部所説の法門深廣なれば、直に其法體指示し難く、これを疏の釋文に徴するより外なきが、疏の文に依れば、一部所明の法體として示されたるもの數義あり、今此等諸説を列擧し、つひに諸義あるも一經の大宗より考へ、最も根本的なものを提示せんと思ふ。

一、衆生の自心品を一部所明の法體とす。

此品統論經之大意所謂衆生自心品即是一切智智如實了知名爲一切智者文(大日經疏)第一

二、三句の法門を一部所明の法體とす。

佛已開示淨菩提心略明三句大宗竟即統論一部始終無量方便皆爲令諸菩薩菩提心清淨知識其心如三此經者當知一切修多羅意皆同在此如釋迦如來所説法者當知十方三世一切如來種種因緣隨宜演説法無非爲此三句法門究竟同歸本無異轍云云(大日經疏)第一

三、三平等句の法門を一部の法體とす。

如此時中佛説何法即是身語意三平等句法門言如來種種三業皆至第一實際妙極之境(山略)平等法門則此經之大意

也(大日經疏)第一

四、四阿を一部の法體となす。

眞言體阿上引暗喙是此四字義已說之中略此四字是此一部經中正宗體也一切祕藏皆從此生即是毘盧遮那佛心也

(大日經疏)第十一

五、阿尾囉吽欠の五字を一部の法體とす。

本經有三千五百偈說此五字義也(大日經疏)第十一

六、阿字を以て一部の法體となす。

疏の第十二、十四、十七、十九卷等所々に釋あり。

七、大悲胎藏曼荼羅を一部の法體となす。

疏の第一卷等

八、眞俗二諦不二を以て一部の法體とす。

統論權實之大綱故云常依於二諦即是論云諸佛說法常依二諦也然此經宗作種種具支方便皆隨世諦由此因緣得一切智智印即是眞諦是故世諦爲因眞諦爲果因如四味皆悉無常果如醍醐是則爲常然以十緣生句觀世諦實相即是第一義諦是故權實相即俱不可思議也此二句文雖簡略能令行者於一切如來方便無復餘疑故當觸類而長使貫通一部文義耳也(大日經疏)第五

九、大日如來自證化他、體用を一部の法體となす。

此義は一部の題目に依る。

以上九義の中に於て、其最も根本的にして一經に貫通する説は、第一に掲げし、自心を實の如く覺知するを一部の法體とする説である。疏の文に此品統論經之大意所謂衆生自心品即是一切智々とある、此品とは大日經六卷三十一品ある中の第一の住心品を指す、次に衆生自心品と云ふは品とは品類差別の義にして、衆生の自心に無量の心識を具するゆる自心品と云ふ。教の正旨は如來大覺位を成就するにあり、しかもその如來の體性何れの處にか求めんとする。究竟するに我等の心性に求むるより外なければ、如實知自心の開示ありしなり。疏の第六には心之實相即是毘盧遮那遍一切處といへり。

大師の十住心論には

經云云何菩提講如實知自心此是一句含無量義堅顯十重之淺深橫示塵數廣多

覺鑿上人の淨菩提心私記には

夫眞言淨菩提心是自性法身心地法界大日如來心王具體亦一切衆生色心實相普門海會平等種子

自心品の體性を釋するに至つては、疏には遮情の文多く、大師に表徳の説多し。疏に遮情の釋あるも、これ自心品の體の虛無なるにはあらず、我等の分別事識の認識の境にあらざるを示されたものである。

或有説言若如是者便是無因無果墮斷滅見者此亦不然但離業生之性既離業生即有法性之生等於虛空虛

空無邊故當知所成功德利衆生事亦無邊無盡故非斷也(大日經疏)第十六

今此菩提之性(中略)離於因緣實相常住即是大日如來之體云何不離生死耶(大日經疏)第十九

阿字大空三昧に住し、煩惱業生の生死の生を離れ法性の生たる法身常住の生命を得、如來無礙の靈的境界に入る。これこの經の大宗にして、本經所明の教の本體につき諸説あるも、この義を本とすべきである。

衆生の自心品即是一切智々の説を主とし、諸義を融會該攝せんに、衆生自心を一部の法體とすると、三句の法門を一部所明の法體とするとは、兩義一應の相違あるも、つひに一致に歸するのである。

三句とは菩提心爲因、大悲爲根、方便爲究竟にして、自心は一切智々を堅に開見する道を示せし法門である。菩提心爲因とは自心の心地に住するを云ふ、本初不生の自心の心地に住するとき、業生の生を離れ、法身の生を得、萬行の功德、これより増長するが故に菩提心爲因と云ふ。大悲爲根とは三密加持の妙行、其他の萬行を云ふ。この修行に依つて菩提心爲因の自覺をして愈々堅固ならしめ、純熟ならしむ、疏には爲令如是淨信心堅牢增長經中次説大悲爲根と釋せり。方便爲究竟とは大悲爲根の萬行成就し、無上の佛果を究竟せしを云ふ。この三句の法門は從因至果、從果向因の法門の始中終を盡す、しかして從因至果の法門は行者の淨菩提心の徳を別開せしものなるゆゑ三句の法門は衆生自心の外なし、即ち三句の法門の法體は非因非果の絶對體である。この非因非果の一心の體を因果の

二位に開き三句とせしものである。三句は因行果にして、行は因に屬するゆゑ、三句は因果の二位である。かく非因非果の法門を因果三句と開くは、因果の法門に依つて非因非果の絶對一心の法體に契はしめんが爲である。

次に三平等句の法門を一部の法體となすと云ふは三平等とは三密の法體である。此三密は體相用の三大に依つて、其分齊異なることあるも、今の三平等とは聲字義の法佛平等之三密、衆生本有之曼荼也と法體を同じうす。しかれば三密平等の法體は即ち衆生自心の體にして、衆生の自心即三密平等の體性である。

大日經疏には自心の體性は無相寂滅にして三密の差相を絶す、この自心本地の無相法身より、無盡の三密門を示現し、この三密門を修して、無相の本地に契ふ遮情の釋多し、而もまた自心の體性は身口意三密平等の體なる表徳の釋を往々見るのである。

即得身口意平等之地身及語意皆是法界之體無有邊際(中略)由此身口意三道眞言故如來得超入三平等地隨上中下類普門示現種種本尊之身種種眞言種種印等同虛空無有其分限普周法界而度群生究竟皆令同得超入如是三平等地也(大日經疏)第十四

一切法佛法身成佛入身口意祕密之體一切有心無能及者(大日經疏)第十  
眞言行者以初三昧耶故得同如來祕密身口意平等之身(大日經疏)第九

如來種種三業皆至第一實際妙極之境（大日經疏第一）

高祖大師の御釋に至つては、更に表徳の意義を明かに説示せられ、吽字義等には一心本法を本有三密、三密本法等を釋せらる。しかれば三平等句の法門を法體とすと云ふ説と、自心品を法體とすと云ふ義と旨趣一に歸するのである。

但し三密とは表て用大の法門である。而して大日經一部所明の法體は此用大の三密なりとも觀らるゝも、用大修生の三密に依つて本有の三密、即ち一心の本性に契證する道を明すと觀るべきである。

私謂上來經文大意不過此行謂口眞言身法印意觀佛也然此三事皆緣生法緣合而有都無自性不生不滅即是阿字之門法界之性凡夫不知云何得入故佛先説此三眞言門漸得三昧乃至親親本尊見種種神變之境猶是心有所着不得三平等住今説入三平等法門若行者於瑜伽心中而復能如是觀察離於身口意分別戲論即得現前而證眞言實相同於佛住自體常住同於如來也（大日經疏第二十）

疏に自心品の實相は、信力堅固にして、三密の方便力によつてのみ入るを得、もし分別思慮を以て、如實に知らんとするが如きものあらば、つひに狂を發するに至らんとしへり。

此心性非一切世間聰慧利根者所能思議假令長爪梵志等諸大論師以種種因緣譬喻莊嚴比況量度終自非其境界苦思惟求徒令發狂獨有信力堅固者依此祕密方便乃能入之耳（大日經疏第五）

次に阿阿暗喑の四阿を一部所明の法體とする説について述べんに、四阿は因行證入の四點にして四佛四智の内證である。而して此四佛四智の總體が中央法界體性智である。この法界體性智、佛陀義に

約すれば本地法身にして、衆生邊に約すれば我等本有の菩提心體である。この本有の一心を開いて、因行證入の四佛四智として示せしものは四阿である。されば大日經一部所明の法體は四阿なりと云ふと衆生自心品なりと云ふは旨趣を同じうするものである。

次に、阿尾囉吽欠の五字を一部の法體となすと、自心品を一部の法體となすと意を同じうす。即ち五字は五佛五智の内證にして、この五佛五智はこれ衆生本有の菩提心體の外ならず。

次に阿字門を一部の法體となすは、阿字本不生の體は衆生の自心品である。故に阿字を一部の法體となすは、自心品を法體となすと同意である。

次に大悲胎藏曼荼羅を一部の法體となす義は、これまた衆生自心品を法體となすと旨趣を等うするものである。蓋し大悲胎藏曼荼羅は、これ衆生の心地に建立せるものにして、衆生自心の全體である。

大日經疏に

佛從平等心地開發無盡莊嚴藏大曼荼羅已還用開發衆生平等心地無盡莊嚴藏大曼荼羅文

次に眞俗二諦不二を一部の法體となす説も、自心品即是一切智々の義と旨を同じうするものである眞諦とは如來の心地、衆生の本心である。教の本旨は一切智々の自體たる、心内祕密の曼荼羅に直入せしむるにあるも、劣慧の衆生は、かゝる無相頓大の法門に堪へざるが故に、如來加持三昧に住し、不思議神力を以て、佛身の支分より四重曼荼羅の聖衆を現じ、或は有相の壇を設け修行入證の、方規

を示されたものである。而して大日經には世諦加持の曼荼羅に屬する説多きも、これ眞諦の本地一心に契はしめんがためである。即ち世諦の曼荼羅に即して、本初不生の心地を開見せしめんとするものである。

次に大日如來の自證化他、體用の功德を以て一部の法體とすと云ふ説も、究竟してへば自心品に歸す。大師は經題の大毘盧遮那成佛神變加持經を釋して、是れ諸佛之大祕衆生之極妙といひ、經には云何菩提謂如實知自心を轉釋して如來應正等覺非青非黃等と説き、自心の體と如來と同一に示せり。しからば大日如來他なく、衆生本覺の心蓮なり。されば大日經一部所明の法體につき釋文重々なれども要をとつていへば胎藏理界の法門衆生本有の因徳を説くと觀る義を本とすべきである。

### 六 金剛頂經

金剛頂部の經軌に種多あるも本宗所依の根本經典として金剛頂部を代表せるものは金剛智三藏所譯の『金剛頂瑜伽中略出念誦經』四卷及び不空三藏所譯の『金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經』三卷である。略出經は金剛頂十八會の中、初會の四大品を略出したるものにして、教王經は初會の四大品の第一金剛界品の中に、六曼荼羅を明す中の、大曼荼羅の一分を譯出したるものと稱せらる。此兩經を對比するに、其文相異なるも、所明の理趣に至つては一である。即ち五智圓具の毘盧遮那如來より

三十七尊等諸尊の緣起を明かし、五相成身を説き行者曼荼羅に入つて、如來の三摩地を修せば、現身に成佛せらるべき祕旨を開演せるものである。

金剛頂瑜伽修習毘盧遮那三摩地法に曰く

歸命毘盧遮那佛。	身口意業遍虛空。	演說如來三密門。	金剛一乘甚深教。
我依瑜伽最勝法。	開示如實修行處。	爲令衆生顯眞實。	頓證無上正等覺。
弟子堅固菩提心。	從師已受灌頂位。	妙修定慧恒觀察。	深入業用善巧門。

金剛頂經開題に不空三藏所譯『金剛頂瑜伽經十八會指歸』の文に依り金剛頂十八會の大意を叙して曰く

此十八會瑜伽或四千頌或五千頌或七千頌都成十萬頌。具五部四種曼荼羅四印、具三十七尊。一部具三十七。乃至一尊成三十七。亦具四種曼荼羅四印。互相涉入如帝釋網珠光明交映展轉無限。一一佛等身分。一一毛孔。一一相。一一隨形好。一一福德資糧。一一智慧資糧。住於果位。量同虛空。然各各分齊各不雜亂。同證四身。所謂自性身受用身變化身等流身。若修行者普通達此理趣與本尊三摩地相應即與如上諸尊平等無異。

金剛頂經一部所釋の法體につき、慈覺大師は『教王經疏』に

正明經體者爲一。謂總別體。初總體者是即本有阿字。一部之指歸。衆義之都會也。

即ち大日經と同じく阿字本不生を經體とするものである。但し兩部の大經所明の法體同一なりと觀るは、慈覺大師に始まりたるにあらず、かの無畏三藏の『三種悉地儀軌』に曰く



然毘盧身土依正相融。性相同一。眞如遍滿法界。大我身口意。平等如太虛空。以虛空爲道場。以法界爲床。大日如來爲令見此道。示二種法身。智法身佛住實相理。爲自他受用。現三十七尊。令一切入不二之道。理法身佛住如寂照。法然常住。不動而動。現於八葉。爲自他受用。示三重曼荼羅。令十界證大空。雖是理智之殊。廣略之異。本來一法會無殊異。萬法歸一阿字。五部同一遮那也。

これ兩部大經は理を表とし、智を主とするの相異あり、金胎曼荼羅の不同あるも、其法體は人に約していへば毘盧遮那法身、法に約していへば阿字本不生の理なることを示すものである。

不空三藏の『金剛頂瑜伽經十八會指歸』に

此經中於自身上。建立曼荼羅。說自身本尊瑜伽。廣說阿字門。通達於染淨有爲無爲無礙。或はまた

此中說生死涅槃世間出世間自他平等無二。動心學目。聲香味觸。雜染思慮。住亂心。皆無二同眞如法界皆成一切佛身。

これ等は金剛頂經も大日經と同じく、阿字無相の理を法體とすることを明かすものである。

即ち其所明の法體は非因非果の絶對體にして、因果不二、理智不二、人法不二、色心不二、依正不二、凡聖の不二の體である。而も兩部相望すればさきに大日經所明の法體について辯じたるが如く大日經は衆生自心品一切智智の因心本具の極致を明かし、金剛頂經は五智現證の毘盧遮那如來の果體を

法體とすといひ得らるゝである。即ち大日經一部所明の法體たる衆生自心品の體は本來不生不滅、相として具せざるはなく、徳として圓かならざるなく、萬法を融攝せる法界體にして、金剛頂經に説く五智圓具の本有の菩提心體である。かく兩部大經共に無相の菩提心を體とす。而して大日經にては阿字といひ金剛頂經にては鑊字と云ふ。法體同なるも大日經は衆生の因心を表とし、金剛頂經は本有の五智を現證せる果體を本とす。大日經は實に初地菩提心の因の至極を説けるものなるゆゑ、十地佛果の釋あるも、十地佛果の相は金剛頂經の十六生大菩薩の地位に譲りて、委釋を缺き、また曼荼羅建立より觀るも、三句の中、因の句を本とす（臺實爲因の因にして密號名字の因なるも）即ち中台を因とし、第二重第三重に根、究意を配するものである（しばらく從果向因につく）

素より自心の體は理智不二、色心不二、因果不二の體にして迷悟、染淨の法を攝す。故に色、理、因を表とすと云ふ胎藏にも、心、智、果の説あり、心、智、果を主とする金剛界にも、色、理、因の義あり。この理智、色心の法を釋するに一往再往の二門あり、一往は理智を兩部、本有修生、因果に分つ。前述の如く理、色は因にして胎藏、智、心は果にして金剛界の法門である。再往は色心、理智に各々因果、本有修生を具し、兩部本有の理を以て宗の極理となすのである。故に法の本源に兩部曼荼羅を建立し、十界迷悟の諸法各々萬徳を具し、法界曼荼羅を建立せる祕旨を説くのである。されば胎藏は迷の極に居し、中台大日の一身に四重圓壇の無量の聖衆を集聚し、また金剛界は果の極に居し、

上方一印會大日の一身に九會別尊の無量の身を集聚し、生佛迷悟同じく十界人法の徳を圓具す、これ  
兩部曼荼羅の性徳にして、因果迷悟の相を動せず、因果不二の實義を極成す。

金剛頂經所明の法體は非因非果の絶對體なるも、兩部相望せば台藏は因心を本とし、金剛頂經は五  
智を現證せる毘盧遮那如來の果體を本とすることは上述の如くである。而して金剛頂部の法門は無量  
なるも、五智、五部、四曼、四印、五相等を出せず、此等の意義を知れば、自ら金剛頂部の所説を解  
せらるゝが故に、こゝに其綱要を述ぶるであらう。

大師は『金剛頂經開題』に『釋摩訶衍論』體相用三大の法相を以て大教王の義を釋せられ、慈覺大師は  
『金剛頂經疏』に『法華玄義』の名、體、宗、用、教の五重玄義に準じ、釋せられたるが、體相用の法相  
に依れば經意を闡明するに便宜なるものあるゆゑ、今も三大の法相を用ふることにする。

慈覺大師は此經は本不生の理を體とし、因果を宗とし、五智を用とすと釋せらるも、今は本有の五  
智を體とし、四曼四智印を相とし、五相を用として釋せんとす。素より此等の法門、各々多義を含み、  
一概に釋述し得られざるも、高祖大師の三大の法門と一具に解せば、五智は體大、四曼四印は相大、  
五相は用大にして、五部は五相の祕觀に住し、本有の五智、四曼を現證せる曼荼羅の諸尊を分類せる  
ものなるべきか。

大日經には阿字本不生、これ人法の本源にして、十界の人法皆阿字無相法身より生ずる旨を明かす

も金剛頂經は多く五智五佛これ法界の體性なる義を説く、大師の『金剛頂經開題』に曰く

密義五智佛名一切如來聚一切諸法共成五佛身故。此五佛則諸佛之本體諸之根源。云云

左に掲ぐる『金剛頂大教王經』及び『瑜祇經』の文等は、毘盧遮那如來は五智を成就し、また五智を依報  
正報の體とせる理趣を開演せるものである。

一時。婆伽梵。成就一切如來金剛加持殊勝三昧耶智。得一切如來寶冠三界法王灌頂。證一切如來一切智智瑜伽  
自在。能作一切如來一切印平等種種事業。於無盡無餘一切有情界一切意願作業皆悉成就。大悲毘盧遮那。一時。  
薄伽梵。金剛界遍照如來以五智所成四種法身。於本有金剛界。自在大三昧耶。自覺本初。大菩提心普賢滿月。不  
壞金剛光明心殿中。云云

人法不二を宗極とするも、左の『三十七尊出生義』の文の如きは、五智より五佛等の人の出生する義を  
明かすものである。

由大圓鏡智。厥有金剛平等現等覺身。則塔中方東阿闍如來也。由平等性智。厥有義平等現等覺身。即塔中方之  
南寶生如來也。由妙觀察智。厥有法平等現等覺身。即塔中方之西阿彌陀如來也。由成所作智。厥有業平等現等  
覺身。即塔中方北不空成就如來也。由四如來智。出生四波羅密菩薩焉。蓋爲三際一切諸聖賢生成養育之母。於  
是印成法界體性智。自受用身即塔之正中毘盧舍那如來也。

大師は『寶鑰』に

五相五智法界體。四曼四印此心陳。

といひ、或は『即身義』に

法然具足薩船若。心數心王過利摩。各具五智無際智。

これ等の文は五智を法界の體性とせるものである。即ち金剛界は心法を本とし、其心法に無盡の性徳あるも、五智に攝盡す、これ五智を體とすと云ふ所以である。

五智一一の名義釋を略し、五佛、五相、五部等の相配を示し、其網絡を述ぶるにとゞむるであらう。

五智	五部	五佛	五相
法界體性智	佛部	大日	佛身圓滿
大圓鏡智	金剛部	阿闍	通達本心
平等性智	寶部	寶生	修菩提心
妙觀察智	蓮華部	無量壽	成金剛心
成所作智	羯磨部	不空成就	證金剛心

五智は而二門よりいへば、五佛の體なるも、不二門よりいへば、一切の佛各々五智を圓具し給ふ。

この五智の性徳を知つて、如來の本性を思ふべきである。即ち本有三密の體性(法界體性智)は、大圓鏡の如く靈用を(大圓鏡智)を發し、平等にして自他彼此の我執を離(平等性智)れ、一切の機を觀し説

法無礙(妙觀察智)にして、大悲化他の妙業無窮(成所作智)なり、かゝる五智の性徳を具する靈格體、これ毘盧遮那本地法身にして、一切の如來皆この五智を具し給ふ。『大日經』には如來とは、發心、修行、菩提、涅槃、方便爲究竟の五轉圓具の體なりといひ、『金剛頂經』にては如來とは五智圓成の體なりと説く、以て本地大日如來は自證化他圓滿の無限の靈格體なることを知らるゝであらう。而して金剛界曼荼羅には三十七尊等無量の尊居ますも、皆これ毘盧遮那自性法身の五智無際智より現せし尊にして、隨つて無數の諸尊皆毘盧遮那と同體である。經には毘盧遮那如來より三十七尊等次第出現の義を説くも、これ毘盧遮那如來同時俱時に現證し、各々徧照光明毘盧遮那と同體なるを、且らく次第して明かせるものである。左の『金剛頂瑜伽分別聖位修證法門』の文を讀まば其祕旨自ら會せらるゝであらう。

毘盧遮那佛。於内心證得自受用四智。大圓鏡智。平等性智。妙觀察智。成所作智。外令十地滿足菩薩他受用。故從四智中流出四佛。各住本方坐本座。

毘盧遮那佛於内心證得五峰金剛菩提心三摩智。自受用故。從五峯金剛菩提心三摩地智中。流出金剛光明。徧照十方世界。淨一切衆生大菩提心。還來收一聚。爲令一切菩薩受用三摩地智故。成金剛波羅密形。住毘盧遮那如來前月輪。(中略)若依次說前後有差。據報身佛頓證身口意三種淨業。徧周法界。於一一法門一一理趣一一毛孔身分相好盡虛空界不相障礙。各住本位以成徧照光明毘盧遮那自受用身他受用身。若依二乘次第

而説。若不具修三十七菩提分法。證得道果。無有是處。若證自受用身佛。必須三十七三摩地智。以成佛果。梵本入楞伽偈頌品云自性及受用。變化并等流。佛德三十六。皆同自性身。并法界身。總成三十七也。

四曼 四種曼荼羅は金剛界の法門にして、九會曼荼羅の建立は、四種曼荼羅に依り、十八會の曼荼羅同じく四曼に攝入す。而して四曼は法界の自性に住するが故に、三大横平等の義よりいへば、五智四曼共に、法界自性の體なるも、一應豎差別門よりいへば五智は體大、四曼は相大なりと云ふことを得、即ち四曼は廣く十界の人法の差相を盡くすも、佛身についていへば、五智圓成の如來の無限の徳相を四種に分ちしものである。即ち大曼荼羅は相好具足の如來の身體にして、法曼荼羅は如來の内證、本誓、三摩地である。三昧耶曼荼羅は本誓、三摩地の外に顯れたるものにして、羯磨曼荼羅は上の三曼荼羅の作業なり、五智の最極は成所作智の化他大悲の妙用にあるが如く、四曼の最終の羯磨曼荼羅もまた化他大慈悲の妙業である。

相好具足、智慧圓滿の佛格は四曼相大の位に、始めて顯現せるものにして、五智體大の位に存せざるもの、如く説くものもあるも、六大體大に佛形を見る宗義よりいへば、五智の本性に佛格を見る義を可とす自宗は人法不二を宗極とするも、五智も四曼も寧ろ人の義勝れ、其終極、慈悲の妙業妙用あり、其眞趣思ふべきである。

五相 さきに五相を用大に配せしが、五相は即ち種子、三形、尊形の縁起にして、金剛界にては、

行者の始覺上轉、修行入證も、また如來の本覺下轉、衆生攝取の妙用の示現も、この種三尊の次第に依るこれ五相を用大に配せし所以である。五相は經軌に依つて其名目同じからざるも、『十八會指歸』に依れば、通達本心、修菩提心、成金剛心、證金剛心、佛身圓滿なり、一一の釋を略し、たゞ其綱要を述せんに、初めの二相は月輪觀にして、種子の位である。即ち圓明の月輪、自心菩提心を觀す、これを阿字素光の體の故に種子とす、即ち心法は法曼荼羅にして、また字門不可得の體、圓明の心月輪なるが故に、月輪觀を種子に配す。次の二相は如來の三摩耶身を觀する位にして、第五の佛身圓滿は相好具足の佛身を觀成するを云ふ。かくの如く種三尊開立の功德を名けて五相となす、因縁生法、無自性、寂滅平等觀に住するとき、諸佛の警覺開示に依り、無識身三昧より立つて、月輪觀を修し、清淨圓明の菩提心體に通徹し、如來の三摩耶身を觀じ、圓滿なる佛格を現證するに至る、道を豎に示せしものである。

かく五相は行者趣入の方規にして、一切如來この種三尊を圓具し給ふ、而して如來、無盡の衆生界に應同し、無邊の加持身を示現し、化他大悲の妙用を成じ給ふも、また此種三尊の縁起の次第に依るものである。『略出經』や『教王經』に五智圓滿の大菩提心、毘盧遮那如來眞如法界智より諸尊の縁起を明かす文あるが『金剛頂義訣』にはこの一尊々々の出生の經文を依因、顯本、顯相、顯力、還源、顯智用、示相、明德、顯實、普現、感應の十二に分ちて釋せり、經意に固より種多の義存するも、この經

文種三尊の緣起として觀ることを得、(牒文及び解釋を略す)されば種三尊、即ち内證三摩地(種子)働きたつて外に現れ(三形)人格化する(尊形)に至る過程は、これ行者進修の道程にして、また如來の化他の業用も、この法門に依るものである。これ五相、即ち種三尊の印現を用大に配せし所以である。

なほ自宗の實義よりいへば第一の通達本心にて自證圓滿し、第二以下はこれ化他の徳を成ずるものなれば、始覺上轉即本覺下轉の二轉同時具足の實義を知り得らるゝのである。

已上は金剛界の法相無量なるも、五智、五部、四曼四智、五相にて其大綱を盡し、五智は體、四曼は相、五相は用なることを釋せしが、こは其義を解し易からしめんがための一途の説である。重々無盡の玄旨を明かす華嚴經は金剛頂經の淺略なりと稱するが華嚴の事々無碍はこれなほ因分中の説、金剛頂經は不二性海果分の上に一多無碍自在の義を開説し、直に融即自在の義を示すものである。隨つて五智、五部、四曼、五相等一法を擧ぐるに一切を具し帝網重々の實義を成せるのである。即ち五智各々五智乃至無盡無數の智を具し、五佛三十七尊等の曼荼の諸尊各々五智三十七智を具し、四種曼荼羅四智印を具し、五部を具し、而も互相涉入無碍自在の理趣を成せるのである。たゞに已成の如來にかゝる無限の徳相を具するのみならず、未成の衆生も法爾として、この理趣を具せるのである『十八會指歸』に曰く。

一 一部具三十七。乃至一尊成三十七。亦具四曼荼羅四印。互相涉入如帝釋光明交映展轉無限。修行者善達此

瑜伽大意。如徧照佛。

大日如來の自性清淨法身法界に周遍し、十方三世の一切如來も亦復此の如きを觀じ、自身金剛薩埵の如くにして、法身と一如の理に住するとき如來の果位に證入すべきを明かす。『十八會指歸』に曰く

愚童覆無智、 不知此理趣、 餘處而求佛、 不悟此處有、  
十方世界中、 餘處不可得、 心自爲等覺、 餘處不説佛

『金剛頂經瑜伽修習毘盧遮那三摩地法』に曰く

修真言者以本尊堅住己身故。現世所求一切悉地。所謂最勝悉地。金剛薩埵悉地。乃至如來最勝悉地。

本尊の三摩地を修し、悉地を現證する實修門は、こゝに記せざるも、左に行者の觀心を明かす不空三藏の口訣を抄出す。

國師大三藏和上。於含暉院承明殿大道場。頃因餘暇披讀梵經。忻然熙顔法樂虛適。開大慈之戶。誘諸童蒙。大啓良緣。令使知見。我之祕教浩汗無涯。法體幽微實難窮際。今且依瑜伽教跡。略爲指南。眞言行門爰開。理趣。今說能觀毘盧遮那佛報身是。所觀四智如來也。能觀是四方如來。所觀是十六大菩薩也。能觀是心。所觀是境。八供養及四大護菩薩等各具能所。雖具能所。能所之體本空。空有之理本無中道之心斯契。今此建立金剛界三十七尊大曼荼羅及賢劫千佛外金剛部二十天及四十天等。此爲初原。展轉相生無量曼荼羅也。

又曰く

次入ニ空無相無願解脫門ニ者。所謂空者一切法皆空。空ニ體亦空。空亦不可得也。無相者地水火風男女等相并青黃赤白。於此十相。一切萬法學レ體皆空。以爲一切相空不可得也。無願者凡所修道。絶ニ三界希望之心。有所願求。皆是有相。永絶ニ妄想。斷所願求之心。無願無求。是真解脫。由此三相空故。即入解脫法門ニ悟ニ斯正理。即身有光明。廓周ニ法界。即同ニ毘盧遮那正體智也。皆由誦ニ祕密眞言結此密印。即入ニ三密觀解脫門一境一心當ニ證悟。云云（金剛頂瑜伽略述三十七卷心要）

### 七 兩都大經の正意

上

さきに眞言宗所依の根本經典たる大日經、及び金剛頂經の所明の法體について釋するところありしが、以下兩部の法門を一味に觀て、其正意を述ぶるであらう。しかして現流布の經本の傳來、釋相等につき、敍すべきこと多きも、今は直に其所詮の理趣に入らうと思ふ。

上に兩部大經は本不生の一心を法體とすといひ、或は大日經は衆生本具の因心を體とし、金剛頂經は智法身の果を本とすることを明かせしが、密教は本不生の一心を教の本體とするものである。その一心に寂と照、理と智との二徳あり、宛も珠と光との如し、この寂と照、理と智との不二の體、これ一心の體である。不思議疏に

本不生理自有ニ理智ニ自覺ニ本不生といひ

即身義に

圓明心鏡。高懸ニ法界頂。寂照ニ一切不倒不謬。

雜問答に

理者阿字 本不生理也。此理處有ニ本覺智。智不離理理不離智。如ニ珠與光。

本不生の一心はかくの如く、理智不二なるが故に、理も智を全うする理、智もまた理を離れざるの智である。大師はこの一心を六大と開説し給ひしが、五大はこれ理、識大はこれ智である。本不生中の理智は理智一體である。即ち五大の靈照は識大にして、識大の妙質これ五大である。尊勝佛頂修瑜伽法軌儀に五輪即是五智輪と云ふものこれである。この本不生の理智一心、六大一實の體はこれ兩部曼荼羅、本有因果の體である。智は光照の故に平等に法界に遍じ、萬徳を開顯し、果徳の體性に住し、理は萬徳を攝持して各々自性を守り、本有の因徳に住す。因果共に本有にして、兩部共に眞實である。理智一心、本因本果これ兩部の法體である。なほ兩部理智に關する祖師の釋文を引用せんに、無盡莊嚴藏三昧念誦次第に云く

理之上發レ智名ニ智法身。智之下顯レ理名ニ理法身。所以理智ニ身無ニ平等也。譬如レ有レ珠。珠即體云レ理。珠光云レ智。

眞言問答に云く

阿字理智本來法然。此所證理智即名本覺。理智雖二其名二而其體一雖其體一還有二名。得名之由顯然而已。梵網經開題に云く

能入則智。所入則理。理智雖二名體性是一。決斷簡擇名智。不亂攝持曰理。以色攝心心則所攝。以心攝色心則能攝。色心名別並是一體。

性靈集に云く

縛曰羅也者智。鉢納摩也理。智能照物有功。理即攝持無亂。攝持故大身孕怯界而無外。光照故廣心吞虛空。以無中。理智非他。即是我身心也。

即身成佛義に云く

四大等不離心大。心色雖異其性即同。色即心。心即色。無障無礙。智即境。境即智。智即理。理即智。無礙自在。

寂照不二、理智一心、本因本果これ兩部曼荼羅の體性である。質多、干栗駄心月心蓮法爾として、衆生の胸中に住するも、無明の迷妄これを覆ひ、本有の曼荼羅を自證せざるが故に、大日如來此道を一切衆生に知見せしめんとして、開顯せるものは、加持隨縁の曼荼羅である。所謂、三種悉地儀軌に大日如來此道を知見せしめんがために、二種の法身を示す、智法身の佛は、實相の理に住して、自他

受用のために、三十七尊を現して、一切をして不二の道に入らしむ。理法身の佛は、如々寂照にして、法然常住なれども、不動にして動じ、八葉を現じて、自受用のために、三重曼荼羅を示し、十界をして大空を證せしむ。これ理智の殊、廣略の異なりといへども、本來一法にして、曾て殊異なし。

かくの如く兩部の曼荼羅、兩部の法門は、毘盧遮那如來の果體より顯現せるものなれば、兩部共に果曼荼羅にして、等しく從果向因なれども、理智兩部相望せば、金剛界は五相成身觀に依つて五智を現證せる智法身所現の曼荼羅なれば、これ果曼荼羅にして、胎藏は因曼荼羅なりと云ふことを得。即ち胎藏曼荼羅は理法身の所現なるが、理法身とは生佛不二の本不生の理である。されば大日經には摩訶薩意處說名漫荼羅と示し、大日經疏第十二卷に此文を釋して

心處亦可名爲心位。即指此衆生自心之處即一切佛大悲胎藏漫荼羅也。

同疏五卷に曰く

內心妙白蓮者。此是衆生本心妙法芬陀利華秘密標幟。花畫八葉圓滿均等。如正開敷之形。此蓮花臺是實相自然智惠。蓮花葉是大悲方便也。正以此藏爲大悲胎藏漫荼羅之體。

兩部を因果に分つことは、上述の如く佛身についていへば、金剛頂經は智法身を本とし、大日經は理法身を體とす。これを如來眷屬の上首たる金剛手について觀るも、胎藏の金剛手は、本有の三密を任持する尊にして、金剛頂經の金剛薩埵は、警覺開示に依り、無職身三昧より起て、五相成身、始覺の

佛果を成する尊である。かゝる義門より見るも、兩部は本有、修生、因果の分別一應なし得らるゝのである。即ち兩部は法爾實相門より云ふも、本因本果、因果の分別あり、加持隨縁の曼荼羅より觀るも、因果兩部の義がある。但し祕密の因果は、不二果海中の因果なれば、兩部共に因果を具す。隨つて金界を因曼荼羅とし、胎を果曼荼羅とすると共に、金を果曼荼羅とし、胎を因曼荼羅と云ふことがある。されば胎金兩部因果分別は、一應の説と知るべきである。

なほ高祖大師の體相用三大の教義より觀んに、兩部不二の義は三大に互つて談じ得らるゝのである。六大體大よりいへば、前五大を以て胎藏となし、第六識大を以て金剛界となす。四曼相大よりいへば、現圖の月輪、蓮華の曼荼羅これである。金剛界は法界月輪を以て、能生の體として、三十七尊等の諸尊を出生し、胎藏は八葉心蓮を以て體とし、四重圓壇の諸尊を出生す。しかして兩部不二の故に、理法身を以て胎藏の大日とせば、智法身は所具である。智法身を以て金界の大日とせば理法身は所具である。蓮華は胎藏の理を表し、月輪は金剛の智を表す。故に胎藏曼荼羅は、蓮華の上に月輪あり、金界は月輪の上に蓮華あり。これ何れも、理智蓮月の互具不離を表するものなるも、而も一は理を本とし、一は智を體とするを表するものである。即ち理智蓮月能住所住の邊を以て、兩部の異なりとなすものである。

次に用大について兩部を釋せば、かの灌頂の印明に於てよく兩部理智の義を知らるゝのである。理

印理明、智印智明、或は理印智明、智印理明、二印二明、一印二明、一印一明、或は胎を本とし、金を源とする相傳あるも何れも、理智兩部不二の義を示すものである。即ち理智、身心、體相は無礙相融のゆゑに、諸流の印明相異に似て、而も兩部不二の意を表するは同一である。祕密の大事たる灌頂の印明のことは、三摩耶に入らずして、輒すく説くべき法ならず、されど祕密の正意、兩部の法體は、灌頂の印明に最もよく顯はるれば、今こゝに露はに印明について談せざるも、その印明の表示する理趣の一端を述ぶるである。

本邦の事相に小野廣澤の諸流相分かれたるが、諸流の分かれたるは、種多の原因ありしならんも、其根本についていへば、灌頂の印明の相異にある。而して灌頂の印明は、衆生の身心本來毘盧遮那如来の體性なることを開示し、諦見せしむるにあるは一なるも、その中、胎藏を本とするあり、金界を體とするあり、而二を表とし、不二を源とするありて、説一ならざるは、一面より觀れば、諸流は理智兩部の法門を如何に融會して解せしか、また兩部の正意を如何に觀しやを知るに足るものがある。小野廣澤は共に兩部不二を深旨とするも、一は胎藏を本とし、一は金剛界を體とする。小野のうちに初重二重三重等の重位を立つるあり、立てざるあるも、諸流の極祕は本有修生、下轉上轉、因果等の相對差相を遮して、本有自證の極位に住し、衆生の身心法爾として佛身なることを決定して、體せしむるにあり。而も極位は本末一際、初後不二の故に、最初に遮せし始覺本覺、上轉下轉等の無量の法



門、凡てこれ佛果上の功德として觀るものである。所謂能所の二生を絶して、不二果海の法爾に住するにあるも、都絶能所の果上に、更に上下二轉、從因至果、從果向因等の無盡の法門を觀る。而も皆これ本有一心の具徳、曼荼羅の果相と開見するものである。

下

上述の如く兩部の大經は本因本果、即ち本有の理智を體とするものである。遮詮門よりいへば、非因非果の一心の本法を示すものである。而して兩部共に因果の説あるは、この因果の法門に依つて、非因非果、因果遠離の一心に契證せしめんがためである。随つて因心本有の菩提心を明かす大日經にも、因果の法門あり、智が理に住する、智法身の果を本とする金剛頂經にも、因果理智の法門がある。この因果の法門無量なるも、法身如來の果體より曼荼羅の諸尊を示現して、衆生に應同する從果向因と因位の衆生が菩提心を發し、修行昇進して本覺の一心を證する從因至果の二門を出でず。兩部大經共に此二門を説くも、經の正意は從因至果なりやはた從因向果なりや明かならぬものがある。されば先徳、大日經につき此義を研覈せられ續宗義決擇集第十二卷に大日經正意之事なる論草二條あり、一は宥快師の説にして、他は賢重師の口筆である。長覺師の大疏指南鈔第一、印融師柚保隱遁鈔第五等にも此事論せらる。

而して此等は何れも大日經の正意を論ずるものなるも、金剛頂經の正意にも言及せり随つて此義を示すところに、兩部大經の正意顯れ、自ら密教の正意を知らるれば、今其教旨を述ぶるであらう。此義について長覺師と宥快師、即ち南山の壽門と寶門と説を異にするものがある。快師の説は續決擇集に出で、覺師の義は大疏指南鈔に出づ。

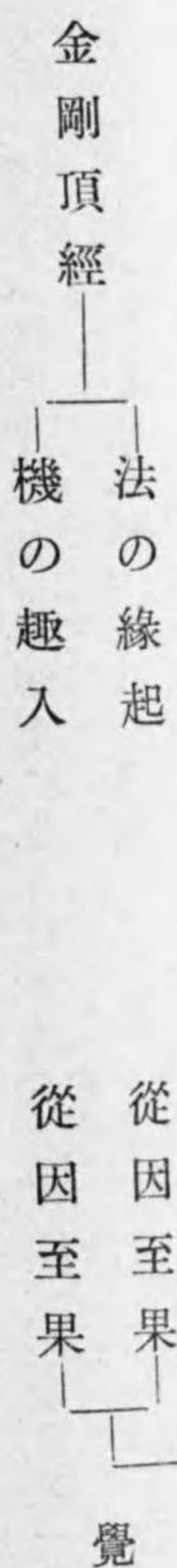
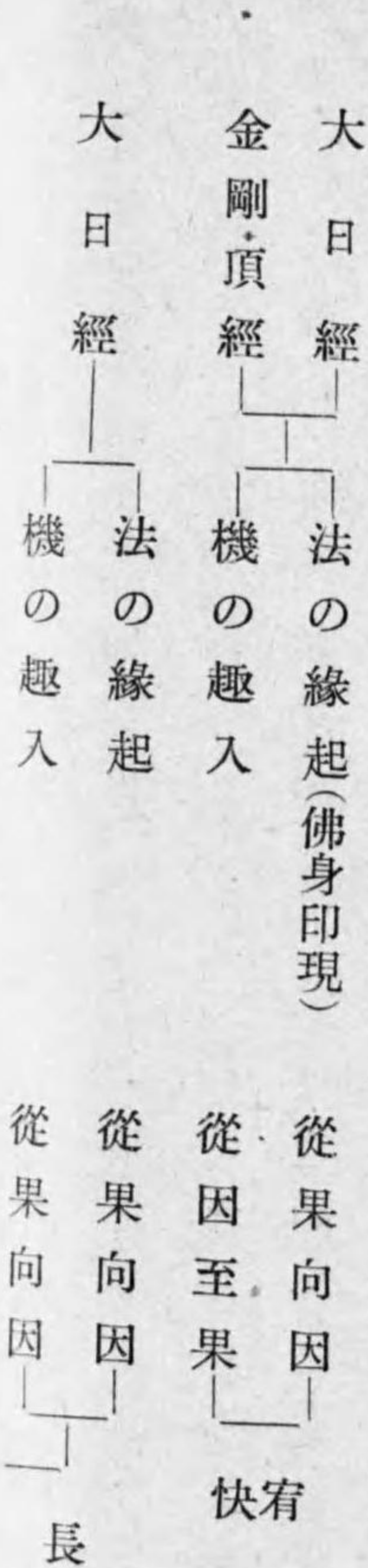
大日經には廣く從因至果、從果向因に互つて説示せられ、ことに從因至果、即ち行者の始覺上轉の説文多きも、一部の義趣は從果向因にありとし、この從果向因を以て大日經の正意と觀るは、長覺、宥快兩師の一致するところなるも、其上に兩師の相違點がある。快師は大日經も金剛頂經も祕密の教は皆從果向因を正意とすと觀る。即ち顯教は十信十住十行十回向十地等覺妙覺と進修轉昇し、果界に没同するを説くも、祕密は最初より因分を超過せる如來果地の境界を教の立場とするものである。兩部を因果の曼荼羅に分てども、此因果は所謂密號名字の因果にして、共に如來果地の内證を開いて建立せるが故に、兩部曼荼羅は共に從果向因である。曼荼羅已に從果向因なる故に、兩部所説の法門も從果向因を正意とす。即ち密教は本覺宗なるが故に、大日經のみならず金剛頂經も凡て從果向因を以て正意とす。此の如く快師は大日經に行者の發心、信行、入證の次第を明かす從因至果の能入の法門と毘盧遮那如來の果徳を開顯し、四重圓壇の曼荼羅を示現する從果向因の法門のあることを認め、而も大日經一部の正意は此二門の中、何れにありやと云ふに從果向因の法の緣起、佛身の印現の方面にありとなすものである。即ち從因至果は能入門にして、從果向因は所入所詣の果體である。かゝる能入、

所入の二の中、何れが正意ぞとならば、所入の果體、これ正意たるべきである。

得<sub>レ</sub>心對<sub>レ</sub>明從因至果從果向因。從果向因曼荼羅於<sub>レ</sub>如來心地<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>開性德四重法界圓壇也。從因至果曼荼羅行者從外向內證入次第也。彼從因至果行者所詣果德邊從果向因四重法界圓壇也。仍從果向因是所入所詣曼荼羅故以<sub>レ</sub>之可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>正意也。付<sub>レ</sub>之諸佛從果向因本意爲<sub>レ</sub>衆生引入<sub>レ</sub>故行者從因至果次第是正宗云。

是所詮能入所入對辨也。而付<sub>レ</sub>能入所入二定<sub>レ</sub>宗旨。尤以<sub>レ</sub>所入所詣可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>正意也。云云(有快口筆)

しかるに長覺師は、兩部の中に金剛界は從因至果を正意とし、胎藏は從果向因を正意とする説を立つ、其故は金剛界は始覺上轉修生の法門にして、胎は本覺下轉の法門なるゆゑである。即ち覺師は兩部相望して從因至果は金剛頂經の正意、從果向因は大日經の正意と觀る。而して兩部各々從因至果、從果向因の義あるは、大日經の從因至果は胎藏所具の金剛界の法門にして金剛界に從果向因の義あるは、金剛界所具の胎藏なりと云ふ。なほ覺師は法の緣起と機の修入を一致に觀て、胎藏は機法共に從果向因にして、金剛界は機法共に從因至果なりとす、兩師の説を圖示せば



上述の如く大日經については、宥快師は從果向因と、從因至果の二門を開説せるも、從果向因これ經の正意なりと觀、長覺師は法の緣起のみならず、機の趣入までも、從果向因なる説を立するのである。大日經は七軸三十六品あるも、經の正意は住心品に顯はるその住心品は三句、五轉、三劫、六無畏、十地、十喻等の法門を明かすものである。此等の法門は文相より見れば、何れも行者の因行證入の次第、所謂從因至果の義を説く、しかるにも關らず、經の正意は從果向因なりと斷するは、こは深く經の意趣より判するものなるも、而もかゝる見解を下すに至りし根據は、これ高祖の御釋に因るものである。宛も釋摩訶衍論に眞如、生滅、不二の三門を建立するも、不二の説文は極めて少なく、一部は多く眞生二門を釋せるものである。しかるに不二説の論則あつて、不二を説く義を立し、不二を説くが故に祕密の論藏とし、釋論は不二を宗とすと云ふが如く、大日經も從因至果、從果向因並べ説き、而も多くは從因至果なれども、經の意趣より觀て、從果向因を正意となすものである。釋論を不二爲宗の密論と爲すは高祖大師の御提撕に依るが如く、大日經の正意は從果向因なりと觀るは、本覺爲宗の大師の教義に基くものである。先德、大日經の從果向因の義を證するに、祕藏記の中因發心及び三密觀の文を引けり。即ち三密觀に因行證入方便の五位を五佛に配し、その因を臺實爲因の義に

解し、色心の本有を説くが如きは明かに從果向因の教義である。よしや三密觀は大師の眞作ならずとするも、大師の教義の眞意を傳へたるものである。即ち大師は兩部大經に依り祕密教の正意を顯揚し、祕密教は因分を超越せる如來果地の境界を説き、兩部曼荼羅の印現を明かし曼荼の尊の三密門を修し凡身に佛身を成ずる道を示すにありとせり、この高祖大師の教義よりいへば、兩部大經の正意は從果向因にありと觀ねばならぬ大師の大日經開題に

至如祕密曼荼羅金剛心殿。是則最極究竟心王如來。大毘盧遮那自性法身住處。心王大日孕三身而圓圓之。又曰く

三等之理彼此無異。五智之覺。人我同得。不起千座。金剛即是我心。不經三劫。法身即是我身。三部諸尊宛然而具。三妄衆障忽爾不現。無量福知不求自備。無邊通力不營本得。

從果向因の見地より觀れば兩部大經從果向因を明かすと見らるゝ文義が多い。ことに其經題の

大毘盧遮那成佛神變加持經は、これ法身の果體より無盡の三密門を印現する從果向因の理趣を示すものである。一部の總稱たる經題已に從果向因なるが故に、一經の所詮の正意も、從果向因にあることを看取し得らるゝのである。しかるに先きにも述べしが如く、大日經一部の正意は住心品に顯れ、其住心品は、衆生自心品即是一切智々の義と、この一切智々を實の如く開見する、五轉、三句、三劫、

六無畏、十地等の法門を説くものである。

此品統論經之大意。所謂衆生自心品即是一切智智。如實了知名爲一切智者。是故此教諸菩薩。眞語爲門自心發菩提心。即心具萬行。見心正等覺證心大涅槃。發起心方便。嚴淨心佛國。從因至果皆以無所住而住其心。此等の疏文に依れば、經の正意は從因至果なりとも觀らるゝのである。随つてかゝる説を立し得るのである。(決擇集難方)これに對し宥快法印の會釋に曰く

此品統論經之大意等御釋。釋之有數料簡。一義云所謂衆生自心品即是一切智智釋是大意也。意衆生內心一切智智曼荼爲大意。是則中臺出外曼荼羅也。是故此教諸菩薩以外明契證此心內曼荼次第。仍所正宗一切智智曼荼也。從因至果非爲正宗。

一義云是故此教諸菩薩以下五轉從果向因五轉也。因行證入雖次第。從內向外故。從果向因義也。是即內實爲因外花爲果大師御釋其意可同。

經題より見て、大日經は從果向因なりと云ふは、これ已成の大日如來の果相の顯現について云ふものにして、衆生自心品即是一切智々の文を、衆生内心の一切智々の曼荼羅開顯の義に解し、從果向因と觀るは、これ衆生本有の因曼荼羅について云ふものである。已成の果曼荼羅より云ふも、本有の因曼荼羅より云ふも、大日經は從果向因を正意とすと云ふべきである。疏の文に

佛從平等心地開發無盡莊嚴藏大曼荼羅。已還用開發衆生平等心地無盡莊嚴藏大曼荼羅。

已成の如來、如實知自心の實義を開示し給ふとき、行者、當處即法界、我即金剛薩埵の大自然覺を成ずるに至るを、衆生平等の心地の無盡莊嚴藏大曼荼羅を開發すると云ふ。

かく因果二種曼荼羅の建立あるも、究竟していへば、大日經は衆生自心品一切智々因心本具の曼荼羅を明かすを以て本とす。前節に大日經一部所明の法體は、衆生の自心品即是一切智々にあることを述べしが、固より旨趣一貫して異なることがない。即ち衆生の自心品一切智々の體を實の如く、顯現せしめんとして、法身如來より無盡の加持身を示現するは、これ從果向因である。しかして行者、この如來加持の曼荼羅に入り、修行入證し、自心本有の曼荼羅を現證するに至るのであるが、この行者の修行入證を解するに、從因至果と見、從果向因と見る二様の見方がある。宥快法印は行者の修行入證を從因至果と觀、賢重及び長覺師等は從果向因となせり。こは異なる兩説の如くなるも、一大事因縁を二方面より解釋せるものなるがゆゑ、此兩説並べ見て當さに自宗の祕義を闡明せるものと云ふべきである。即ち已成の如來の慈光に攝受せられ、加持感應、瑜伽三昧に住し、始覺上轉、背暗向明、本有の淨菩提心を開顯し行く次第は、所謂從因至果である。而も自宗は入佛道の最初より我即佛の佛地の三味道に住し三密の修行六度の萬行は、其法體よりいへば、本地毘盧遮那如來の果徳を顯現するものなるが故に從果向因といはれる。

轉迷開悟次第從因至果發心修行所顯法體本有理性覺位。毘盧遮那花臺曼荼也。是即如來果地境界而因人不知處

也。然間約行者時可云從果向因也。其上又此宗意。發心修行得意。其緣起時八七六五次第也。是又從果向因

次第也（賢重口筆）

從因至果皆以無所住御釋。舉三轉次第釋從因至果之故。是則行者行因得果之相也。然而約識體則自本垂跡義分明也。以此意觀之。三句轉昇菩提心爲因爲本源。作後二句轉昇故此不違。內實爲因外花爲果義。如彼於三劫釋此經從淺至深廣明心相皆爲開示淨菩提心本末因縁亦第一住心菩提心爲本初地淨菩提心爲末得意。

三劫六無畏等轉昇。皆應自本垂跡。云云（大疏指南抄）

即ち生佛の隔歴を一念に融じ、我即佛の不二の三昧に住し、あらゆる所作、佛土を莊嚴し、衆生を成就する從果向因門と、高く已成如來の智慧の光明を仰ぎ、進修向上する從因至果門とは、これ道の兩面にして、機の趣入門に、この兩義並び存すと知るべきである。

問眞言行者發心。應厭生死苦欣涅槃樂心品耶。答爾。

問此厭求心。與生死涅槃捨捨取心。爲同耶將異耶。若言異者。二心相並耶如何。答大抵各別心品也。然此二

心橫豎二心故。可相並。因茲眞言行者觀相有此二趣。須善留心。即是二心表裏不同。其體惟一也。（宗義法擇集）

以上は主として大日經について述べたるものなるが、金剛頂經も素より旨趣同一である。但し金剛頂經の正意については前述の如く古師の説一ならず、或は從果向因といひ、または從因至果なりと云ふあり、金剛界は智を本とし、智は捨劣得勝を用とし、始覺上轉を宗とするが故に、金剛界は從因至

果を正意とすとの義を立つるは、長覺師の教系に屬する一派の説である。金剛頂經は能説の佛身よりいへば、智が理に住する智法身にして、その所説の法門よりいへば、智を本とし、始覺上轉の義を説く、略出經には最初より行者修生の義を明かし、入曼荼羅の法則を説き、因縁無自性の遮情觀門を示し、諸佛の警覺開示に依り、本有の心月輪を觀じ、三形、尊形を觀じ、五相成身、佛身圓滿の境に至る道を開演し、行者の修入の法門を説くこと多ければ、從因至果を正意とすとも觀らるゝのである。

しかしながら金剛頂經の正意を尋ぶるに、毘盧遮那如來より三十七尊等諸尊の縁起を説き、行者この曼荼羅に入り、その尊の三昧を修し、現身に佛果を證得するにあるが故に、金剛頂經も大日經と同じく法の縁起、佛身の印現よりいへば從果向因にして、機の趣入よりいへば、從因至果、從果向因の二門ありと觀得らるべきである。略出經の如きは、始めより行者の修生を説くも、教王經の如きは最初に五智現證の毘盧遮那法身より諸尊の縁起を明し、次に行者修生の道を説く、或は瑜祇經の如きは、序品に直に本有金剛界普賢滿月の法體を説き品々化他修生の行相を明かす。十八會指歸に依るに各會多くは最初に如來の曼荼羅の印現を明し、次に行者入曼荼羅の法則を説き、行者をして、直に如來の三摩地を現證する道を示す。要するに金剛頂經は本有の五智を現證せる大日如來が、衆生本有の五智現證の道を説くものである。その五智三十七智、無塵無數の佛智を現證せる大日如來より三十七尊等の諸尊の縁起するは、從果向因である。而して行者入證の法門無量なるも、その觀門の要は金剛

頂經は五相成身の觀である。行者最初に無識身三昧に住し、警覺開示に依つて心月輪を觀じ、三摩耶形を觀じ、佛身圓滿の尊形を成ずるに至る次第は、從因至果である。而も五相成身の第一通達菩提心觀は、これ大日經の初地淨菩提心と體を同じうするものにて、第一通達菩提心觀にて、自證圓極せるものである。しかしてより後の觀行は、この自證圓極の功德を豎に開顯し、また化他の佛果を成ずるものである。しかれば行者の趣入もまたこれ從果向因である。

五相、五智、五轉は同體の法門として觀ることがある。而して五相五智五轉の相配に兩傳がある。

五	相	(東因發心) 始覺上轉	(中因發心) 本覺下轉	五	轉
一、	通達菩提心	大圓鏡智	法界體性智	方	便究竟
二、	修菩提心	平等性智	大圓鏡智	發	心
三、	成金剛心	妙觀察智	平等性智	修	行
四、	證金剛身	成所作智	妙觀察智	善	提
五、	佛身圓滿	法界體性智	成所作智	涅	槃

此の如く五相、五智、五轉の相配によつて、五相の法門を始覺上轉、所謂從因至果と見、また本覺下轉、從果向因の義に解せらる。尊勝儀軌の五智五轉の釋に、最初の通達菩提心に正覺を成じ、しかして後、凡て化他の妙用として明かされたが、此等の説に依れば、五相は果より因に、深より淺に

至る次第、即ち從果向因の義である。

要するに密教は兩部曼荼羅の開顯を説き、如來の三密門を修して、本有曼荼羅を開覺するにあるが故に、其佛身印現、法の緣起よりいへば、從果向因である。しかして行者の趣入を談するに二方面の見方がある。即ち機根は表で始覺上轉、東方第八識發心、三大のうちにては用大の位なるがゆるに從因至果である、しかしながら東方第八識發心に即して中因發心、第九識の法體顯現し、また機の趣入は表て用大なれども、三大は同時不離の法體にして、行者直に體相二大に住せば、機の趣入、またこれ從果向因である。かくの如くなれば上轉下轉、從因至果、從果向因は同時不離である。しかして隨緣即法爾、法爾即隨緣の故に無上菩提を欣求し、轉深轉妙、三世に上々去々し、必度衆生、十方に下々來々するも、しかしながら法爾本有の一心の本法を出でず。法爾の一心本有の毘盧遮那の體性に住し、上轉下轉毘盧遮那金剛の舞戲と體する。これ密教の歸趣である。

### 八 三部五部の祕經

大師の御相承に一百餘部の祕密教あるも、金剛頂經と大日經とは其根本經典にして、祕密教に多くの經軌あるも、金胎の兩部に攝屬し、兩部の大法以上の經あることなしと觀るは、東密一家の所判である、しかるに密教に中古以來三部祕經、五部祕經と云ふことあり、これ多くの祕密經典中、其の理趣

深奥なるものを選んで、殊にこれを尊崇せるものである。而も三部祕經、五部祕經と云ふも兩部大經に攝屬し兩部の範圍を出づるものもなく、また兩部以上のものもないのである。

三部五部の祕經とは

大毘盧遮那成佛神變加持經	七卷	善無畏三藏譯
大毘盧遮那佛說要略念誦經	一卷	金剛智三藏譯
金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經	三卷	不空三藏譯
蘇悉地羯羅經	三卷	善無畏三藏譯
金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經	二卷	金剛智三藏譯
金剛頂瑜伽中略出念誦經	四卷	金剛智三藏譯

五部の祕經とは大日經に要略念誦經を併せて一部とし、教王經、蘇悉地經、瑜祇經、略出經を各一部と觀て五部と爲し、三部祕經とは、大日經に要略念誦經を併せて一部と爲し、教王經に瑜祇經を併せて一部と爲し、蘇悉地經を一部と爲し、合して三部祕經となす。かく三部、五部の祕經あるも、兩部に攝屬し、兩部を出でないものである。即ち大日經、要略念誦經、蘇悉地經は胎藏部にして、教王經、略出經、瑜祇經は共に金剛頂部である。東寺一家、ことに南山應永大成の義に準せば、前述の如く弘法大師の相承は事教二相何れの方面より觀るも、兩部大經を正所依の根本經典とし、他の凡ての經を兩部

に攝屬するのである。随つて大師御作の書に多く兩部と謂つて三部と稱し給はず、祕藏寶鑰には眞言密教兩部祕藏といひ付法傳惠果阿闍梨耶の傳中に即授兩部大法阿闍梨位毘盧遮那根本最極傳法密印一或は金剛界大悲胎藏兩部大經者諸佛祕藏即身成佛之路也二または、今有日本沙門空海一來求聖教二以兩部祕奧壇儀印契漢梵無差悉受三於心猶如瀉瓶四云々御請來目錄には今則一百餘部金剛乘教兩部大曼荼羅海會請來見到。往々五部等の語を見ることあるも、こは金剛界の五部を稱するもの、また三部の語ありとするも、こは胎藏の三部を指すものにして、上に掲げし五部祕經を五部と稱し、三部祕經を三部と稱することはない。即ち胎藏は三部三密の法門にして、金剛頂部は五智五部の法相である。随つて三部といひ五部と云ふも凡て兩部に攝し兩部以外の法門でもなく、また兩部以上の法門でもない。しかるに台密即ち比叡山相承の密教にては、兩部の外に蘇悉地經を立て、これ兩部よりも深奥なりとして三部の大法と云ふことを説き、或は兩部各々に不二あり瑜祇は金剛界の不二、蘇悉地は胎藏の不二なりと觀るものあり、これらは瑜祇蘇悉地の兩經を以て、兩部の大經を超越せる深奥なる經典と觀んとするものである。宥快師の傳教鈔に兩部三部のことを記せる一節あり、左に抄録せん。

他門意兩部外立蘇悉地三部印信相承之。意兩部理智隔歷分故立蘇悉地爲不二之極位歟。自門中準他門兩部外立不二爲極學者有之。道範阿闍梨等。兩部爲而二之重以瑜祇爲兩部超過之不二重位或以蘇悉地之習爲不二之極位人有之。此等所傳不可叶宗實義歟。東寺眞言宗實義以兩部爲極位此外不立至極之

重也。大師處處解釋不能具引。又東寺名流中此等相傳儲有之。又付教相義理者。法性阿闍梨等專立此義。此自門他門二途宗義不同相分所以得意。有二由。一他門兩部相承各別人故不知兩部不二故。以蘇悉地習不二大事。東寺兩部等葉相承故習兩部即不二。依之兩部外不立不二。二他門眞言顯密兼學故顯密宗旨一致習合。而顯教遮情宗旨故捨迷情差別歸一味空理。故兩部而二外尊不二一中。東寺所傳傳唯密宗旨故顯密宗旨各別也。然眞言自宗意以本有表德爲實義故。不動諸法別相開顯法性。疏釋色心實相。大師判身心究竟給。仍遮兩部差相非歸理之法性。以此二由自他門不同可簡別。是事相教相之肝心也。輒不可披露。

兩部を正所依として、兩部の外に別部を立てざる理由種多あるも、色心差別の相を壊せず實相を談するを密教の正意となす、即ち顯教の教の極致たる無相眞如の理の立底に於て、還て色心本有の體性を談じこの本有の色心を實の如く開見するを密教不共の教旨となすものである。しかして兩部大經の正旨は實にこゝに存するのである。これ兩部大經の外に別部の經を立てざる所以である。しかるに台密は三部門である。故に兩部は而二にして淺略、蘇悉地は不二にして深祕なりと相傳す。かの比叡山眞言宗家嫡相承緣起勘文に

高野弘法大師。相承血脈。以金剛界之一圖爲脈譜兼胎藏。以之號兩部相承。而缺蘇悉地之大法。慈覺大師。始傳正嫡之血脈。又得蘇悉地大法。印信於我日本國。行。云云

又曰く

智證大師奏狀云兩部大法。先來非<sub>レ</sub>傳。於<sub>二</sub>蘇悉地<sub>一</sub>者。其名未<sub>レ</sub>曾<sub>レ</sub>有云々

これらの説に依れば台密は蘇悉地を、兩部以上の深奥なる經典とし、而もこの蘇悉地の大法は台密にのみ傳へ、弘法大師相承し給はずと觀るものである。

こゝに於て尋ぬべきことは、弘法大師は台密に稱するが如く、蘇悉地を傳へられざりしや、また經を傳へられしも其秘旨相承なかりしや。また蘇悉地經なるものは眞に兩部大經を超過せる經典なりやの内容の檢覈である。

大師御入唐の時蘇悉地經相傳ありしや否やは、古來の異義なれども、東密一家にては相傳ありしと觀るものである。こは大師御作の三學錄の中に蘇悉地經を以て眞言所學の律藏とせるに徴するも明かである。尤も大師の御請來錄に載せざるは、大師入唐以前に已に本邦に請來ありしゆゑである。宛も大日經の如くである。大日經は大師請來ありしも御請來錄に載せ給はず、こは大師入唐以前に已に傳來ありしゆゑである。

また海雲胎藏相承の血脈によれば、大師は大日經と共に蘇悉地を相傳せられたるを記し、また承和三年大師の御弟子實惠、眞濟、眞雅等八人、圓行の入唐に託して國信を青龍寺の義明等に送れるが、唐朝開成四年正月三十日附の義眞法閏等の返牒にも、大師は兩部の大法及び蘇悉地の大法を相承し給ふ旨を記す。これら漢土の人の文證に依るも大師、兩部大經及び蘇悉地經を相承し給ひしことを知り

得らるゝのである。而して蘇悉地經傳來ありしも、これを兩部以上の寶典として別立せざりしは、上述の如く大師の教相は兩部を基本とし、兩部理智の法は、諸法の本源、所歸の源極なれば、兩部の法門を離れて、別に甚深の理趣なしと觀給ひしゆゑである。而して蘇悉地經は佛部、金剛部、蓮華部の三部の供養儀式を明し、眞言行者の持戒威儀等を説くが故に、眞言の律藏に攝せられしものである。次に大師蘇悉地印信相傳有無のことを記せんに、大師蘇悉地經を請來せられたると共に、蘇悉地の印信を傳へられしや否やにつき、古來の諸説を考ふるに三説に分かれるやうである。

一、大師蘇悉地の印信を傳へられたと觀る説。

二、大師相傳の蘇悉地の印信は、蘇悉地經の印信にあらず、されば經は相傳ありしも、蘇悉地經の印信は相承なかりしと觀る説。

三、大師は蘇悉地經の印信として殊に相傳なきも、大師相傳の經軌のうちに、已に蘇悉地の印明あれば、相承ありしと觀る説。

以下順次これを解説せんに、大師御相傳のうちに蘇悉地の印信がある。小野六帖の中に兩部并に蘇悉地の血脈に、惠果、弘法、眞雅、源仁、聖寶、觀賢、淳祐、元果、仁海等次第相承するより觀るも、大師蘇悉地の印明御相傳ありしこと明かである。勸修寺の寛信、明海に授くる印信に、

右於<sub>二</sub>勸修寺勝福院道場<sub>一</sub>授<sub>二</sub>兩部傳法灌頂職位於明海<sub>一</sub>已講了



康治元年十一月六日甲子火曜 壁宿阿闍梨少僧都法眼和尚位任三小野舊風二亦授三妙成就印可二

これ兩部傳法の印明と共に、妙成就即ち蘇悉地の印明を授けられたる即信なるが、この蘇悉地の印明なるものは、台密所傳の蘇悉地印明と異なり、大師相承し給ひし拳菩薩の印明である。印信の文に妙拳士手明とあるものこれである。而して任三小野舊風二云々の文より見るも、大師より嫡々相承の印明なることを知らるゝのである。しかして蘇悉地の印明を以て兩部の外に別立せざるは、兩部は理智本有の法體、蘇悉地は修生の極位、これ本有の外に修生を見ず、修生の當體即本有の全體なる義に依り、大師はたゞ兩部と稱して蘇悉地を別立し給はざりしものである。

台密にて弘法大師相傳せざる大事と稱する、蘇悉地の大法は、台密にては傳教大師唐の順曉より傳へ慈覺大師は唐の義眞より傳へ、智證大師は唐の法全より傳へたものである。東密にては蘇悉地の大事と稱する三種悉地の印信は、宗叡入唐して法全より傳へ、歸朝の後、源仁に傳へし以來小野一家に相傳し廣澤流も、水尾の玄靜、慈覺大師の末葉なる台密の最圓より蘇悉地の大法并に三部の印信を受け、また玄靜は宗叡の徒の禪念よりも三部の大法を受く、玄靜より神日に傳へ、神日より寬平法皇、寬空等に相傳し、また廣澤に傳はりしものである。即ち寬平法皇は益信より八祖相承の兩部の大法を傳へ、神日より蘇悉地を傳へ給ひしものである。この宗叡及び玄靜相承の蘇悉地の法は、義眞、法全の法流にして大師の血脈にあらず、石山の淳祐、延命院元杲に授けらるゝ血脈に云はく、

妙成就許可之事、高野山舊風之中所不行也、但他家有此事其趣如眼前所陳能可存念之耳。

この蘇悉地、即ち妙成就の相傳は、東密にては宗叡以後のことにして、大師の御傳にあらず、宗叡以前にこの法の相傳なかりしゆゑに、妙成就許可之事高野舊風之中所不行云々と云ふ。

されば蘇悉地の大事と稱するものに二種の異ありと知るべきである。即ち一は大師相傳の蘇悉地の印明にして、一は台密及び東密の宗叡相傳の三種悉地の印明である。台密にて蘇悉地の大法と稱する、三種悉地の印明は、大師殊に蘇悉地の大法として、御相傳なかりしものと見える。蓋し大師所傳の蘇悉地の印明なるものは、蘇悉地經に説かれたるものにあらず、金剛頂略出經に明す金剛界羯磨會の拳菩薩の印明である。大師所傳の蘇悉地の大事が蘇悉地經所明の印明にあらざれば、何故に蘇悉地と云ふや、こは蘇悉地とは所謂妙成就の義にして、拳菩薩の位をさす、即ち拳菩薩の位は、行者修生顯得、自證の極位なる故に妙成就と云ふ。されば大師所傳の蘇悉地の大事は、蘇悉地經の文に依るにあらず、佛果成就の徳に約して蘇悉地と稱するものである。

次に台密相傳の蘇悉地の大事、大師殊に蘇悉地法として御相傳なかりしも、大師御相傳の法流のうち其印明存すと觀る説あり。台密相傳の蘇悉地を三種悉地、三身說法印、三身印明等と稱し、其名稱も一にあらず、また其印明にも異説あるが如くなるも、一傳により其眞言を擧ぐれば、蘇悉地法とは所謂三種悉地の法である。三種悉地の眞言は上品悉地、阿鑊藍含欠、中品悉地、阿尾囉吽欠、下品

悉地、阿羅波遮那なり。三種悉地の眞言何れの經に依るか不明なりと、智證大師些々疑文の上卷に記されたるが安然對受記には尊勝破地獄軌にこの眞言あることを述ぶ。その上品中品の眞言は大日經に基き、下品は文殊菩薩の眞言である。大日經等に依り、破地獄軌、三種悉地軌を製せしものであらう。即ち蘇悉地大事は破地獄軌、三種悉地軌より出で、此等の儀軌は大日經に依る。しかして大師は大日經の祕要を盡くして相傳せられ、また東密法流の中に其印明あるより見れば、大師法流の中に三種悉地の印信を同列して相承し、また三種悉地なる號なきも、大師相傳中に其印明存すと觀るものである。

次に蘇悉地經は兩部大經と同等、若しくは兩部大經を超越せる甚深なる經なりと觀る說に對し、其說の允當ならざる所以の一端を敍せんに、台密にては慈覺大師以來殊に蘇悉地經を尊崇し、兩部大經よりも其理趣深奥なりとなす。慈覺大師の蘇悉地經疏に曰く、

蘇悉地羯羅經者。是三部經王。諸尊肝心。錯惣眞言之祕旨。該貫大教之要妙。諸部大教非此經王。支分不備。衆尊祕法非是眞典。未有妙術。凌大虛之靈翅。開地藏之神術。唯此眞典也。

智證大師本蘇悉地羯羅供養法批に云く、

右大法者爲胎藏金剛大法之羽翼。是以唐大師等。我慈覺大師殊祕惜之不同他部。仍自今以後。傳法者須教授弟子。令登阿闍梨之後。方與授件法。若不爾者恐損大道。歟故定如件。

此の如き所見に依り蘇悉地經を兩部と同等、若しくは兩部大經以上の寶典と觀んとするものである。しかしながら蘇悉地經を研覈し、その經の内容を知るに至らば、兩部大經と同視し、或は兩部大經以上の經典と觀ることの妥當ならざるを知り得るであらう。經の所明をこゝに委悉すべからざるも、其一二の點について示さんに、

第一此經の教主は大日如來にあらずして執金剛である。即ち此經は忿怒軍荼利菩薩が、執金剛に對し密教を修する法則等について四十幾問を發せしに對しての執金剛の答說である。執金剛の所說なれば、これ兩部大經の如く純部の密教にあらずして雜部の密教である。この事は經文にも示されてある。即ち此經は能說の教主よりいへば、佛、蓮、金の三部の中にては最下位の金剛部の尊である。大師は經の淺深を判するに、能說の教主の尊卑に依り給ひしが、この提撕に依らば、此經は教主より觀て已に兩部大經と對比すべきものでない。經に能說の教主は三部の最下位なるも、所說の法よりいへば三部に通じ、この經所說の法則に依り、よく三部の悉地を成ずることを明す。

此經深妙如中天。若依此法一切諸事無不成就。云云。

於三部中此經爲王。亦能成辨一切事云々

かくの如く、この經は三部の王にして、この經の法則に依つて念誦すれば、上中下三品の悉地成せざ

ることなきを説く、而も分別成就品等に三部悉地の相を明かすを觀るに多く世間有相の悉地にして、  
兩部大經の如く無相の大悉地、即身成佛の實義を説かない。即ち出世間の悉地については、得辟支佛  
地或證菩薩位地等の文を、僅かに見る位にして、他は殆ど世間有相の悉地を明かすものである。ま  
た灌頂品に灌頂を説くも、もとより祕密壇の祕義を明かさず。蓋し兩部大經を最上祕經と稱する所以  
は、毘盧遮那如來所説の純部の密教にして、毘盧遮那本地の體を明かし衆生自心に無盡莊嚴藏大曼茶  
羅を開顯する、三密五相の妙行を示し、大悲壇と共に祕密壇以心灌頂の祕義を説くがゆゑである。し  
かるに蘇悉地經は持誦の法則等説くこと廣多なるも、本有三身、本有三密、曼茶羅、灌頂等の實義を  
明かさざれば、これ兩部大經と同視し、或は兩部大經以上と觀るべきでない。大師所判の如く眞言行  
者持明念誦の法則を明かすこと多ければ、眞言の律藏に攝するが至當であらう。

蘇悉地の大事と稱する三種悉地の印明は、台密にては蘇悉地の印信なりといひ、また兩部の印明な  
りと稱し異議あるやうである。何れにしても蘇悉地の大事と稱する三種悉地の印明は蘇悉地經に分明  
に説かれてない。蘇悉地經に説かれてなきものを何故に蘇悉地の大事と云ふかは明かならざるも、安  
然、三種悉地の眞言を説ける破地獄軌を以て蘇悉地部に入れるより觀れば、この印明は破地獄軌に基  
くか。同軌に、

上品悉地。阿饒囉哈欠。是名祕密悉地。亦名成就悉地。亦名蘇悉地。蘇悉地者遍法界也。成就佛果證大菩提。

法界祕言祕密悉地蘇悉地法身成就。實是三種常身正法之藏法身遮那具足之體云。

此等の文より見れば、三種悉地の印明を蘇悉地と稱するは、破地獄軌に依るか。しかしてこの軌儀は  
大日經に依るものなれば、蘇悉地を兩部以上の法門と稱し得られないであらう。

次に蘇悉地經は不二の實義を明かすが故に兩部以上の祕經なりと觀るものもあるも、經に不二の祕義  
を明かせる文なしこの經に不二の祕義を示すと云ふは、三種悉地の明と同じく、破地獄軌に依るか軌  
に阿字の實義を明かし兩部の要妙を採集すといひ、或は理智二法身、兩部曼茶羅は不二の道、一の阿  
字に歸する等の文あるが、三種悉地の明を明かす破地獄軌を蘇悉地部に攝し、その軌に不二の義を明  
かされたるより、蘇悉地經は不二の理趣を説ける經なりと稱するに至りしか。

次に瑜祇經について一言せんに、瑜祇經は金胎不二、因果不二の祕旨を示す甚深の經典である。其  
序品には法身本有の義を明かし、本有金剛界、また本有法身等と云ふ、また内作業灌頂悉地品には祕  
密壇の法則、以心灌頂の祕義を説き、此身三十七尊と如々同體にして、現身に本有法身を現證するこ  
とを説く、これ瑜祇經を特に金剛部中最上無比の經と稱する所以である。即ち略出經、教王經等は毘  
盧遮那如來の果體より三十七尊等の曼茶羅の出生緣起を明かすもこの毘盧遮那は始覺修生の義を表  
とするものである。即ち教王經、略出經は共に十八會の中の初會の曼茶羅を説くものなるが、その經  
意は一切義成就菩薩無識身三昧に入り、五相成身、修生顯得の三摩地に住し、色界頂に於て正覺を成

じ、しかして後、曼荼羅の諸尊を印現するものである。しかるに瑜祇經の曼荼羅は本有の大日如來、本地無作の境界に於て、現するところの自性所成の三十七尊である。また略出經、教王經は大悲壇、業作灌頂、即ち第四の三昧耶を示すも、第五の三昧たる祕密壇を説かず、これ一應瑜祇經は教王經、略出經よりも甚深なりと稱せらるゝ所以である。かゝる義邊より瑜祇經は、兩部大經以上の經にして、不二本有の實義を説く經典なりと觀るものもあるも、瑜祇經は略出經教王等の金剛頂部以上の經にもあらず、また大日金剛即ち兩部を超越せる經でもない。略出經第四、教王第三に大悲壇の灌頂を説いて祕密壇を明さるゝも、經文に行者の心月輪に曼荼羅を建立し、或は四種曼荼、四種智印等重々無盡にして、行者の一身に曼荼の諸尊を現證する理趣を説く、これらは祕密壇の祕義である。されば殊に祕密壇の文なきも、その旨趣は經文の處々に顯はれてある。

また略出經教王經には始覺修生の大日如來を明かすも、かの略出經の

普賢法身遍一切

能爲世間自在主

無始無終無生滅

性相常住等虚空

等の文は瑜祇經の本有法身と義を等しくするものである。

また大日經には具緣品に七日作壇の大悲壇の灌頂を明かし入祕密位品等には祕密壇の灌頂を説き、祕密曼荼羅品等に毘盧遮那如來本地の曼荼羅を明かす其他阿字本不生の實義、凡佛不二の理趣等、一經所明の法門のうちに瑜祇經の祕義を盡せるものである。かくの如く觀れば、兩部大經所詮の理趣の

うちに、自ら瑜祇經の深義顯れたるが故に、瑜祇經は兩部を超過せる經にして不二の實義を明かす等と觀るは、正鵠を失したるにはあらざるか。もとより瑜祇經に因果不二、兩部不二の義を明かすもこれ理智兩部の而二の當體即不二なる意である。しかして此經に不二を説くも、金剛界を本とすと觀るべきである。

されば三部、五部の經あるも兩部の所詮を出せず、しかして兩部の肝心、一宗の宗極は、毘盧遮那本地の常身、衆生本有の曼荼羅を明かし、自心の源底に兩部曼荼羅を建立する祕密壇の祕義を示すにありと知るべきである。

## 九 弘法大師の教義

### イ 善無畏、不空、高祖の教格

さきに釋摩訶衍論、大日經、金剛頂經の要旨を敍し、なほ多くの祕密部中、三部五部の祕經は、殊に理趣甚深と稱せらるゝも、而もこれら三部五部の祕經は、兩部大經に攝せられ、また兩部大經を出づるものなきことを明かし、以下此等兩部大經を所依として建立せられたる、弘法大師の教義の一端を述ぶるであらう。しかし釋義多端なる大師の教義を、こゝに悉く解説し得ざるが故に、其根本教義と觀らるゝ、即身成佛義を略敍し、他は後日の研鑽に譲らうと思ふ。

前述の釋摩訶衍論も、兩部大經も弘法大師の解釋を俟つて其深旨闡明せられ、また大師は此等經論に依り、其教義を建立せられたるものなれば、以上二經一論の旨趣を釋せしところに、自ら大師の教義が顯はれたりと觀ねばならぬ。

しかしながら、經論所明の理趣、從容多含にして、人師各々其一邊を宣示せられしに依るか、大日經を支那に傳來し、これを講述せられたる善無畏三藏の大日經疏と、金剛頂經の譯者不空三藏の教義と、兩部大經に依つて建立せられたる大師の眞言乘と、其根本歸趣同一なるべきも、其間自ら淺略深祕、有相無相、遮情表徳の一應の相違がある。今大師の教義を敘するにさきだち、其一應の相違點を略出するであらう。これ大師の教義の特質を知るに便宜なりと思ふゆゑである。

先づ善無畏三藏の大日經疏と高祖大師の教義との相違點の主なるものをあぐれば、

- 一、兩祖共に而二不二を説くも、大日經疏は無相一法界、不二平等の一心を表とし、高祖大師は有相色心、而二多法界を表とす。
- 一、兩祖共に人法不二を説くも、大日經疏は阿字本不生の法を本とし、大師は六大法身の人を本とす。
- 一、兩祖共に無自性と本有遮情表徳の不二を説くも、大日經疏は衆因縁無自性の遮情を表とし、大師は本有表徳を本とす。
- 一、兩祖共に三密加持速疾顯を説くも、大日經疏は三密瑜伽の境界を阿字大空の法に歸せんとし、大師本有三密加持の顯得を明かす。

持の顯得を明かす。

一、兩祖共に中東二因を説くも、大日經疏は東因發心を表とし、大師は中因發心を表とす。

一、兩祖共に現生成佛を説くも、大日經疏は心の成佛を説き、大師は身心の成佛を明かす。

此等一二の點について述べんに、阿字本不生の一句は眞言教義の全體を盡すものである。しかし此句は大日經に出で、善無畏三藏の疏に委釋せられ、大師もまた吽字義、大日經開題を始め、其他御製作の書の中に、本不生の義を釋せられてある。兩祖の御釋を對照するに従縁生無自性と本有、無相有相、遮情表徳、不二而二、一法界多法界、法と人等の相違がある。

大日經疏二十卷に本不生の釋は至るところにある。ことに住心品疏は本不生の釋である。凡そ佛教は萬有を超越せる神あつて萬有を造れりと説かずして、萬有は凡て衆因縁に依て生起する理趣を説く。衆因縁に依つて生起するものは、生せしものそれ自身に固定堅實の性なく、無自性空である。而も空は寂滅虛無の單空にあらず、無量無邊祕密甚深の事を有する不空の一心である。この一心は虚空の一切處に遍在して、よく萬象を容含するが如く、一切處に遍在し萬有の本性にして、我等の自心性である。この自心性これ淨菩提心にして、心王大日如來である。しかれば本不生とは遮情よりいへば因縁生無自性即ち本來空の義なるも、表徳よりいへば本來不生不滅の淨菩提心體である。毘盧遮那常住法身の體である。大師吽字義の阿字本不生の釋段に大日經疏の文を引用せられたるが、簡にして、

よく疏の本不生の意が顯はれてある。

以下一切法無不從衆緣生。從緣生者悉皆有始有本。今觀此能生之緣。亦復從衆因緣生。展轉從緣誰爲其本。如是觀察時則知本不生際。是萬法之本。猶如聞一切語言時即是聞阿聲。如是見一切法生時則是見本不生際。若見本不生際者。是如實知自心。如實知自心則是一切智。故毘盧遮那唯以此一字爲眞言也。

本不生の淨菩提心は遍一切處の體にして、これ盧遮那法身である。而も我等の自心は遍一切處の體なりと説くのみにては、自心の淨菩提體を觀ることが出來ない。されば疏に無相觀によつて本不生の心地を開見し得べきを説く。即ち因緣生法の無生を觀じ、心を主觀に求むるに不可得なり、客觀に求むるに不可得なり、主客冥合のところに求むるに心不可得なり、所謂緣觀俱に絶するところに、一切の戲論妄想盡き、本不生の心性に契證するを得、本不生際を見れば、生死業生の生を離れ、如來常住の生を體得し毘盧遮那の果體を成せるものである。

行者於外塵中心不可得。復觀內身五蘊亦如聚泡沫芭蕉幻化。自求性實尙無所有。況於此中而得有。心。如是從麤至細去廣就略乃至現在一念識亦無住時。又復從衆緣生故即空即假即中。遠離一切戲論。至於本不生際。本不生際者即是自性清淨心。自性清淨心即是阿字門。以心入阿字門故當知一切法悉入阿字門也。此宗辨義即以心爲如來應正等覺所謂內心之大我也。

初觀陰界入時。即陰求心離陰求心皆不可得。相在亦不可得。故即時懸悟自心本不生際。於如來知見大菩提

道中。遠塵離垢得法眼淨。若不作如是方便先從著處觀之。而但言是心遍一切處畢竟無相。則一切衆生無由悟入。當知此觀最爲祕要法門也。

上述の如く善無畏三藏の本不生義は、一心は即空即假即中の三諦圓融の體なり、常住不生の一心なりと説くものである。本不生には無量の義趣あり、釋相多端なるも、如上は善無畏三藏の本不生義の一端である。大師の本不生義は、大日經疏に云ふ無相一心を、色心不二(物心一如の實在體)即ち六大法身なりと説くものである。この六大法身の本有常住、これ本不生の眞義となすものである。大日經疏に本不生の體は人法不二なり、心王の大日如來にして無碍自在の大用あることを明かさるにはあらざれども、本不生を無相の非人格の意義に釋することが多い。かの宗義の論題に自性本地法身説法せざる義を立し或は自性身に隨緣化他の義なしといひ、或は自證極位に語言なき義を不正義なりと云ふも、大師の釋に依らず、大日經疏のみより觀れば、かゝる説が成るのである。しかるに大師は本不生とは、人に約していへば、毘盧遮那本地法身の常住の體にして、法に約していへば色心不二、三密本有の體性なりとなす。即ち大日經疏は本不生とは從緣生無自性の義を表となすも、大師は因緣無性の義を簡び、本有常住の意を本とするものである、大日經開題には法身大日如來は、因緣所生の如來にあらずして、法然の所成なりといひ、或は曼荼性佛圓々之又圓。大我の眞言本有之又本等と釋し吽字義等には色心、三密の本性の本有を説き、因緣所生の義を遮し給ふ。かの吽字義の阿字の釋段は

大日經疏の文を引用せられたるものにして、なほ大師の自意顯れざるが。汗字の節段にて、大師の眞意が觀らるゝである。その汗字不損滅(阿字本不生と體を同じうす)を釋して三密の本有を説き、小乘の無常無我、法相の三無自性、三論の究竟空、天台の因縁生の三諦、華嚴の法界縁起を嫌ひ、凡て普通佛教の因縁生無自性の説を超越せる、不二果分に立ち、色心本有、三密常住を開演し、これ本不生の眞意義となす。しかし、大日經疏は無相一法界、不生一心を宗極とするものなるが、大師は色心、理智の而二不二の祕義を説く、而二不二共に宗の實義なるも、宥快師等は、高祖の教義の本旨は、寧ろ而二多法界にありとせり。

所謂損滅者吉空無常無我故。四相遷變故。不得自在故。不住自性故。因縁所生故。相觀待故。以是六義故故名諸法損滅。今所謂汗字實義者不<sub>レ</sub>如是也。無云汗字報身義。此報者非<sub>二</sub>因縁酬答之報果<sub>一</sub>。相應相對故名曰<sub>レ</sub>報也。此則理智相應故曰<sub>レ</sub>報。心境相對故曰<sub>レ</sub>報也。法身智身相應無<sub>二</sub>故名<sub>一</sub>報。性相無得涉入故曰<sub>レ</sub>報。體用無<sub>二</sub>相應故曰<sub>レ</sub>報也。是故常樂我淨汗字實義無<sub>二</sub>損滅<sub>一</sub>故。一如不動汗字實義無<sub>二</sub>異相遷變<sub>一</sub>故。十自在是汗字實義無<sub>二</sub>畢得<sub>一</sub>故。本住體性汗字實義不<sub>二</sub>改轉<sub>一</sub>故。遠離因縁汗字實義本來不生等<sub>二</sub>虛空<sub>一</sub>故。超過觀待汗字實義同一性故。理理無數。智智無邊。恒沙非<sub>レ</sub>喻。刹塵猶小。兩足雖多。並是一水。燈光非<sub>レ</sub>一。冥然同體。色心無量。實相無邊。心王心數。主伴無盡。互相涉入。帝珠錠光。重重難思。各々具<sub>二</sub>五智<sub>一</sub>。多而不異。不異而多。故名<sub>二</sub>一如<sub>一</sub>。一非<sub>レ</sub>一。無數爲<sub>レ</sub>一。如非<sub>レ</sub>如常。同同相似。不<sub>レ</sub>說<sub>二</sub>此理<sub>一</sub>。即是隨轉。無盡寶藏。因<sub>レ</sub>之耗竭。無量寶庫。於<sub>レ</sub>此消盡。謂<sub>二</sub>之損滅<sub>一</sub>。地墨四身。山毫三密。本自圓滿。凝然不變。汗字實義。斯之謂歟。

かゝる大師の教義を眞言乘の正意とし、本不生の實義と觀れば、大日經疏の釋の如きは、大師の教義よりも寧ろ顯教に同する點がある。されば古來大日經疏は眞言宗に依用すべからざる書なりとの義さへある。大師の御作と稱せらるゝ三密觀にこのこと論せられ、杲寶鈔等に議せらる。こは精細なる研究を要することにて、こゝに委説を略するも、古來かゝる義の存するより觀るも、大日經疏と大師の教義、意趣一致に習ふを宗義の必要とするも、また一應の相違點の存することを看取し得らるゝであらう。即ち六大一實、色心本有の高祖の本不生義を本として、大日經疏の本不生を解し初めて疏家高祖意趣一致の宗義が成るのである。

上の阿字本不生説は法の自性についての説なるが、更に三密觀について兩祖の相違點を敘せんに、兩祖共に第一義諦は人法不二にして、如來三密の自體は第一義に通徹する旨を談するも、而も大日經疏は人法の中、法を本とし、大師は人を表とするものである。疏は非人格の法を宗極とするが故に、三密加持の修行と共に衆因縁無自性の遮情觀を明かす。即ち行者の信心を因とし、如來の大慈悲を縁とし、悉地の果現成するも衆生の三密も衆因縁無自性、如來の三密も衆因縁無自性、悉地の果もまた衆因縁無自性、因縁果の三法宛然として無生法界體なる理趣を示す。所謂空と不空と畢竟無相にして一切の相を具する阿字大空三昧の理を説くものである。

以觀心爲因三密爲緣普門海會現前不謬故名爲有。以種種門推求都不可得是名爲空。此有空皆不出法界故說爲中。三諦不同而同。不異而異。一切方便乘人不能思議。餘法門例皆如此。不可遍舉也。(大日經疏第七)

かくの如く三密觀と共に無自性觀を示し、大空三昧に住すると、顯教の諸大乘教に無生觀に依つて、眞如實相を觀すると義相同するものがある。されば他門にては顯教と密教とは、其證する理は同じく無相眞如の體となす。たゞ二教異なる點は顯教は理觀に依り、密教は三密觀の上に阿字三諦を觀じて、證入する相違あるのみと觀んとするものである。

高祖の教義を觀ず、たゞ大日經疏に顯れた密教の教義と、顯教と對比したならば、一應如上の説が立するのである。顯密二教共に因縁生無自性を根本義とすと觀る人等は、何れも大日經疏を依憑として説を立するものである。即ち顯教に因果差別門に十界の建立を明かし佛と衆生との加持感應を説くも、眞如平等界は生佛の假相を絶し、感もなく應もなき一味の法なりと云ふと、大日經疏に感應の因縁、悉地の果をば共に本不生の理に歸すると云ふと、理趣同じきものがある。而も此の如きはこれ大師顯教の第一義諦は生佛の假相を絶する一味の法なりと嫌ひ給ふ説に同することになる。

即ち大師以前の密教は善無畏三藏の教義より云ふも、また金剛智、不空兩三藏の説に依るも、無相の一心を教の本體とせるものにして、兩部曼荼羅の建立を明かすもこれ無相一心の法より顯れたる人である。所謂無神論の上に立つる有神論にして、顯教の根本義に同するものがある。

しかるに大師の教義は顯教に衆生と佛との差相を絶する一味無生の理なりと云ふ眞諦の中に、佛と衆生との本有三密の體を觀る、而二多法界の説である。即ち衆生三密の本性、一心の體性は、衆因縁無自性ならず、幻化影像にあらず、本有常住なりと共に如來は因縁所生の果にあらず、法爾成の圓滿覺者なる祕義を開説し、衆生と佛の三密の自體は各々自性を守る而二多法界の理を示すと共に、生佛三密の體性法爾として無塵無數の三密を具足し、本來加持渉入する不二法界の玄旨を明かすものである。

以上は善無畏三藏と大師の教義の同異點を釋せしものなるが、以下金剛頂經と大日經との同異義を述べ、更に高祖の教義との關係に及ぼうと思ふ。

大日經と金剛頂經とを對比するに種多の同異點がある。其中一二の義を擧げんに、有相無相の法相よりいへば、兩經共に有相無相を並べ明かすも大日經は無相を本とし、金剛頂經は有相を表とすといひ得らるゝのである。即ち大日經は心内無相の曼荼羅と、心外有相の曼荼羅とを並べ説き、この有相無相不二の妙旨を示すも、無相の曼荼羅を本とするものである。不空三藏の陀羅尼門諸部要目に大日經の要目を釋して曰く

此經中二種修行。菩提心以爲因。大悲以爲根。方便以爲究竟。依勝義世俗。若依勝義修行建立法身曼荼羅。



是故此經中說先辨<sub>二</sub>虛空中曼荼羅。是故觀<sub>二</sub>本尊法身。遠<sub>二</sub>離形色。猶<sub>二</sub>如虛空。住<sub>二</sub>如<sub>三</sub>是三摩地。若依<sub>二</sub>世俗諦。修行依<sub>二</sub>四輪。以作<sub>二</sub>曼荼羅。云云

大日經は有相無相兩曼荼羅を明かし有相曼荼羅より無相曼荼羅に悟入する道を説くものである。

金剛頂瑜伽經十八會指歸等に依れば、十八會各々曼荼羅の建立を明かし其建立一相ならざるも、三十七尊の緣起を示し、一々の尊に三十七尊無塵無數の諸尊を具し、五部、四種曼荼羅、四智印の互具涉入帝網無碍なる義を説くものである。即ち金剛界は智が理に住する智法身の果曼荼羅を明かすものである。これを大日經の因心無相曼荼羅爲本の義に對せば、有相果曼荼羅を表とすといひ得らるゝであらう。また行者の因心本有の菩提心を明かすも各具五智無際智、無數の智徳を具し帝網重々の義を説く、これまた大日經の無相菩提心に對せば、有相の説なりといひ得らるであらう。即ち大日經の無相も相として具せざるなきの無相にして、極致は無盡重々の表徳にあるも、緣生無自性の遮情の理を説くこと多くこの遮情より表徳に出づる義を明かす。然るに金剛頂經は直に重々無盡の表徳に住する道を説くものともいひ得らるゝのである。但しこは兩經の説相の表てについて一應の相違點を擧げたるものなるが、細かに觀れば金剛頂經にも、其説文少なきも、また緣生無自性の義を説かざるにあらず、略出經の初めに、

諸法如<sub>二</sub>影像。清淨無<sub>二</sub>濁穢。無<sub>二</sub>取無<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>説。因業之所<sub>レ</sub>生。如<sub>レ</sub>是了<sub>二</sub>此法。離自性無依。利<sub>二</sub>無量衆生。是如

來意生

祇瑜經には、

諸法無<sub>二</sub>自性。無<sub>レ</sub>願無<sub>二</sub>染淨。

といひ十八會指歸には、

愚童覆<sub>二</sub>無智。不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>此理趣。餘處而求<sub>レ</sub>佛。不<sub>レ</sub>悟<sub>二</sub>此處有<sub>二</sub>。十六世界中。餘處不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>得。心自爲<sub>二</sub>等覺。餘處

不<sub>レ</sub>説<sub>レ</sub>佛

或は、

此中說<sub>二</sub>立<sub>二</sub>自身。爲<sub>二</sub>本尊瑜伽。訶<sub>二</sub>身外立<sub>二</sub>形像。瑜伽者。廣說<sub>二</sub>實相理。

または、

一<sub>一</sub>尊具<sub>二</sub>四種曼荼羅。四種印。廣說<sub>二</sub>實相理。心建<sub>二</sub>立曼荼羅。儀則。

または、

『三十七尊心要』の智慧波羅蜜の説段に三空解脫門に入るを明し、

一切萬法學體皆空無<sub>二</sub>一事而不<sub>レ</sub>眞無<sub>二</sub>一物而不<sub>レ</sub>實眞空妙有實相圓明

または、

能所之體本空空有之理本無中道之心斯契今此建<sub>二</sub>立金剛界三十七尊大曼荼羅及賢劫佛外金剛部二十天及四十天等。云云

此の如く縁生無性の觀、自身の上に曼荼羅を建立し、自心に佛を求め、有空の兩邊を絶し、中道に契ひたる心に、三十七尊等の諸尊を建立すと云ふより觀れば、金剛頂經と大日經も同じく、因心本有の無相淨菩提心の曼荼羅を本とするものなりと觀らるゝ。兩部大經何れも自心本具の曼荼羅を開見するにあるは一なるも、大日經は最初住心品に無相菩提心を説き次に具緣品以下に、有相加持の曼荼羅の建立を明かし、有相曼荼羅に入つて、つひに無相曼荼羅の開見を説けば、究竟は無相にあり。金剛頂經は、最初に五相の瑜伽に依つて五智を現證せる毘盧遮那如來の果曼荼羅を説き、一々の尊に三十七尊、四曼四印を具し互相涉入帝珠錠光の秘旨を談じ、次に行者、曼荼羅に入り、五相の瑜伽を修し、三密の妙用を行せば如來の果體を現證し、一々の身分、一々の毛孔、一々の相、一々の福德資糧、一々の智惠資糧、徧照佛に同なる理趣を説くものである。即ち金剛頂經は五智を現證せる毘盧遮那如來の果曼荼羅を表とし、行者無相淨菩提心の説文少なし、即ち有相無相兩曼荼羅の中、有相果曼荼羅を表とするものにし、行者の因心本具を説くも五智、三十七智、無塵無數の智體の重々無盡を明かすこれまた大日經の無相淨菩提觀に對せば、表徳有相なりといひ得らるゝであらう。また金剛頂經は先づ遮情の無識身三昧に入り後に表徳の五相成身觀を成ずることを明かすも大日經は有相の三密觀より無自性、無相觀を成ずることを説く。こゝにも金剛頂經は有相を本とし、大日經は無相爲本の義が觀らるゝ。五大五佛の相配に、不空三藏は地輪を以て大日に配す、これ本有法界、自性不改、多法界有相

を宗極とすることを示すものにして、善無畏三藏は空輪を以て、大日に配するは、これ無相一法界を宗義とするを表するものである。かくの如く觀れば金剛頂經は有相多法界、大日經は無相一法界を表とすといひ得らる。豊山の法住、管絃相成義に印度の大乗佛敎に唯識中觀の二派あり、護法戒賢相承の瑜伽唯識に、識相の差別を説くは、我が多法界の法門に似たり、即ち密敎と唯識とは性相、顯密固より同一に論ずべからざれども、金剛頂經の五智三十七智等、心智の無盡を説くは、唯識の識相種別の義に似たりといひ、なほ金剛智、不空等の金剛頂經系には譯語法相等唯識に同するものあるより、金剛智三藏入密以前に唯識を學習せられたるならんと斷じ、清辨智光の敎系の中觀佛敎は、因縁無生を説き、無所得を敎の本とすれば寧ろ一法界説なり。而して大日經疏の釋相、智度中觀の性相に依るもの多きより觀て、善無畏三藏は中觀より入密せられたるならんと述べ、かゝる見地より大日經は一法界、金剛頂經は多法界なる義を成せり。曼荼羅隨聞記に

唯佛界ナレハ金剛界ハ一法界、十界具足スレハ胎藏ハ多法界ナリ、五解脱輪三十七智ナレハ金剛界多法界、一多融

スレハ胎藏法一法界ナリ。印契ニ就テ外五鉢ハ多法界ナリ、無所不至ハ一法界ナリ。

金剛、胎藏一多法界の義は相望に依つて種々に説き得られ、金剛界は多法界なりと云ふと共に一法界なりともいひ得られ、胎藏は一法界なりと云ふと同時に多法界の義あるも、弘法大師以前の密敎についていへば、一應は金剛界多法界、胎藏一法界の義親しきか。而して大師は兩部等しく相承し給ひし

も、寧ろ多法界の金剛頂經系を表とし給ひしとも觀らる。但し大師の教義は多法界を實義とすと云ふも、金頂剛經の多法界説と全然同一でない。大師の多法界説よりいへば、兩部大經の一多二法界説は、共に一法界なりと云ふことが出来る。即ち余の管見よりいへば、大師以前の密教にては大日經一法界金剛頂經多法界なりといひ得らるも、大師の多法界説よりいへば、兩部大經の一多二法界説共に一法界ともいひ得らる。即ち大日經は阿字無相一法界心を體とするに對せば、金剛頂經は質多心を體とし、五智三十七智等心智の無數を説くがゆゑに多法界なりといひ得らるも、心法は無碍一味を性とし、智は光照虛通、法界に遍じ、平等なれば、一法界なりともいひ得らる。されば三種悉地軌には兩部曼荼羅等しく、不二の道に入り、阿字の一法に歸すと云ふ。なほ曼荼羅の建立について觀るも、胎藏は薩般若平等の心地に於て四重圓壇を印現し、一曼荼の諸尊皆毘盧遮那の加持身なれば、鬼畜人天等も毘盧遮那と平等一味の義を成じ、金剛界は三十七尊の内證異なりといへども、同じく五解脱輪の中に於て之を建立し、五智輪は一圓明を體とし、九會の別相を會して一印會の大日に歸するを説けば、これまた一法界を宗とするものと觀らる。

しかるに大師、阿字本不生中の理智を開いて、六大、色心、理智本有の宗義を立し、兩部の説を統合し給ふ。理智といへば共に心法に名く、所謂理は干栗駄 (hrīḍaya) にして、智は質多 (citta) であ

る。干栗駄は心臟、提要等の義あるが、佛教にては肉團心即ち人の心臟、非情草木の心、不生不滅の如來藏、自性清淨心を干栗駄と名く、自性清淨の理心を干栗駄と云ふは、理心は無分別にして緣慮の用なく、常住不生なるに依るか。質多は智、心、情、思想等の義あり、即ち有情の緣慮心を稱す。而してかの六大との關係をいへば、前五大は理で第六識大は智である。大師は干栗駄の理心を開いて法性五大の義を成せられしは、無分別の干栗駄理心と五大と義同するものあるに依るか。祕藏記に

本不生際 心虛空 不生不滅 是本不生不可得 陀尾羅吽欠也。

この本不生際の一性は、これ干栗駄の理心である。この理心即ち阿尾羅吽欠の五字なりとの義なるが、この五字は五大の種子なれば、これ理心即ち五大なりとの義成す。また心臟即ち肉團心を干栗駄と稱し、八瓣の肉團心に於て、自性清淨心を觀する祕義を説く。かくの如く大師は、本不生の理智一心を開いて六大無碍、理智不二、色心一如の宗義を立せられしが、この理智、六大は共に不生の法體なれば、共に法界を攝盡する法門である。

而して法性五大の理は各々萬徳を攝して、自性不改の性を有すれば、これ多法界、第六識大の智は、三十七智の内證不同なりといへども、智は光照不二を性とし、法界に遍じ平等にして、一法界の義を成す。また深く觀れば、六大各々自性に住し、自性不改なるは多法界にして、六大無碍瑜伽涉入は一法界である。而して多法界は胎藏にして一法界は金剛界なるが故に、六大各々自性本源に住するは胎

藏にして六大無碍光照不二の徳は金剛界である。または云ふべし前五大の理これ胎藏、第六識大の智は金剛界である。胎藏は因徳に住し萬徳を攝して多法界を表し、金界は果徳に居し、萬徳を聞いて一味の法界を顯はす。

かくの如く大師は本不生の理智を開いて、六大無碍一多相即の宗義を成じ、兩部大經の説を統攝し給ひしが、六大義を成ずるについては、金剛頂經をも依憑とし給ひしも、六大義はこれ大日經に依つて成せられしものである。高祖大師の教義は一多、遮情表徳、空有の不二を根底とせるものなるも、相承の一傳に依れば、多法界本有を實義とせるものである。而して本有多法界の宗義は、表て金剛頂經に依れるものなりと稱するも、深く其理趣を尋ねれば大日經に基くものと觀らるゝ。こはなほ他日の所論に讓るべけれども、大師の教相は多く大日經に依り、事相は金剛界を表てとし給ひしか。即ち余の所見に依れば高祖の教義に依らず、直に兩部大經を觀ば前述の如く金剛界多法界、胎藏一法界なりといひ得らるも、これを高祖の六大説に對せば共に心法一法界説にして、高祖の説が多法界なりと云ふことが出来る。しかして兩部を統攝せる大師の六大説よりいへば、胎藏多法界、金剛界一法界である。もとより兩部に各々一多を具するも且らく表てたる邊について解するのである。これをかの事相より觀るも、胎藏を本とせる小野は多法界にして、金剛界を表とせる廣澤は一法界説である。護摩法を修するに小野は三結を持し廣澤は獨結を執る。これ共に平等法界觀に住するを表するものなるが、

廣澤の獨結を持するは菩提心一法界の義を表し、小野に三結を持するは、三密平等(多法界)觀を表するものである。

#### □ 即身成佛義の解説

大師は凡夫の肉身に即して、法身如來の三密を顯得する即身成佛の義を明かす。而していかなれば生滅無常の凡身に即して、靈活自在、無礙常住の如來の大果を體顯し得るやの所以を明かさんとして開説せられたるは、六大、四曼、三密の法門である。即ち體相用三大の法門は、即身成佛の一大事を成ずる理趣を明かせるものである。密教の經軌の中に本尊の三摩地を觀じ、三密加持の功德力に依り、現身に成佛する義を説くも、而も現身成佛の旨を一書に結集し其理趣を明かせるものなきゆゑ、大師深く經論の祕旨を尋ね、三大圓融の宗義を立し、即身成佛義を開演せるものである。三大の解釋は今省略し、三大義を立せらるゝに當り引用し給ひし經文等につき釋をなし、大師の佛法の特質を示したいと思ふ。

#### 六大無礙常瑜伽

六大體大とは衆生身心の自性、諸佛の本身、萬有の體性である。顯教の諸大乘にも體大の説がある。即ち法性、眞如、實相、眞諦、第一義、無住、無相、空、不可得、一心、一如、實際、涅槃、佛性、如來藏、中道等は皆これ體大の稱である。而も顯教の體大は前述の如く、衆因緣生、無自性の空理で

ある。かの無住を以て諸法の本とすとの經説は、この意を示すものである。かく無住を以て本とする根本義は一なるも而も教の淺深に隨つて無住の意義また重々である。一切皆空、眞如一心、三千圓具、事々圓融等、凡てこれ同一無住爲本説の淺深である。これらは何れも有即空、生死即涅槃、衆生即佛、生滅事々の當相に無限の理趣を觀る玄旨を示すものなれば、此等體大説の上にも、一應、即身成佛義談じ得ざるにあらざれども、此等諸説は、衆因緣生、無自性空義を原理とせるものである。隨つて究竟は我等身心は永劫の實在性なき化幻の法である迷妄である、身心の中、心は眞如一心と同性なるも、身はこれ妄現なりと云ふことに歸するのである。身心は實在の妄的發現なり、永劫の實在性なき幻影、水月、虚空花等の如きものなりとの説の上に、即身成佛義立せざるが故に、大師は在來の體大説に依り給はず、六大體大の義を開演せられしものである。この六大體大の義に依つて衆生の身心本來毘盧遮那平等智身なる、理趣顯れ、即身成佛の義が成せしものである。即ち大師は身心共に實在性を有し而も身心は實在の妄的發現にあらず、實在の正當なる顯現なる意を明かさんとして、因分を超越せる果分の上にこの六大緣起説を立せられしものである。この果上の六大緣起説は、これ全然在來の佛敎と異なる立場に立てるものにして、大師の佛敎を解せんとするもの、殊に留意を要する點である。即ち佛敎は總じて因緣生の義を談ずるものなるが、所謂顯敎は因緣生の無生を説き、因果、能生、所生を明すも、この因果能所主客を絶する無生一如の法を體得せんとす、密敎は顯敎にて因果、能所

生を泯する一如の法、即ち都絶能所の境地に曼荼羅の世界、毘盧遮那果界の眞際を開示するものである。この果界は固より因果を絶し、能所を泯せる境界なるが故に、一々が皆これ毘盧遮那の靈徳を顯現せる靈活無礙の具體である。この果界を眞相を示さんとして大師は六大、四曼、三密の三大の義を以てせらる。而も都絶能所の上の能所、因緣果なるが故に、能生必ずしも能生ならず、所生必ずしも所生ならず、因これ法界、緣これ法界、因緣所生の法も亦これ法界、即ち密號名字の能所因果である。されば此境にては心即色、色即心、境即智、智即境、性相常住無碍自在である。大師の即身義に

佛説<sub>二</sub>六大<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>法界體性<sub>一</sub>。諸顯敎中以<sub>二</sub>四大等<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>非情<sub>一</sub>。密敎則説<sub>レ</sub>此爲<sub>二</sub>如來三摩耶身<sub>一</sub>。四大等不離<sub>二</sub>心大<sub>一</sub>。心色雖<sub>レ</sub>異其性即同。色即心心即色無障無碍。智即境境即智。智即理理即智無碍自在。雖<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>能所<sub>一</sub>二生<sub>一</sub>都絶<sub>二</sub>能所<sub>一</sub>。法爾道理有<sub>二</sub>何造作<sub>一</sub>。能所等名皆是密號云云。

この六大體大説に依つて即身成佛義立するものなるが、傳法記等には二門より之を明かす。即ち一は即體成佛の義にして、一は異類相望の義である。即體成佛の義とは六大法身の體は、十界の有情非情に遍じ、衆生の身心本來六大法身の體なるが故に、衆生そのまゝにして、本有金剛薩埵の體である。次に異類相望とは、我等の六大も周遍法界、如來の六大も周遍法界にして、無碍涉入の故に、彼も來らず、此も往かざれども、本尊と行者と瑜伽涉入、入我々入し、速疾に頓に大悉地を顯證し得るのである。この即體成佛と異類相望の義は即身成佛義の本文の上にも顯れ、他の御書物のうちにも見らる

のである。

如し是六大法界體性所成之身。無障無碍互相涉入相應。常住不變同住實際云。

六大の義を成立せんとして、引證せられたるは、大日經と金剛頂經である。大日經の我覺本不生等の文を、善無畏三藏は一の阿字本不生を轉釋すと見給ひしを、大師は六大の證文として引用し給ふ。經意多合にして淺深重々の義を含むが故に、兩祖各々一方面を宣揚し給ひしものならんも、大師は無相一法界の宗義より、而二多法界の義を開顯せられたるは、最もよくこれらのところにて觀らるゝのである。

六大體大には研覈すべき幾多の問題あり、こゝに一々委釋すべからざるも、大師の宗義を知るに足ると思ふ一二の義について述べんに

六大佛形なる論草あり、宗義決擇集第二、仙保隱遁鈔第二、愚案鈔上等に出づ。この論議は六大體大は非人格の法なりや、また宇宙的靈的人格體なりやの所論なるが、六大體大に佛格を觀る義を成立の正義となす。以て大師の教義は人法不二を説くも、寧ろ人を本とし靈的人格者を教の本體とすることを知らるゝのである。

凡聖六大なる問題あり、宗義決擇集第二、仙保隱遁鈔第二等に出づ。この論議には凡夫と聖者の六大體大は本來各別なる義を成立す。以て眞如の一理法界に周遍し、混同一味を宗極とする顯教に簡異

せる大師の多法界の義を知らるゝのである。宥快法印の曰く

固自宗意理無數、智智無邊多法界實義爲極致、故隨何位自性不改各自建立、各各守自性爲本源云。

一切衆生の自性各別を立つるものは法相宗なるも、實大乘は凡て凡聖の體性は一味平等の法性なる旨を説くものである。しかるに大師はこの平等法性のうちに而二多法界の説を立するものである。而もこの而二たるや法性無碍界の而二なるが故に、而二そのまゝにして、不二融即の體である。即ち凡聖の六大は其體各別なるも、而も無碍瑜伽を談するが故に神人間隔の宗教とも異なるものである。大師の六大體大説は人法不二を明かす。以て實在體は人格的なりや非人格的なりやの二説の調和を知るべく、また六大無碍即ち物心一如の説にて、唯物唯心説の究竟の歸結を知るべく、一多不二説にて一元多元の歸趣を解すべく、また當體即佛、我即佛の理趣を觀じつゝ、已成の如來の光明を仰ぎ進趣向上の一路を説く。即體成佛異類相望の二門を明すところに、萬有神教と一神教の融和を知るべきである。

#### 四種曼荼各不離

大師の即身義に六大體大より生起せし相大を、四種曼荼羅なりと釋し給ふ。即身義に四種曼荼羅の義を釋成せんが爲めに、大日經の字印形の三祕密身、及び金剛頂經の四種曼荼羅の義を引用し給ふ。大日經の字印形の三祕密身は自ら四種曼荼羅の義なるも、四種曼荼羅は金剛頂經の法門である。九會

曼荼羅は四曼に依つて建立せられ、十八會の曼荼羅は四種曼荼羅に攝入し、三十七尊乃至無盡の諸尊皆四種曼荼羅を具す。而して四印會には一心に四曼を開き、一印會には四曼を合して一體となす秘旨觀らるゝも、四曼はもと曼荼羅の諸尊の差相を釋せし法相なれば、有相多法界を表とするものである。

大日經本尊三昧品には、字印形の三祕密身に有相、無相の二義あることを説かる。もとより、有相、無相不離なるべきも、疏の釋より觀れば、寧ろ無相を尊重せるものである。しかるに大師は有相表徳を本として釋せられ

如<sub>レ</sub>是四種曼荼四種智印其數無量。一量同<sub>レ</sub>虛空。彼不<sub>レ</sub>離<sub>レ</sub>此此不<sub>レ</sub>離<sub>レ</sub>彼。猶如<sub>レ</sub>空光無碍不<sub>レ</sub>逆。云云

後の宗義學者、四曼の即離を論じ、即離の二義の中には、離の義を以て法體と爲し、即の義は體の上の瑜伽涉入の徳相なりとの説を立するに至りしが、こゝにも大師の多法界有相の教義の特質を觀ることが出来るのである。

經軌には、四種曼荼羅は曼荼羅の諸尊の差相を明かす法門である。しかるに大師は六大體大より生起せし、三種世間の差相凡て四種曼荼羅の體なる義を示さる。かく緣起相大の諸法を凡て曼荼羅體なりと釋せらるゝところに、密教は因分を超越せる果分の教なる眞趣が觀らるゝのである。而して一切諸佛諸尊に四種曼荼羅を具すると共に、衆生の本性にも四種曼荼羅を具し、各々其自相を守り而も生佛の四曼法爾として、不離無碍なる深旨を示すものである。體大に於て即體成佛と異類相望を論せし

が如く、相大より云ふも、衆生の當相即曼荼羅體にして、無塵の諸尊の曼荼羅と涉入し、不離無量なるが故に、即身成佛の義を成するのである。

### 三密加持速疾顯

三密加持に依つて有相無相の悉地を得する道を明かすはこれ實修門より見たる密教にして三密加持速疾顯の一句は、眞言密教の全體を盡すものである。六大無碍常瑜伽、四種曼荼各不離の體相二大の釋の如きは、何故に凡身にして三密加持速疾顯の即身成佛の大果を成するやの原理を明かすものである。

而して大師以前の密教は、三密の功德力に依り、世間有相の悉地を成就し、また出世間無相の果に契證するを説きしも、その究竟最極の無相の果體は、三密圓滿具足の法身の體なる義明かならざりしが、大師は究竟の佛身たる法身大日如來は三密圓滿具足の靈格體なることを開演し、三密の修行に依つて、凡身に即して法身の三密を體顯する、これ即身成佛たる理趣を説き給ふ。

以下なほ此義を敍せんに、三密の中、語密、即ち眞言については、上に述ぶるところありしも、更に『總釋陀羅尼義讚』の文を鈔出するであらう。

如來於<sub>二</sub>百千俱胝阿僧祇劫<sub>一</sub>積<sub>二</sub>集菩提資糧<sub>一</sub>加<sub>二</sub>持陀羅尼眞言文字<sub>一</sub>。令<sub>二</sub>頓悟菩薩與<sub>レ</sub>此相應頓集<sub>二</sub>福德智慧資糧<sub>一</sub>。於<sub>二</sub>大乘修菩薩道<sub>一</sub>二種修行證<sub>二</sub>無上菩提道<sub>一</sub>所謂依<sub>二</sub>諸波羅密<sub>一</sub>修行成佛。依<sub>二</sub>眞言陀羅尼三密門<sub>一</sub>修行成佛。陀羅尼者梵

語唐翻名爲總持義。有四種持。(中略)

皆名陀羅尼眞言密言明。若與三密門相應不暇多劫難行苦行。能轉定業。速疾易成安樂成佛速疾之道。

即ち顯教は止觀六度の行に依つて無上菩提を證得するを説く教にして密教は如來が三大無數劫に積集せる功德力を以て加持し給ひし、眞言陀羅尼を念誦し、速疾に成佛する教なることを説くものである。

その身密たる印について經軌の説の一二を録出せんに、『念誦結護法普通諸部』に曰く

凡欲念誦先結三昧耶契安白頂上此等。一一印。先從一切如來大丈夫相莊嚴身分支節所生。一一如來有無量俱胝百千印。

『慈氏菩薩念誦法』に曰く

復次此法隨所行處或印己身成彼本尊身。或印他身亦隨他身隨作而成。譬如拙人手執諸佛菩薩印印於泥沙及涅等皆成諸佛菩薩像隨印成諸形象。此法印力亦復如是。雖未得悉地以下執諸佛法印之力上依教而行便成本法。若執法界印印於己身即成本尊慈氏眞言體。若以吠嚕左曩法印印於己身亦成吠嚕左曩之身。乃至應生諸菩薩葬賀薩埵諸天龍八部乃至人非人等之身隨所印相即成本身印己印他皆成本體三昧耶之身。雖凡愚不見。一切聖賢天龍八部諸鬼神及尾那夜迦皆見本尊眞身。諸護法明王等爲此親近俱相助成悉地速得成就。

『觀自在大悲成就瑜伽蓮華部念誦法門』に曰く

當想是印即是如來眞身等無有異。見此印者即爲見佛。即ち印契は如來の功德莊嚴の身分より生ぜし、如來の三昧耶曼荼羅身にして、諸佛内證の徳を印持し、決定不改なるが故に、之を以て自身を印じ、他身を印すれば、如來の妙身を印成するのである。次に意密について釋せんに、眞言、印契相成するも、意密が實相に契はずんば、悉地成せざる旨、經軌至るところに示されてある。

今之人若心決定如教修。不起于座三摩地現前。應於是成就本尊之身。故大毘盧遮那經供養次第法云若無勢力

廣增益住法但觀菩提心。佛說此中具萬行滿足淨白純淨法也。(菩提心論)

然未見諦人猶未能如毘盧遮那作種種神變等。但是觀心成就耳。然有二事眞實不虛。所謂我即是也。我即是者決定諦信。我即法界我即毘盧遮那。我即普門諸身。(大日經疏第二十)

これらは意密觀念力の大きなことを明かしたるものである。中古の宗學者三密本末、意密本尊、三密双修等の事を論じ三密平等の見地より解答して三密に本末なく、三密共に本尊にして、意密のみ本尊と稱せず、または三密双修して即身成佛の大果を成すべき義を成立せり。

凡そ眞言門に即身成佛を成ずるは三密の修行に依る。即ち深く本有の三密加持の理趣を觀じ、三密加持の修行を凝らせば、實相と相違するところの生佛而二の無始の間隔を斷じ、速疾に本有三密の實



相、三部の諸尊を顯得す。これ即身成佛である。三密の觀行は三密の實相を顯はすにあれば、三密行には三密の實相を觀するを要となす。しかるに其實相の義、大日經疏に依れば三密の自性無性の體である。即ち無相の菩提心に住するを、三密の實相を觀すと云ふ。かく三密の自性無自性を觀じ、本不生の一心に住するを説くが故に、智證大師は雜問雜記に大日經の大宗は心を以て本とすと云ふ。

若極論之惣攝心密又三密爲能入一心爲所入

かゝる智證大師の釋に依れば、大日經疏に生佛の三密同じく第一實際妙極の境に至ると云ふは、生佛の三密自性無自性の一心を體とすと意にも解せられ、または生佛加持は因果差別の俗諦の上の説にして、その眞諦は感もなく應もなき一味の法なる意義に解せらる。大日經疏第二十卷無相三昧品に有相の三密より無相の一心に契證する文を讀まばその意を會せらるゝであらう。

もとより疏家の教義も、高祖の教義と一致に見て、三密に本末を見ず、三密平等を宗の正義とし、智證大師の説の如く見ざるを、宗の正義として傳ふるも、こは高祖の教義を本とし、疏家の教義も高祖の教義と同一理趣に解して、しか云ふものである。もし疏の釋のみよりいへば、三密を能入として、一心に契ふ旨を説くものとも觀らるゝ、隨つて疏には三密の實相を觀すると云ふは無相の淨菩提心を觀することである。

しかるに大師の教義よりいへば、三密の實相に住すとは、生佛の本有の三密の體性の法爾加持の體

を云ふ。即ち大師の教義は、眞諦一味の無相の法の上に、更に佛と衆生との三密の自性本有常住を説き、その三密の體性各々その自體を動せず、無數の三密を具足し、法爾として加持涉入せる體を三密の實相と云ふ。この三密實相の理趣に住して、三密加持の修行を成せば、速疾に本有加持の體性を證得するを明す。

三密加持速疾顯者。謂三密者一身密二語密三心密。法佛三密甚深微細等覺十地不能見聞。故曰密。一一尊等具刹塵三密。互相加入彼此攝持。衆生三密亦復如是。故名三密加持。若有眞言行人。觀此義。手作印契。口誦眞言。心住三摩地。三密加持故早得大地。加持者表如來大悲與衆生信心。佛日之影現衆生心水。曰加。行者心水能感佛日名持。行者若能觀念此理趣。三密相應故現身速疾顯現證得本有三身。故名速疾顯。

生佛本有の三密の體性は刹塵の三密を具し、相互加入、彼此攝持す、これ三密實相の體である。この三密實相の體は六大體大にて六大法界體性所成之身。無障無碍互相涉入相應。常住不變同住實際。と釋し、四曼相大にて如是四種曼荼四種智印其數無量。一々量同虛空。彼不離此々不離彼。猶如空光無碍不逆と開説し給ふと、理趣を同うするものである。かくの如く生佛の三密の體性は、各々無數無邊の三密を具足し、二にして不二、不二にして而二、本來法爾として靈的融合をなす、その本有三密の理趣を觀じ、修生の三密に依て、其實相を現證するこれ即身成佛である。

重重帝綱名即身者。是則舉譬喻以明諸尊刹塵三密圓融無碍。(中略)如是等身、縱橫重重。如鏡中影像燈光涉入。

彼身即是此身。此身即是彼身。佛身即是衆生身。衆生身即是佛身。不同而同。不異而異。(中略)一而無量無量而一。而終不雜亂。云。

法然具足薩般若 心數心王過剎塵 各具五智無際智 圓鏡力故實覺智

さきの一頌四句に顯はれたる六大四曼三密の三大圓融の教義は、大師、大日經、金剛頂經等を依憑として、建立せられたる法門なるも、殆ど大師獨創の教義と云ふも不可なきものである。三大のなか用大たる三密の教は、眞言密教の特質にして、一切の密教に通ずる教なるも、大師以前にあつては、三密の法門に依つて世間有相の悉地を求むるを明かすにあらざれば、三密を能入門とし、無相の一心に契證するを説き、顯密二教所證の理、一である如くに解せられしを、大師は所歸所入の極致は遮情無相の一心にあらず、三密具足の毘盧遮那法身なる義を開演し三密の法門に依つて此の毘盧遮那如來の三密を體顯する旨を示されたるより觀れば三密の教へも大師に依つて其意義新たになれるものである。

而して今法然具足薩般若等の四句は、一切衆生は本來一切智々を具せる如來の差別智印なる理具の即身成佛の義と、この本具の一切智々を實の如く現證し體得せる顯得の即身成佛を明かすものである。大師は上の體相用三大圓融の義を明かす一頌四句は即身の二字を釋せるものにして今の法然具足等の一頌四句は、成佛を釋すと註せられたるが、もとより上の一頌四句にも即身成佛の義あり、今の一頌四句にも即身成佛の理趣あるは明かなるも上の一頌四句は色心の中、色を表とし、後の一頌四句は心

を表とせるより、且らくしか釋せられたるものである。これは成佛は心の問題なるより、今心の性徳を明かす一頌を成佛を釋すと註せられたるものであらう。而して衆生の一心に一切智々の佛智を具すれば衆生は本來成佛の體なりとは、大乘佛教の等しく説けるところにして、大師以前の密教も同じく高唱せる一道なるも、今即身義に釋せらるゝ一切智々の義は、大師不共の教義を宣明せらるゝものである。十住心論第十に曰く

又云復次志求三藐三菩提句。以知心無量故知身無量。知身無量故知智無量。知智無量故即知衆生無量。知衆生無量故即知虛空無量。此即橫義。衆生自心其數無量。衆生狂醉不覺不知。大聖隨彼機根開示其數。唯蘊拔業二乘但知六識。他緣覺心兩教但示八心。一道極無但知九識。釋大衍說十識。大日經王說無量心識無景身等。知如是身心之究竟即是證秘密莊嚴之住處。文

堅次第門よりいへば、小乗は六識を説く六識は六塵を緣する意識作用である。權大乘にては更に七八二識を明かすが第七識は我見を生ずる妄識にして、第八識は眞妄和合の識である。その第九識は實大乘に説く所の阿摩羅識である、この第九識は唯眞非妄の眞心にして、これ眞妄未和合の微細の識體である。この唯眞非妄、眞妄未和合の識體は深細なれども、なほ眞妄相對の眞である。理智相待していへば、なほ智中の理である。而も心性の體は非眞非妄、非有爲非無爲の絶對の眞心にして、所謂唯理絶對の體なることを示すものは、釋摩訶衍論に説く第十、一々心識である。此の如くの六七八九十

堅次第の法相よりいへば、其第十、一々心識は、これ實に所入所詣の心地の極である。而も大師の密教よりいへば、かゝる非眞非妄の心性は、これなほ遮情の極にして表徳曼荼の實義を明かすものにあらず、されば密教は、この非眞非妄の遮情の玄底に更に無塵無數の表徳の心王心數を開説するものといはねばならぬ。大日經の無量の心識、金剛頂經の五智三十七智乃至無盡の心數の説、釋摩訶衍論の不二摩訶衍、大師の心數心王主伴無盡、色心無量實相無邊の釋、これらは其名異なるも法體は何れも、表徳無盡の識體を明かすものである。この表徳無盡の識體説は、十界の迷悟の差相を動せず、毘盧遮那如來の一種の差別智印なりと開顯するものにして、これ不二門横平等の義である。次に祕藏記に

問顯教立八識密教立若干識耶。答立一識或八識或九識或十識乃至無量識。問其心何耶。答以中臺心王尊攝一切心主是謂一識。以八葉尊攝一切心主是謂八識。以八葉及中臺尊攝一切心主是謂九識。不動第九已上九識。其餘十佛刹微塵數一切心主攝於一識。是謂十識。是名一切一心識。

また即身成佛義に心王者、法界體性智等心數者多一識云云

此等祕藏記及び即身義の御釋は九識九尊を心王とし、其餘の十佛刹微塵數の心數を一識となし、先の九識に足して十識と爲し、第十識を一切一心識となすものである。

上述の如く自宗に心識の釋一様ならず、釋論に依る十識の建立、大日經の無量の心識及び釋論の不

二心識の建立、祕藏記並に即身義には曼荼羅に約し、九識九尊を心王とし、其餘の十佛刹微塵數の心數を一識として、心王の九識に足して、十識となす建立等である。

釋論の十識の建立は生滅より眞如一心に歸する堅次第を明かすものにしてこれ緣起因分の説である。更に大日經の無量の心識及び釋論の不二心は、第十一々心識の遮情究まるところに立つる、不二果界表徳本有の横平等の説にして、即身義及び祕藏記の心王心數の義は、不二果界横平等門中の堅差別の説である。即ち十界の迷悟差相を動せず、毘盧遮那如來の差別智印なる果界不二の横門中に、更に心王心數を別ち、五佛九尊を心王とし、其餘十佛刹微塵數の諸尊を心數となす説である。一切衆生は本來不二果界、毘盧遮那如來の差別智印の體にして、心王心數無塵の佛智を法然圓具せる即身成佛の體なる理趣を明かすものは、法然具足薩般若。心數心王過刹塵。各具五智無際智の文意である。

#### 圓鏡力故實覺智

この一句は上に明かす法然具足一切智々の圓明の心月を顯現し證得する、顯得の即身成佛義を示すものである。頌文の圓鏡につき先徳は大日心王の大圓鏡智、即ち六大不二の大曼荼羅なりといひ、或は大圓鏡智とは五智の通名なり、自宗は五智を以て即身成佛の智體となす、今の文は即身成佛の所由を明すゆゑ、圓鏡の文、五智に通ず、五智圓滿の智體諸法を照了するを譬に約して圓鏡と云ふ。必ずしも五智の中の大圓鏡智にあらざるべしと。又曰く圓鏡力故とは三平等觀なり、即ち本尊の三密と行者

の三密とが加持渉入すること、多くの圓鏡の互相影現するが如くなるを云ふ。祕藏記に曰く

住大圓鏡智引入諸佛於己體如何。曰本尊三密鏡能照一切色相。如大圓鏡智能萬像影現。本尊與吾無二無別。故吾三密鏡能照同本尊。非唯本尊與吾無二無別。一切已成未成諸佛亦同。與吾無二無別。故諸佛三密鏡能照與吾同。諸佛萬德圓滿眷屬圍繞。吾亦萬德圓滿眷屬圍繞。諸佛法界身故。吾身在諸佛身中。吾法界身故諸佛在我身中云云。

即ち上の頌文に六大無碍、四曼不離、三密加持、重々帝網、行者の三業をして本尊に同せしむるを即身成佛といひ、法然具足薩般若等の後の一頌四句は、一切衆生本來五智三十七智乃至無盡無數の佛智を具有し、その本有の一切智々を顯現し證得するを即身成佛と説くものにして、もとより上の一頌の所明と歸趣同一である。即ち眞言門の即身成佛とは實の如く自心本有の佛智を開見し、體得するにあり。その自心本有の一切智々を開見する道無量なるも、三密加持の修行これ要門なり、三密加持の修行に依り、心佛衆生の三密の自體本來法爾として靈的融合をなせる本有の三密を體得し、根本無明を斷じ、五智の心鏡圓かに開け、寂にして照、法界を大圓鏡智のうちに融攝し、法界に自在を得て慈悲の妙業無窮なるを即身成佛と云ふ。

即身成佛義を異本即身義には、理具、加持、顯得の三種即身成佛として釋せり。而して古來三種即

身成佛の中、大師の即身成佛義の正意は何れに存するやの調べがある。この理趣を究尋せば、大師の教義の正意、即ち密教の正意自ら顯はる。されば一應其義を述ぶるであらう。異本即身義に三種即身成佛義を釋して曰く

問。其三種一如何。答一切衆生身心中金剛胎藏漫荼羅遠離因果法然具云理具即身成佛也。由三密加持自  
身本有三部諸尊速疾顯發故云加持即身成佛也。三密修行已成成就故。即心具萬行見心正等覺證心大涅槃發  
起心方便嚴淨心佛國從因至果以無所住住於其心。如實覺知名顯得即身成佛也。

所謂一切衆生無始より以來、兩部曼荼羅の徳を具足し、色心の擧體即ち是れ毘盧遮那平等知身なりと知見するを、理具の即身成佛と名け、三密加持の修行に依り、本尊と行者、互相渉入、彼此攝持し、三摩地現前するを加持の即身成佛と名け、此の三密の行究竟成就して、毘盧遮那の果徳を正しく現證する位これを顯得の即身成佛と名く。この三種即身成佛は、一の即身成佛を義を以て分説するものにして、一を闕けても其義圓滿せざるものなるも、擧勝爲論して即身成佛の正意は理具にありといひ、或は加持なりといひ、また顯得なり、または三種共に正宗にして、一を擧げて論ずべからざるものなりとの説をなす。

三種即身成佛の中、大師の即身成佛義の正意は、理具の成佛にありとの説を立するものは、法性、道範、長覺、印融等の諸師である。これ等の所説に依れば、顯教の始覺宗の遠劫作佛に對して、密教

は本覺爲宗、即身成佛義を立するものである。即ち自宗は不二果界中に十界の本有を談するが故に、迷悟共に佛と稱し、佛相は果位に限らず、一切衆生本有薩埵、これ眞實の佛である。即身成佛とは源と本有性徳、自性不改の理具の即身成佛義に基く、かゝる見地よりして即身成佛の正宗は三種即身成佛の中、理具にありとなすものである。この義に依て密教の他佛教に異なる點を看取し得らるゝのである。即ち顯教の實大乘家にては、一切衆生悉有佛性を談じ、その法爾不變の理よりいへば、衆生本來成佛せる理具の成佛義を明かすも而も高祖大師の教義よりいへば、顯教大乘教の理具の成佛義は自宗の義と同じからず、顯教大乘の理具成佛の法體は無相眞如の理なるが無明煩惱に依るが故に、眞如本覺より隨緣流轉せるは生死の衆生である。この流轉生滅の迷相そのまゝ、不生不滅の眞如本覺の體なる理趣を明かすも極致は流轉生滅の人は假にして、眞如の法のみ眞の實在となすものである。大師は此等の説を緣起因分の教なりとし、その顯教の教の極致たる眞如界中に、十界を建立す、この眞如果界中の衆生は生死流轉の迷子にあらず、毘盧遮那如來の差別智印にして、悉く曼荼羅の聖尊なりとするが故に、顯教の大乘に因分の衆生が、眞如理性を具するを理具の成佛と云ふと、果界の衆生の兩部曼荼羅の佛徳を法然圓具するを理具の成佛と云ふと、因果二分天地の相異があるのである。

されば大師の即身成佛の正宗は、理具の成佛にありとの説に依つて自宗は本覺爲本の宗にして、顯教の始覺宗と立場を異にすること顯はれ、第八識に於て凡佛一如の觀に住せば、一切の作業實相に相

應する如來の作業なりとの、自宗の表徳の義、知り得らるゝのである。かの大日經の正意を論じ、大日經の正意は、法の緣起も、機の趣入も、從果向因なる義を立する、長覺師の教系は、大師の即身成佛義の正宗は、理具にありと觀るものなるが、此等の説に依らば、密教は本覺爲宗にして、始覺もなほ本覺に約して、下轉の義存すとなし、法然本有の理具の成佛を正宗と觀るものである。

次に加持の成佛、これ即身成佛の正宗なりと觀るものは、賴瑜法印である。この説に依つてまた密教の特質を知らるゝのである。上述の如く自宗は果界に十界を建立す。この果界の十界は如來果相の顯現にして曼荼羅體なるも、而もこの果界に更に迷悟、因果、佛と衆生、因果と實相、差別と平等、二而不二等の義あり。この果界の佛と衆生との加持感應を明かし、已成の如來の三密の加被力に依り、行者本有の佛性を開見すべきを説くものである。感應加持は何れの宗教も説かざるはなきも多くの宗教は神人間隔の上に感應を明かすものなるが顯教の如きは、因緣生の俗諦に佛と衆生との差相を説き、其感應を明かすも眞諦無相眞如界には衆生と佛との差相を絶し、感もなく應もなき一味の法なりと説くものである。しかるに密教は生佛三密の體性各々異なり、而二差別しつゝ、而も冥然同體をなす不二平等の義を説くものである。而して行者三密加持の修行に依り、本有の三密加持の實相を現證する道を明かす。三種即身成佛何れも即身成佛の正宗たるべきも我等修行者よりいへば、加持の成佛を正宗とすべきである。即ち理具は因果凡聖に通ずる成佛の體にして、顯得は唯佛果位なれば、行者の當

位よりいへば、加持の成佛を宗とすべきである。即身義には六大無碍、四曼不離、三密加持帝網重々を以て即身成佛と云ふ。即ち行者の三業を本尊の三密に同せしむるは、これ即身に大覺位を證する道である。而して即身成佛の正意は加持の成佛にありとの義よりいへば、本尊と靈的融合の境に入れるものは、一分即身成佛を體現せるものといひ得らる。即ち即身成佛とは凡夫の企て及ばざる法門にあらずして、一切修道者の齊しく到達すべき宗教の妙境である。

即身成佛の正宗は顯得にありと觀るものは、信日、賴寶等の諸師である。此等の人は或は顯密對比して成佛の遲速、證果の勝劣より、或は即事而眞の實義等より論じて、顯得を甚深なりとなすものである。即ち他佛教にては往生淨土といひ、入涅槃といひ、三大無數劫に無上覺を成すと説くも、自宗は現身に三昧を體得し、三密四智印の妙用に依り、凡夫の肉身に忽ち佛相を現する顯得の成佛を談ずこれ實に自宗不共の説である。理具加持の成佛甚深なりといへども、なほ迷悟不二に約し、因位を指して佛と爲すものである、悉有佛性、感應道交の義よりいへば、顯教の大乗教にも理具加持の義門これあるも、現身に無上覺を體驗する、顯得の成佛を明かすに至つては眞言不共の説なれば、即身成佛の正宗、顯得にありとなすものである。

三種の即身成佛共に正意となすものは、玄海、願行、宥快等の説である。即ち三種即身成佛は即身成佛の義門の不同にして同時證得の法である。名字に於ては一分顯教に通ずるものもあるも、三種の

法體は顯教の所明と異なれば、三種共に自宗不共の法門にして、何れも正宗とすべきものである。理具の成佛よりいへば、顯教にも涅槃經には一切衆生悉有佛性といひ、一切衆生本來成佛せる理具の説もあるも、而も其理具の佛性たるや、無相一心の理體にして、眞言密教に云ふ一切衆生の自心に本來金剛胎藏兩部理智の性徳を具するを理具成佛と云ふと異なり、其加持の成佛も五部の祕觀、三密妙行に依り、加持感應速疾に悉地現前の義は諸教に説かざるところである。また顯得の成佛も顯教には三大無數劫に六度萬行を修し、十地満足の位に頓に報應二身の佛果を成すと説き、自宗には三密の修行究竟成就し、一生に毘盧遮那三身の果位を現證すと明かすが故にこれまた餘教の建立と異なるものがある。かくの如く三種の成佛何れも顯教の所説と異なれば、三種共に自宗の正宗と觀るものである。上述の如く義の勝れたるに約して、或は理具、或は加持或は顯得を以て大師の即身義の正意を觀んとするものもあるも、三種即身成佛とは、一つの即身成佛の義門の不同にして、一を闕くも其義圓滿せざるものである。即ち三種は因縁果の三法、法爾隨緣、本有修生一法の兩義である。



三種相全うして自宗不共の即身成佛義を顯示するものなれば、三種共に正宗と觀る。

上來所述の如く、即身成佛義の正意を論じ、理具、加持、顯得或は三種共に正宗なりと觀る四義は、これ即身成佛義の正宗を知るに、肝要なる説なるのみならず、この理趣を闡明せば、自ら正宗の正意が顯はるゝのである。以上の四説攝すれば三門となる。即ち本有本覺爲本と修生始覺爲本と本始不二爲本とである。理具を正宗と觀るは本有説にして、加持顯得を爲本とするは、修生説、三種共に正宗とするは本修不二説である。此等の所説は何れも深き所由存し、卒爾に其義の淺深是非を判すべからざるも三種即身成佛何れも正宗となす説は、よく即身成佛義の正宗を明かすと共に、正宗の正意を顯示するものである。即ち凡身即佛の自覺(理具)に住し、瑜伽三密の妙行(加持)を修し、本有三密の實相を顯現し證得(顯得)するは、即身成佛義の正宗にして、正宗の正意である。

即身成佛義の正意を理具なりと觀る長覺師の説と、三種共に正宗となす宥快師の説は、南山にては壽門寶門の異義として傳へらる。

而してこの兩門の異義の由來を、事相の相傳より釋し、長覺師は廣澤西ノ院流を相傳す、廣澤流は許可即傳法にして重位を立てず、依つて理具成佛を以て正意とし、快師は小野安祥寺流を本流とす、小野は許可と傳法とに重位を立つるが故に、三種共に正宗と習ふ、さればこれ相傳の不同にして、共に宗の實義なりと云ふ義あり。而してこの即身成佛の正意の義門は、かの兩部大經正意の説と一致に

解すべきものと思ふ。大日經の正意は機法共に從果向因なりと云ふ義を立つる、長覺師の教系に屬するものは、即身成佛義の正意は理具の成佛にありとし、法の緣起は從果向因なるも、機の趣入は從因至果なるべしと云ふ義を成する。宥快法印は、三種即身成佛共に正意なりと云ふ。以下なほ兩部曼荼羅の所明等に思ひ合せ此義を釋するであらう。兩部の曼荼羅の諸尊は、一切衆生をして法性果界の眞趣を體顯せしめんとして印現せるものである。即ち佛果理智の功德を兩部に開て、衆生をして曼荼羅の諸尊を體得せしめ、自身本有の曼荼羅を開悟せしめんとするものである。而して兩部曼荼羅相對していへば、金剛界は從因至果の曼荼羅、即ち九會を攝して一印會に歸す。是れ即ち上轉の義である。胎藏は從果向因の曼荼羅にして、中胎より下轉して第四重の等流身まで下つて衆生を利益し給ふ。或は金界は果曼荼羅胎藏は因曼荼羅、また兩部曼荼羅に本有修生の區別をなすとき、常には胎藏を以て本有となす、十界を具するが故に、これ十界本有の義である。即ち十界の依正の一々法界を攝盡し各々曼荼羅體なる旨を明かすものである。金剛界を修生となすは始覺轉昇、遂に一印會に歸するゆゑである。或は金剛界を本有とす、瑜祇經には本有金剛界即ち衆生本有の果體の實義を明かす。この時は胎藏を修生と意得ふることあり、大日經疏の第三卷に若行因至果則第三重之所引攝成就能通第二重。第二重之所引攝成就能通第一重。第一重所引攝成就能見中胎藏云云此等は外部より轉昇して中胎に至る。始覺上轉の義である。また兩部相望していへば胎藏は阿字本不生の無相法身より十界の有情

非情の一切を開發することを説くものなるが故に一面より見れば哲學的に宇宙の開發を明かすものなるが、金剛頂經は五相成身始覺圓滿の大日如來より三十七尊等の佛身の示現のみを示す、されば大日經の哲學的に宇宙の開發を明かすに對せば金剛頂經は宗教的に佛身の印現のみを示すともいひ得らる。

かくの如く兩部互に本有修生、從因至果、從果向因の義あり、而も上下二轉は不離同時にして、かゝる兩面を統一せる具體が、これ毘盧遮那法身にして、また法性果界の曼荼羅の眞相である。而も密教は顯教の始覺宗に對せば從果向因を正意とすといひ得らる。即ち宇宙は毘盧遮那靈格の果體の顯現である、大師の所謂十界は毘盧遮那の差別智身である。兩部曼荼羅に從因至果の義あるも、密教即ち果界の因果は所謂密號名字の因果にして、因と云ふも臺實爲因の因なれば、因が即ちこれ果體である。上に兩部大經の正意を述ぶる節段に明かしたるが如く兩部互に從因至果、從果向因の法門あるも、兩部等しく佛身の印現、即ち從果向因を正意とすと觀るべきである。

かく法の緣起よりいへば從因至果、從果向因の二面あるも、從果向因を正意とすと云ふが如く、機の修入より云ふも、この從因至果、從果向因の二面がある。而も上轉下轉、從果向因、從因至果は同時不離である。向上進修、從因至果の行相、これをその法體より見れば、從果向因即ち毘盧遮那の體性を顯現せるものである。法性は無盡に隨緣緣起し、無限に開發しつゝ、其の當位が不生實相の法體である。隨緣即法爾、法爾即隨緣の故に無上菩提を求め、轉深轉妙、三世に上々去々し、必度普度十

方に下々來々するも、しかしながら法爾本有の一心の本法を出でず、法爾の一心、本有の毘盧遮那の體性に住し、上轉下轉毘盧遮那金剛の舞戲なりと體驗するこれ密教の歸趣である。即ち始覺上轉、無限の進修が、同時に本覺下轉、永劫の歸源である。隨緣の諸相即法爾法性の眞趣である。こは矛盾せる道の兩面の様見ゆるも、實は一の道の兩面にして、道はこの兩面を統一せるものなるが故に、この兩面を統一して體驗するところに、道の眞趣が存するのである。

前述の如く兩部互に因果の法門あるは、この因果の法門に依て、非因果の本有の曼荼羅體たる理智本有の果體に契證せしめんが爲めなるが、發心即到の機は我即佛の理を聽き、この非因果の本有の曼荼羅體に安住す。これ三種即身成佛よりいへば、理具の即身成佛である。眞言行人は發心を云ふも、八七六五と深より淺に出で、東方第八識の發心にして、北方の方便爲究竟に至る。これ化他の徳相にして從果向因の義である。修行の時も行者の心品を偏へに化他に住せしむるを以て眞言行者の用心となす、かの一修行法の最初に四無量觀に住する等此義を示すものである。

自身即佛の理趣を聞くとき、發心即到の者は、開悟成佛す。而もこれに堪へざるものは五相三密の修行を勤修して、自身即佛の大果を成す。眞言教の經軌は多くはこの修行成佛の機の向上轉昇の次第を明かすものである。即ち三種即身成佛の中、加持の即身成佛を主として説くものである。されば我身本有の曼荼羅の體なり、我即法身の觀心に住して(理具の即身成佛)修行證入すべきである。その修



行成佛、即ち加持の成佛よりいへば、表て從因果至果といはねばならぬ。而も三密加持の修行に依り、本有の曼荼羅に融會し、本有曼荼羅の徳を分に顯現するに至れば、これ加持の成佛に即して一分顯得の成佛を見るもの、即ち從因果至果に即して從因果の義あるものである。即ち三密修行、轉昇向上のところ法體より觀れば、法身の功德を實現しつゝあるものである。所謂上轉のところ下轉なり、已成如來の光明を仰いで進趣向上のところ、同時に自心佛に歸還しつゝあるものである。即ち加持身を感見するところに同時に本地身を見、自身佛を見つゝあるものである。

かくして觀行圓熟し、而二の隔執を斷盡して、本有曼荼羅の體を顯現し證得するに至れば、これ顯得の成佛である。

#### ハ 總 結

上來世人の密教に對する誤謬を匡し、次に顯密二教の相違點を示し、以て密教の立場を明かにし、次に祕密の語義を解して眞言密教の眞意義を釋し、釋摩訶衍論、大日經、金剛頂經の所明の法體を辨じ、兩部大經の正意を敍し、三部五部等眞言密教に種多の經典あるも凡て兩部に攝屬することを明かし、次に大日經を根本依憑とする善無畏三藏の一法界の教義と、金剛頂部を傳來せる金剛智、不空の兩三藏の多法界の教義、及び此等兩部を相承し、密教々義を建設し其眞意義を宣揚せる弘法大師の教格を辨じ、更に大師の宗義を明かにせんが爲に即身成佛義の解説並に其正意等を略述した。

而して所釋多端なれども、其要とするところは、密教以外の佛教は所謂遮情教にして、我より無我に、有より空に、生滅より眞如に、有限より無限に、特殊より普遍に、所謂因果、能所、主客を絶する一如の理に還元せんことを教ふるものなるも、密教は此主客能所を絶せる一如の理の極致に曼荼羅の世界を建立し、此曼荼羅の世界にては而二即不二、有限即無限、特種即普遍、一々の諸法各々が圓融自在にして法界全體を融攝せる靈活無碍の靈格體なり毘盧遮那如來の差別智身なることを明かすものである。即ち一々が一切を融攝せる法界體なる理趣を示すのみならず、祕藏記の所謂各々守自性、各々自建立にして、各々が三密の自性に住し各々法界曼荼羅を成立し、各説三密、自受法樂、毘盧遮那自性の體なることを明かす。此の如く一切衆生は曼荼羅の自性に住し本有の薩埵なるも、其理趣を覺知せず、自ら小我に妄執し、自在無碍の大曼荼羅界中に、小系統を成し、三界牢獄の中にあるは生死界中の衆生である。生佛の曼荼羅の體性は本來平等平等にして、靈的融合を成せり、されば三密加持の修行に依り、此の本有の靈的冥合の境を體得し、本有の曼荼羅の體を顯得せしめんとするものは眞言密教である。

衆生と佛陀との對立はこれ俗諦因果界の説にして、眞諦一味の境には生佛の假名を絶すると云ふ、無相眞諦の極致に更に生佛曼荼羅の自體を明かしこの生佛の自體は圓融無碍にして、一に一切を具足すと云ふのみならず、各々の自體は自覺的靈格にして、大智大慈大定を具し、常恒に佛事を作して息

まざる體なること等を知らんとするものは、吽字義二教論の二重の二諦説、或は寶輪の、顯藥拂塵眞言開庫等の釋、即身義の都絶能所の上に更に能所生あるの義、祕藏記の性之處ノ性相宛然而本有也の釋、或は祕密藏は曼荼羅を體とし三々味を宗とし三密を用とするの釋、大日經の本不生、金剛頂經の五智三十七尊、釋摩訶衍論の不二、菩提心論の三摩地菩提心、弘法大師の六大四曼三密の三大義、吽字義の色心無量實相無邊の釋、或は十住心論の第十祕密莊嚴心の釋、即ち大日經金剛頂經を引いて、菩提義に約すれば無量無邊の金剛智印あり、佛陀義に約すれば無邊無量の持金剛者あり、此等は皆悉く一相一味にして、第一實際に到るの祕釋、及び三密の智印其教無量なり、身及び心皆三種世間に遍滿して佛事を作り刹那も息まず等の文義を觀るべきである。

眞言密教は如來内證の祕奥を開演せるものなれば、其旨趣深玄實に知り難し、而して祕密の深意を眞に體得せんには、事相門に入らざるべからず、其事相無量なるも、其祕旨は灌頂の大事に顯はる。即ち灌頂の大事たる印明なるものは眞言密教の深意を端的に表顯せるものである。本邦の事相に小野廣澤等の諸流相分かれたる、原因については單純に解すべからざるものもあるも、これを根本的にいへば、實に灌頂の印明の相違に存す。以て先徳眞言密教の深意を解することの一樣ならざりしを知るべきである。但し灌頂の印明は三昧耶に入らずして顯露に説くべき法ならず、またこゝに諸流の大事の相違を印明について述べんとするにあらず、而も密教の正意を示すに灌頂の印明について語ることの

適當なるを思惟するが故に、その印明は顯露に記せざるも、其印明の表示する理趣について少しく述ぶるであらう、而して諸流各々の相傳の印明にて、我身即法身の祕趣を印可決定するものなるが故に、二傳和會して觀ることの正意を失する嫌ひなきにあらざるも、今は醍醐の傳の一印一明、小野の傳の一印二明について少しく述べてみようと思ふ。醍醐の傳の一印一明に依つて大師の即身成佛義の都絶能所、即ち理智、色心、因果、能所生等の一切而二の見を絶し、思惟分別を遮し、隨縁の差相を泯せる大不二法界の體性に住し、十界の依正はさながら毘盧遮那の己體、一切衆生は本有の薩埵なりと體得するこれ密教の正意なる旨を知り得らるゝのである。また小野の一印二明の傳は、大師の所謂都絶能所の上に能所生、祕藏記に性の處の性相は宛然として本有なり等の御釋の實義、即ち因果、能所生、色心、理智等の差相を絶する大不二の體性たる一實の果界に、更に性相、平等差別、法爾隨縁、色心、因果、從因至果、從果向因等の義門あり、而もこの果界の性相、平等差別等の法門は、本來法爾の性徳にして、上下二轉さながら不生一心の體性、法性の性徳なる密宗の奥義を表顯せるものである。

密教に兩部の曼荼羅を明かし、其の曼荼羅に各々從因至果、從果向因、向上向下の法門あることは上述の如し、而して兩部各々因果の法門あるは、これ因果の法門に因つて非因非果の法體に契證せしめんがためである。兩部共に非因非果の法然本有の曼荼羅を體とす。此義よりいへば兩部に因果、上轉下轉の分別、本有修生等の釋をなさず、たゞ法然本有の曼荼羅なりと觀る、この非因非果の法然本有

の曼荼羅これ自宗所明の至極である。かの醍醐の一印一明の秘傳は實に此の義を示すものである。第三重にては理智冥合、兩部不二を觀ず、諸法の當體本來無作の法にして、十界の依正は本來毘盧遮那の體、一切衆生は皆悉く本有薩埵なりとす。

然るに衆生は無始の間隔に依つて之を覺知せず、妄りに生佛而二の隔執を成し自ら生死海に流轉す。大日如來この迷途の衆生を愍みて大日經に如實知自心と開示す。如實知自心とは實に第三重の一印一明の極意である。眞言行者實の如く自心を知らんとして、本尊の三密を修し、入我々入の觀を凝らし、曼荼羅の諸尊を感見する位は、初重の二印二明の位にして、大日經疏に所謂行者見<sub>レ</sub>加持身と云ふ分齊である。また見<sub>レ</sub>加持身則見<sub>レ</sub>本地身とは第二重の一印二明の位である。次に見<sub>レ</sub>本地身則行者平等智身と云ふは第三重絶對不二の一印一明の位である。所詮一念たりとも生佛而二の執見を生せず、衆生は本來本覺の床に住し、本有の佛體なるが故に、鎮へに中胎に居し八葉の諸尊と六道の衆生と平等一如なる秘義を明かすものである。即ち醍醐の極意は大師の即身成佛義の都絶能所の釋文に依り宗の大事を意得、隨縁々起の差別を遮して、六大一實、不生法身に歸するを以て宗極となす。かの流の一印一明の大事は専ら此の奥旨を示すものである。

次に小野流(勸流)に一印二明を以て宗の極意となすは、大師の即身成佛義に都絶能所の上に更に能所を見る御釋に依るものである。即ち能生體大所生相大に淺深本末を見ず、體相二大共に本來法爾の

性徳にして、本有修生、上下二轉二つながら一心實相の性徳なる秘義を示すものである。所謂因果、理智、色心、能所を絶する大不二一實法爾の果界に、更に體相、理智、平等差別、上下二轉、法爾隨縁の義あり、而もこの平等、差別等の法は、本來法爾の實相なる理趣を明かすものである。この宗の奥旨を習ひ傳ふるを一印二明の極意となす。一印は平等法性を表し、二明は理智差別、上下二轉等の法門を表す。而もこの平等差別等の法門は本來法爾俱時の故に、一印を結んで二明を誦す、即ち三世に上々去々し、十方に下々來々するも、不生一心の體は法然として本不生に居し、二轉の相、宛然として法性の性徳なる實義を明すものである。

なほ醍醐の一印一明と小野の一印二明の大事について一言せんに、凡そ宗の實義に横豎の二義あり、一印一明は豎に秘密の法體を究むる大事である。所謂攝相歸性、隨縁四曼の差相を遮し、法爾能生の六大體大に歸するの義である。また一印二明は横平等の義にして、一印を以ては平等法性を顯はし、二明を以ては理智差別、上下二轉等の無量の法門を表す。平等差別、本有修生上下二轉共に果界内證の法である。この性相本有、俱時不離、性の處の性相は宛然本有の宗の深義を示すものは、一印二明の大事である。

此の如く横豎の二門、而二不二の法門は、共に宗の實義にして、小野、廣澤諸流の大事、何れも具足して此義を明かさぬものはないが、今は小野、醍醐所傳の灌頂の印明につき、表てたる邊の一隅を

語りしまでいある。

祕藏記に密教は曼荼羅を體とし、三三昧を宗とし、三密を用とすることを明かす。曼荼羅を體とするはこれ高祖大師の所説の六大體大の位にして、本有の曼荼羅、理智二法身の體である。三三昧を宗とすとは、本有曼荼羅、生佛三密の自體互具輪圓、重々無盡、圓融自在の體にして、これ高祖の即身義に釋するところの、四種曼荼各不離の相大の法門である。三密用大に上轉下轉の二の釋あり三密加持の修行に依つて佛果を究竟するは、これ上轉の三密の義である。また成佛の後、自受用の土に於て自受法樂のために、各々の三密門を説き、また無盡の三密を示現して、法界の群機を曼荼羅に引入す、これ下轉の三密である。即ち佛果は灰身滅智の寂滅の境にあらず、三密業用無盡の體である。凡そ佛果の上の化他の業用につき顯密の二意あり、顯教は佛果の上の化他の業用は、これ隨縁の方便なりとし、密教は利物化他の業用は、法性法爾の功德、金剛不壞の行相なりとす。

蓋し佛教に説く究竟の理想境たる涅槃をば、眞言密教より見れば、これを三種に分つて釋することを得るが。第一は小乘に明す灰身滅智の寂滅の涅槃である。第二は顯教大乘の涅槃なるが、顯教大乘の涅槃觀、説一ならざるも、眞如法性これ涅槃の體である。十住心の中第八住心に於て一道眞如の理に沈空滯寂するとき祕密の佛の警覺開示によつて、沈空より立て祕密莊嚴心へ進むことを明かすがこれまことによく顯教の涅槃と密教の涅槃との相違を示すものである。第八住心に沈空滯寂すとは、こ

れを大日經疏の意に依つて解せば、その證悟の道體たる無相一心は、十界因果の差別を遮して、能造の一心に歸するを説く、支那天台の山外の自性清淨の一心に親しき觀がある。たとひ山家の説の如く、十界の諸法宛然並び立ち、而も自性無性體一互融を明し、因果の相を能生の一心に歸せず、大乘の因果皆これ實相なれば、因心互融の理を觀て妙覺の果を成する意に解し、萬有の奥底に一味の本體あるにあらず、差別の背後に平等の理あるにあらず、萬有の差相に即して一味平等の理趣を觀んとするものなりとするも、なほ密教の説と相違の存するものである。顯教の涅槃の體は法にして人にあらず密教にても人法の不二を説くも、顯教に對してその特質を明示せば寧ろ人を本とし、自覺的靈格を體とすといひ得らる。また顯教は寂にして照、虛通妙融の實相を諦觀する理智を本とするものなるが、密教も寂にして照、法界を了々に照見する靈智の顯得を明かすも、而も各々の靈性は各々の本誓三昧に住し、各々法界曼荼羅を成じ、三密門を現じて、無盡の妙用を現することを明かすものである。即ち顯教は理性を本とするものなりといひ得べくんば、密教は自覺的靈性を體とするもの、意志を立場とするものなりといひ得らる。かの第八住心より第十祕密莊嚴心に入り、或は勝義の菩提心より三摩地の菩提心に入るを明かすは、これ理智の立場より意志の立場に飛躍するを明かすものである。もとより三種の菩提心は不離である、佛金蓮の三部は同體である。大定智慧は不二であるも、三摩地の菩提心を本として勝義行願を明かし、佛部は蓮華部金剛部の體なることは、經疏の説相明了である。

先徳の所説に顯教は非人格の法を究竟の道體とするが故に、その眞如の法に契合せんには、無想の理觀に依るも、密教は靈的實在者たる大日如來を究竟の本尊とするが故に、白淨の信に依つて、よく本尊に契合するを得れば、顯教にては菩提心體は智なるも、密教は信なる旨を記せるが、よく二教の相違を示せるものと云ふべきである。

また顯教の法身は無相の理にして、化他の妙用なきも、密教の法身は靈的實在者なるが故に、靈動無碍自在である。されば顯教は靜的にして、密教は動的なりともいひ得らる。なほ密教の法身の靈用無碍自在の義を知らんとするものは、大日經疏第二十卷の顯密二教の法身の靈用神變有無の釋、或は大日經疏第一に大日如來師子座の自在度人無空過の釋、或は大日如來の徳を四方四如來に別説し、北方涅槃の體を明かすとき、胎藏曼荼羅にては北方天鼓雷音佛と云ふ、これ雷の形もなく住所もなきも、空に滿つる音を發するが如く、如來は無相なれども無盡の靈用あるを明かすものである。金剛界曼荼羅にても、北方涅槃を特に羯磨（作業）部と稱し、その中尊を不空成就佛と云ふ、即ち無邊の妙業を成就するの義である。或は大毘盧遮那成佛神變加持經の大日經の經題に徴し、或は金剛頂略出經の普賢法身遍一切、能爲世間自在主、無始無終無生滅、性相常住等、虛空

等の經文、或は曼荼羅の諸尊を奮迅示現する、威神力の甚大を觀ば、如何に密教の究竟證悟の毘盧遮那法身、即ち涅槃妙境の普通佛教の釋と異なるものあるかの一端を知らるゝであらう。なほ顯教は化

他大悲の妙業は、これ佛果の上の隨縁の方便と見るも、密教にては化他の妙行は、これ涅槃法爾の常行なることを示さんがために事相口決（虛空藏菩薩法）の一節を抄出すべし。

是即依發心證果也。果德圓滿歸涅槃入涅槃後立還住不二平等位（南方修行位）也。一代釋迦化儀入涅槃後。寶部住成舍利則此謂也云云問發心、修行、菩提、涅槃四轉次第思發心後、依修行證菩提、入涅槃後、得究竟法身。今何入涅槃後、歸南方修行方耶。豈果德圓極後、更可修行因行乎

答二乘自調自度行故。眞實涅槃到更不現後得大悲身菩薩最初趣利他修行故自行圓滿成正覺不敢住涅槃後得大悲智發修利他萬行也。是則眞實佛果上功德也。（中略）到佛果一度衆生思外無餘念也。經云佛心者大悲也文又眞言意從果向因行故發心修行等次第皆是從內外軌則也。是則自證圓滿發俱時大悲爲利他修方行也。乃至得道利生也。是皆佛果上利他行相也。大師大日經三句中方便爲究竟文向上向下讀文有異云云留意可思之云云

（薄草子傳受問書）

釋迦如來滅後、舍利を留め給ふを、小乘にてはたゞ遺身の舍利として尊信するを、密教にては釋迦如來入涅槃の後、南方寶部の三昧に住し給ふと觀るは、事相上の口決なれば、こゝに其の委説を略するも、北方入涅槃の後立ち還つて南方修行の位に出て、化他の萬行を爲すと云ふ説は、これ密教の涅槃の實際を、もつともよく説示せるものである。

なほ密教にては六大無碍、四曼不離、三密加持の三大圓融を説き、衆生の色心は法界を融攝する曼

荼羅體なる玄旨を明かし、差別に即して平等を談じ、特殊に即して普遍を示す、顯教の一乘教また何れも、圓融無碍の玄旨を述ぶ。而も顯教は因縁生無自性の一法界の理を原理として圓融を談じ、密教は衆生と佛陀との自性各別にして而も法爾の瑜伽無碍を明かす、即ち多法界の上に法爾の互具輪圓の道理に約して圓融を説くものである。されば顯教は一元論にして、密教は一多不二を宗要とするも、寧ろ顯教に對して密教の特質を示せば多元論なりともいひ得らる。即ち而二は體にして不二は義用なりと見る。

祕藏記に顯教と密教との所説の不同を、水波と日月星辰に比して示してある。即ち顯教にて因縁の無生を觀じて、一味の眞如に契合するは、宛も百川の流れ海洋に入て同一鹹味となるが如く、生佛等しく一如眞如の法に歸するを説くものである。しかるに密教の所説は、自他の三密の體性、本有の靈性は泡沫の海水に融して、其の相の見るべきものなきが如く、無相眞如の一味の法に還没し去るにあらず、恰も日月星辰の各々其の當體を動せず、而も各々其光明互に相礙へざるが如く一室に千燈あるも各々其自體を動せず、其の光明冥然一體をなすが如く、心佛衆生の三密の本體、本有の靈性は各々體性を動せず冥然として靈的融合をなし各々の法界曼荼羅を成ず、我等は三密加持の修行に依つて本有三密加持の體を體顯し、各々の法界曼荼羅を現成するを明かす。

而して密教の經軌は、行者の三業を本尊に同せしめ、自心本有の曼荼羅を體顯する次第を示すもの

なるが、其三密加持の修行の要諦は一座の行法の次第に現はる。一座行法について、小野、廣澤諸師に種多の解釋がある。小野の仁海、禪林寺の靜遍、醍醐の憲深、其他自性上人、杲寶師等、一座行法を五點に配し、或は三句、自證化他等其釋非一である。而も一座行法の深旨は道場觀、入我々入觀、正念誦、字輪觀等に顯はる、道場觀以下三身一體の本尊に供養をなし、入我々入觀、正念誦、字輪觀にて本尊と行者との三密の平等平等を觀するのである。一一の觀、何れも三密平等觀ならざるはなきも、入我々入觀は身密の加持を表とし、正念誦は口密の加持を表とし、字輪觀は意密の加持を表とす。但し眞言行者、所求の悉地を成就するには、三密共に宗要たるべきも、就中語密念誦最も至要なれば、正念誦は入我々入觀、字輪觀よりも甚深なりと觀ることあるも、念誦の法則觀念等こゝに述べ難ければ、入我々入觀、字輪觀について釋せんに入我々入觀を字輪觀に比せば、一應有相無相、相對絶對の差あるが如くなるも、再應は旨一である。即ち入我々入觀は本尊と行者との相對觀にして、字輪觀は字門の不可得を觀じ、不可得觀の至極に至つて心月輪を觀じ、月輪を法界に遍せしめ、法界一箇の月輪となり、つひに自身と月輪と、吾と佛との兩つながらを忘れて専ら無分別に住す。これ無相絶對の觀である。このうちには遮情表徳あるも寧ろ遮情が表てたるの觀あり、この能所兩つながらを忘れたる遮情の極致は、衆生と佛との三密の本體虛通無碍、三三平等の體にして、上の入我々入觀と祕旨を同じうするものである。即ち無分別といひ、不可得といひ、如虛空と云ふも、これ無礙自在の佛境界

を明かすものである。祕藏記に

如<sub>二</sub>虚空<sub>一</sub>者稱<sub>二</sub>周遍法界理<sub>一</sub>耳。非<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>其體<sub>一</sub>。諸佛身者如<sub>二</sub>千燈同時照而不<sub>二</sub>障障<sub>一</sub>。唯佛與<sub>レ</sub>佛乃能見知。凡夫肉眼不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>見。此喻之極莫<sub>レ</sub>過<sub>二</sub>虚空<sub>一</sub>故曰<sub>二</sub>如虚空<sub>一</sub>。

入我々入觀に依つて生佛不二の祕觀に入り、而も益々信念を策勵して本尊を信奉し、其眞言を念誦し（正念誦）字輪觀に入つて本尊の自在力、大威神力我にあるを信じ、本尊に代つて如來の妙業を成せんと信念より大慈悲に住して、世間に出で、世務に従ふ、これまことに眞言密教の要諦である。

（大正十一年九月十三日稿）

## 五 六大體大に就て

### 一 六大體大に就て

本邦の密教即ち弘法大師の開示せられたる眞言密教は、地水火風空識の六大を以て法界の體性即ち宇宙の本體となす。此の如く六大法界體性の説は、佛教諸宗に未だ談せざるものなれば、これ教理上より觀たる密教の特質とも觀らるべきものである。今この六大説を述ぶるに當り初めに緣起門及び實相門より六大體大説の立場を明かし、次に六大説の依憑について考察し、次に六大説の正意及び六大説に依つて顯はるゝ密教の特質を明かさうと思ふ。

弘法大師が六大體大説を開演せられしは、これ一に即身成佛義を宣示せんがためである。即ち在來の佛教々義にては即身成佛義を成立し得られざるより、印度、支那、日本の三國の傳法者の未だ曾て談せざる六大説を開演せられしものである。即身成佛義が大師の創説とも觀らるゝが如く、六大説も大師の創唱ともいひ得べきものである。常途の大乗教にては即心成佛義を明かすも未だ即身成佛を説かず、即心成佛義を明かして即身成佛義を説かざるは我等の心法は微妙にして、其本源を窮むれば無

爲常住の法性なり、即ち眞如一心なり、この一心の心源を體得せばこれ無上正等菩提を成就せる大覺者なり、即ち即心成佛せるものである。かく即心成佛義を明かすも即身成佛を説かざるは上述の如く一心を萬有の本性とし、隨つて心は眞實在性を有するものなれども色法即ち身體は眞實在を有せざる生滅無常、如幻虛妄のものとなすゆゑである。かくの如く心法は微妙にして其本源を窮むれば、眞如法性と同體なるも、色法は生滅虛妄の法なりと觀る説を本としては、即身成佛義が成立しない、即ち我等の身も心も眞實在性を有するものなり、眞實在の正當なる發現なり、衆生の身體は如來の三摩耶身なる理趣成せずば、即身成佛義が成立せない。されば大師は即身成佛義を立せんがために、六大法性の義を明かし色心共に周遍常住の義趣を説き給ふ。密教の即身成佛、即事而眞の宗義は六大體大の説に依つて成立せしものである。密教の根本所依の經典たる儀軌本經には本尊の三密を晝夜四時に精進して修すれば、現身に本尊の三摩地を體得する、即身成佛の實修實證の方面を説かれあるも、何故に凡身に即して靈活自在の如來の靈境を體得せらるゝやの、理趣を明かすこと尠なし而も往々其理趣を示されたる文義あるが、大師はかゝる經軌の文義を依憑として、六大説を開演し、即身成佛の理趣を成立せられしものである。

前敍の如く身心の當相は迷妄なり、幻化なり、緣生無性なりとの、一般佛教所説の教義の上には即身成佛義成立せざるが故に、大師は六大説を開演せられしものである。尤も實大乘に説く眞如緣起

説や、三諦圓融説や、無盡法界緣起説は、何れも有限の事事に無限の理趣を有することを示すものなれば、此等諸説に依つても即身成佛義立せらるゝやう思惟し得られざるにあらざれども大師はこれら諸説は皆これ無明因分の説にして、究竟は身心の當體を一如の空理に還源せんとするもの、即ち身心の當位に即して佛果を體得する實義を明かさるものとして、眞如緣起説、三諦圓融説、法界緣起説にも依らず、不二佛果の緣起の眞相を明かす六大體大説を開演せられしものである。以下先づ緣起門の方面より大師の六大體大説の立場を述べようと思ふ。

佛教は世間多くの宗教の説の如く、超絶的の神が宇宙を創造せるものなりとの説を排し、萬有は因緣所生なりとの義を明かすものである。かく萬有の開發を因緣所生なりと説くは、佛教一貫の説なれども、その因緣生の義を説くに小乘大乘、顯教密教自ら説の相違がある。かの業感緣起、阿頼耶緣起眞如緣起、法界緣起、六大緣起説等これなるが、今此等諸教の説を委釋することを略し、たゞ小乗の業感緣起説より六大緣起説に至る理路を概述し、六大説の立場を明かすであらう。

業感緣起説とは人も知る如く小乗教の説である。暫らく小乗薩婆多部の説に依れば、有爲法（此世界）は七十三の法體より成立せるものとす、七十三といへども要約すれば色受想行識の五蘊なり、更に約説すれば物心の二法なり。かくの如く此世界は七十三の物心の法體より成立することを明かすも、この七十三の物心の法體はたゞ機械的に集合し離散して萬有を生成し、或は壞滅せしむるにあらず、



この七十三の法體をして諸法を生成し壞滅せしむるは、これ所謂煩惱と業の力に因るものである、これを常に煩惱、業、苦の三道の緣起とも云ふ。即ち煩惱と業に依つて五蘊が生成しまた壞滅すとすしかれば小乘にては此五蘊の法體と煩惱と業とを宇宙人生の本源となすものである。即ち煩惱と業に依つて一類の五蘊が相續しこの五蘊(身心)此世界に死滅すとも、煩惱業の力に依つて更に次生に新たなる身心を感得し水の涓々として流るゝが如く生死輪廻止むことなきものとす。かゝる煩惱業苦の三道の緣起を明かす所以のものは固より煩惱業を斷滅して、涅槃解脱界を體得する、悟の因果門を知らしむるにある即ち悟の因果を明かさんとして先づ迷の因果を明かすものである。しかして小乘に説くこの煩惱業苦の三道の緣起説は大乗に説く阿頼耶緣起、眞如緣起乃至六大緣起説にも貫通するものである。即ち此等諸緣起説も迷の緣起門にては、小乘の三道の説を否定し、更に深遠なる説を立するにあらずして、小乘の業感緣起説のみにては説なほ究竟せざるより、其説を補足し其説に深き根底を與へ阿頼耶識、眞如、乃至六大なる法體の上に三道説を立するものである。

なほこゝに一言すべきは、小乘薩婆多部では有爲法を形成する七十三の法體のみならず、無爲の三法即ち七十五法の三世實有法體恒有を説く。七十三の法體より成る有爲の諸法は生滅無常、幻化虛妄なるも、その七十三の法體は常恒なりと説くものである。而して密教の六大説にては六大即ち物心の體性は不生不滅、常住本有なりと説く。固より小乘の色心恒有の説は有爲法につき、密教の色心本有

説は無爲の法體なり、また小乘は六識分別の説にして密教は主客能所の思惟分別を絶する不二佛智見の境なれば、有爲無爲、生佛天淵の差あるも、而も小乘の五蘊の法體恒有説と、密教の六大本有説とは一應相似たる點の存するより、古來の説に眞言の實義は毘曇の性相に同すと傳ふ。蓋し小乘阿毘曇の説は佛教教義の初門にして、密教の教義は其終極に達せしものなれば、其所説に根本的相違あるは勿論なるも、出立點と終極點とは一致に歸することありと云ふが如く、小乘の説と密教の義と相似たる點あるは奇と稱すべきである。但し般若の空觀を經ると經ざるの相違あり、分別意識の上の説と不二佛智見の體験の境界にて談するの相違あるも、物心多元にして恒有を説く點一應相似たるより、眞言の實義は毘曇の性相に同ずといふか。

何れにしても此有爲の身心は煩惱業に依つて得たる苦果の依身にして、これ無常なり苦なり空なり無我なりとし、この身心の當位を厭離し、無餘涅槃に歸するを宗とする小乘の業感緣起説の上には、身心に即して佛徳を體験せんとする即身成佛義が立せない。なほこの小乘の業感緣起説の如何なる點に未盡理の存するやと云ふに、かの宗密禪師の原人論にも指摘せるが如く、小乘にては五蘊と煩惱と業とを宇宙萬有の大本とするも、小乘の説に依れば、無色界には色なきといひ心法を明かすも第六識以上を説かずしかるに第六識には五位の無心ありて其識斷絶することあり。かゝる間斷ある色心が如何にして煩惱業を保留し宇宙萬象を開發し得るであらうか。小乘の業感緣起説にはかゝる未盡理の點

あれば、この説を補ひこの説を否定せず、一層深遠なる根底を與へ、其説を完全ならしめんとするものは阿頼耶縁起説である。

唯識の阿頼耶縁起説の委釋を略し、たゞこの説の如何なる點が小乗の業感縁起説を補足し、またこの阿頼耶縁起説の上には即身成佛義の立せざることを述ぶるに止むる。

大小の諸乘何れも物心の中、心を重んずる、これ佛教は轉迷開悟を宗としその迷を轉じて大覺位を得るは、もとこれ心の問題なるに因る。随つて小乗佛教に物心の法體恒有を説くもやはり心を重んずる天台の知禮は唯心にして小乗は由心なりといつた、これ小乗は色心の體性恒有を説くも、而もその色心の法體を生滅せしむるものは煩惱と業にして、その煩惱といひ業といひ、共に心に由るゆゑである。しかるに上述の如く小乗は第六識以上を説かざるも、法相宗にはこの第六識の上に更に第七識第八識の存在を明かす。而して第七末那識第八阿頼耶識は、如何なる時にも相續して生起し斷絶することがない。即ち第七識は第八識を所依とし、我法二執を起す識にして、第八識はこれ萬法を生ずる根本識である。かゝる根本識ゆゑ我等の經驗し得らるゝものにあらざるも、唯識論第二三卷に此識の實在すべきを證せんとして五教十理をあぐ。例へば我等睡眠中に夢みるが如きは、これ第六意識の作用なるも、熟睡して夢も見ざるに至れば、これ第六意識の作用も滅せしものである、而も我等は

死滅するに至らず其生命の持續するは、これ阿頼耶識の存在するに因る、また此生こゝに終るも來生に受生あるは、此識の存するゆゑである。即ち小乗の説に依れば、無表業身心に留存し、その業力に依り一類の身心相續すといふも其心法は第六識以上を明かさず、而して其六識は時に斷絶することあれば業力所依の處を失ふこととなるも、唯識宗にては、常恒相續の第八識を明かし此識善惡業の種子を任持し、而も第八阿頼耶識はその業種子に引かれ六趣に輪廻すとなす。即ち生死輪廻の主體となるものは阿頼耶識にして、一期の壽命の相續するも此識の力なれば、死するも此識滅せず、この識善惡の業種子に引かれ更に次生を變現す、もし此識存せずは一期の壽命相續し、また現世に善惡の業を作すも、未來其應報の果なきこととなる。此識が有漏にては五根器世種子を變じ、有情の身を依持する根本となれるのみならず、佛果無漏の境界に於ても、第八識は大圓鏡智と轉變し、大圓鏡の上に衆像を現するが如く、如來自受用の無漏の身土を現じ、如來眞實の功德を依持し、永劫に相續し滅盡あることなき識である。

さきに小乗の惑業苦の三道説は其説究竟せざるも、唯識宗には第八識を本して三道の縁起を説くといひしが、この第八識を本とする三道縁起の委細を知らんとするものは、唯識宗の十二因縁説等について觀るべきである。惑業苦の三道の縁起よりいへば、惑と業とは生死の苦果を生ずる因なるも、而も苦果を生ずるは惑業の中にては寧ろ業である。小乗有部宗の説に依れば、業に表業無表業を立て、

我等の身口に善または惡の作業を現行するを表業といふ、この表業の現行すると同時に身心のうちに一種の無形の力を繋發するを無表業といふ。この無表業は永く身心の中に留存し、將來その果を生起するものなるが、而も小乗にては上述の如く身心に間斷ありとなすゆゑ、無表業が依憑の體を失ふることとなるも、唯識家にては無表業なるものは、第八識に薰習せられたる善惡の思の心所の種子の上にある、防發の功能の分位に假立したるものとなす。その防發の功能とは善の無表業なれば惡業を防いで善業を發せしむる功能あり、惡の無表業なれば善業を防いで惡業を發せしむる功能あり、即ち唯識家にては無表とは思の心所の種子の上にある防發の功能となすものである。而してその種子なるものは第八識に本來有する本董種子と新たに薰附したる新董種子とあり、第八識と共に相續し因縁に隨つて種子生現行、現行薰種子、三法展轉止むことなしとす。即ち迷界の縁起は小乗にては五蘊と惑業を本として説きしも、唯識家にては、第八識を本として三道の縁起を説くものである。而して此世界はかゝる三道の縁起に依つてなれるもの即ち非有似有の依他起性にして如幻虛假の非眞實のものとなす、かく色心の當相は有爲依他起の假法と見、つひに無爲の圓成實性の識の實體に歸入せざるべからずと説く阿頼耶縁起説の上に即身成佛義立せざるや明かである。唯識家に地水火風の四大種等色法に關する説あるも凡てこれ有爲の依他起性に屬するものにして、密教の無爲の六大説と異なりあるや知るべきである。

上述の阿頼耶縁起説の更に其理趣の甚深となりしものは眞如縁起説である。唯識家の阿頼耶識は衆生各々の阿頼耶識は別である。即ち衆生各々自の阿頼耶識より、各自の一切世界を開發すとすものにして、多元的唯心説とも稱すべきものである。衆生各々の阿頼耶識別なるが故に、各々の阿頼耶識に具有する種子もまた同じからず、例へば佛果無漏の種子を具するものは成佛するも、佛果無漏の種子を具せざるものは成佛し得ず、これ所謂五姓各別論の存する所以である。成佛を本旨とする佛教に成佛する衆生と、成佛せざる衆生ありとの五姓各別論の存するは、一に衆生各々の阿頼耶識別なりと見る多元的唯心説に基くものである。しかるに眞如縁起説は絶対唯心論にして、一切衆生等しく眞如法性を具し等しく成佛する旨を明かすものである。阿頼耶縁起説より眞如縁起説に至るには、かの三論の無生皆空論がある。即ち唯識家には心有境空の旨を明かすものなるが三論家は衆因縁生法畢竟無生空の理を説き、心境共に畢竟空の理を示し、唯識家に云ふ八識の自體も畢竟空の玄趣を開演するものである。三論は此の如く一切分別思惟を絶するところに、中道實相の妙理を體得するを説くものなるが、大乘起信論等にては、この畢竟空の體これ虛無にあらず、眞如法性なり、絶対の一心なり、この眞如一心より萬有の開發する旨を説くものである。大乘佛教の萬有神教的教意は、此眞如縁起説に依てよく其本旨が顯れたりといふべきである。

さきに小乗は惑業苦の三道の縁起を説き、唯識家の阿頼耶縁起説は、小乗の説を否定せず、阿頼耶なる根本識の上に三道の縁起説を明かすことを述べしが今この眞如縁起説もまたしかなり、眞如一心の開發して萬有を成ずることを説くも、小乗の惑業縁起説及び阿頼耶縁起説を否定するにあらず、即ち唯識の阿頼耶識は有爲の生滅識である、眞如縁起はこの生滅の阿頼耶識に、不生不滅の眞心の一面の存することを説くまでである。されば眞如縁起を明かす起信論には

不生滅と生滅と和合して非一非異なるを名けて阿黎耶識と爲す

といへり。以て阿頼耶に不生不滅の眞如なる根底を與へたるものは、眞如縁起説なることを知らるゝであらう。また眞如と無明と和合して三細六麁の生滅の妄法の生起を説く次第を觀れば眞如縁起とは惑業苦の三道の縁起を明かすものなることを知らるゝのである。即ち業、轉、現、智相、相續、執取、計名は惑にして、起業は業、業繫苦相は苦果である。眞如縁起と云ふも、生滅妄法の生起を明かすには惑業苦の三道の説に依るものである。

次に淨法の縁起即ち生死を解脱する還滅門の説によれば、覺に始覺と本覺とあり、淨法薰習に由て、無始以來の不覺の妄法を漸次に斷破するを始覺となす、而して始覺が三細六麁の妄法を斷じ、つひに始覺が本覺に還同し、始本二覺不二の境地に至れば、これ大覺圓滿の佛果である、この淨法縁起の還滅の相を明かすとき三細六麁を生住異滅の四相として、其斷道を示す。即ち生相は業相にして、住相

は轉、現、智相、相續相、異相は執取、計名相、滅相は起業相である。これを始覺門の菩薩の斷位に約していへば、滅相を斷ずるは十信の菩薩にして、異相を斷ずるは十住十行十回向の三賢位の菩薩なり、住相を斷ずるは十地の菩薩、生相を斷ずるは十地の菩薩の滿位たる金剛心の位にして、この生相を斷ずればこれ究竟圓滿の大覺位を成じたるものである。所謂和合の識相を破し相續の心相を滅し、法身を顯現せしものである。

以上は起信論の生滅門に於ける染淨二門の縁起説の大要なるが、眞如縁起説よりいへば、眞如と生滅の不離相即を明かし、生滅萬法の全體これ眞如なりといふも、究竟は生滅の萬法を妄法とし一心眞如に歸入せんことを明かすものである。かの三細の最初の業相は、これ一味平等の眞如が無明の妄薰を受けて、主客能所の妄分別を起動せんとする微細なる作用にして、轉相はその主觀の用の生せし位、現相はその客觀の相の現せし位である。但し轉現の二相は主客能所縁の生せし位なりと云ふも、これなほ心中の微細なる能所主客である。かゝる分別心の更に麁に轉せしは六麁の境界なるが、還滅門にてはこの苦果を生ずる因たる業を滅し、人執法執の麁細の惑を斷じ、能所主客一味の眞如法性に歸する道を説くものである。然るに密教は最初より佛地の三味道に住する道を示すもの、即ち最初より主客一如能所未分の眞如法性を立場とするものにして六大縁起は此果上の境界を明かすものである。また身心の當相を生滅の妄法なりとし、一心眞如に歸せんとする眞如縁起説に依つては即身成佛義成立

せざるや明かである。

次に華嚴宗に法界緣起を説くも、弘法大師の見地よりいへば、この法界緣起なるものは、これまた一種の眞如緣起である。たゞ上述の眞如緣起説と華嚴の法界緣起説との一應の異なりは、眞如緣起説は一相孤門の義にして、法界緣起は眞如の染淨の緣起を示すに、一多相即無碍自在、帝網重々主伴無盡の理を顯はすものである。即ち染緣起に約していへば三細六塵の一々に即して無盡法界の緣起を示し、淨法緣起また同にして、一斷一切斷、一成一切成初發心時便成正覺の深旨を明かすものである。凡そ顯教諸宗の緣起説多種あるも、下轉緣起は生死の流轉門、上轉緣起は行者始覺轉昇門にして、共に衆生の分別の念を本とするのである。また正體智より後得智を生じ、後得智より報應二身等無量の化他大悲の身を生ずるも、これまた衆生の六八識等の妄心に薰せられて生起するものなれば、なほこれ無明因分の緣起に攝すべきである。しかるに密教は因分を超絶せる性徳圓滿の果海の緣起を明かさんとして六大緣起の義を説くものである。しかしこの意を會せずして或は眞言の六大緣起は、華嚴の法界緣起と同義なりと稱し或は天台の三諦圓融の假諦の方面を明かすものなり等と觀んとするものあり。而もかくの如きはこれ弘法大師の眞意を得たるものでない。大師の釋に依れば密教の六大緣起は華嚴に因果二分を明す中の其の性海果分の上の説である。即ち賢首大師は事々無碍法界緣起説は、こ

れ普賢因分の境界にして、その十佛自境界の果界は圓融自在、一即一切、一切即一、其狀相を説くべからずと自ら斷られたるが如く、事々無碍法界緣起はこれ緣起因分の説にして眞如緣起説と同じく有空不二、眞妄和合の原理の上に立つものである随つてこれ因分の説である。されば大師は二教論に華嚴の事々無碍説も天台の三諦圓融説もなほこれ緣起因分の説なりと斷せらる。而して密教の六大緣起説は眞妄和合の緣起因分の境の談にあらず、かの十佛自境界の果界を立場とするものである。蓋し眞妄和合の一相孤門の緣起を明かすものはこれ華嚴の所謂終教の説なるが、圓教の事々無碍法界緣起も、これ終教に云ふ有空、事理無碍の理を擴充して説くまでにして、同じく緣起因分の説を出でない、而してかゝる緣起門の説はこれ緣起現前の末位につき、普賢因分の機に對して立てたる法門にして、無盡緣起の玄旨を觀じ、因より果に向ふ教である。即ち緣起現前の事を無生不可得と觀じ、能所分別の細念を絶して果界に趣入する道を示すものである。蓋し緣起因分の境にては、如何に無盡の玄趣を談じ緣起の現相に即して無盡の理趣を體得する旨を明かすも因より果に趣入する道である。そこには自ら一を捨て一を取らんとする取捨の細念がある。要するに我等身心の當相これ緣起の假相と見る説の上には即身成佛義が立せない。即ち衆生は本來果界に住せるものにして、因より果に向ふにあらず、本來果體なりと觀達し、一心本有の果徳を實現する果上の法門が成せずば、即身成佛の理趣成せず。これ弘法大師が如來自内證の境界たる果上の境地を開き、果上の法門を建立し、衆生は本來果界に住

する佛子なり菩薩子なり、生死輪廻の迷子にあらず、本來毘盧遮那果體の一法門を實現すべき金剛薩埵なりとの果界爲本本覺爲宗の教義を明かされたる所以である。随つて大師の説示せられたる六大縁起説はこれ都絶能所の上の能所、能所主客の分別思惟を絶する不二佛智見の上の説である。

如上の教旨は密教の諸教論に等しく明かすところにして釋摩訶衍論には不二摩訶衍の果體を釋し、大日經には密教の因行果の三句は初地以上の法門なることを示し、金剛頂經には無識身三摩地より起て五相成身觀を修すべきを説き、祕藏記には性の處の性相は宛然として本有なりといふ、即身義には都絶能所の上の能所、即ち果上の六大縁起の義を明かされ二教論には密教は因分を超絶せる果上の法門なること、及び華嚴天台法相三論の四家大乘所明の究竟の理趣と密教とを對辨して、顯教の諸大乘は因縁縁起の俗諦より、能所主客を絶する無自性の一味眞諦の理に歸するを極致とするものなるも、密教はこの無相一味の眞諦のうちに、更に十界曼荼羅を開説するものなることを明かし或は金剛頂經大日經兩部大經の正意を示し、兩部大經に從因至果、從果回因の二門あるも、經の正意は從果回因にある等の教旨は、何れも密教はこれ因人の主客能所の思惟分別、即ち根本無明を斷せる不二佛智見の境界たる如來自内證の境地を直顯するものなることを説くものである。随つて密教に説く兩部曼荼羅六大四曼三密即身成佛等の説は、凡てこれ果上の境界の説なることを知るべきである。以上は六大體大説はこれ因分を絶する果上の説なる、大師の六大體大説の立場を述べしものである。

上來は縁起門の方面より佛教に因縁生の義を明かしその因縁生の義に多趣あるも、縁起現象の開発を説くに業感縁起、阿頼耶縁起、眞如縁起、法界縁起の諸説あり、而も此等は眞妄相對の原理の上に立てるものにして、密教の六大説は此等眞妄有空等の相對俱成を絶せる、毘盧遮那果體の縁起を明かすものなることを述べ以て大師の六大説の立場を示せしが以下實相門の方面より更に六大説の立場を明かさうと思ふ。縁起門は豎(時間的)に萬有の開発を示すものにして、實相門は横に萬有の眞性即ち自心の本性を直觀體達する道を説くものである。この實相門の説も一樣ならざるも、且らく大師が大日經の如實知自心の教旨に依り、十住心の法門を建立せられたる教意に順じて釋せば、大日經疏に我の自性を觀せざるゆゑに種々の妄見を生じ、つひに如實に自心を知るを得ざるに至ることを示し、更に衆生の色心は衆因縁生なるが故に、自性あることなし、この自性の空を觀じ能所の分別を絶するところに煩惱業生の三道縁起の生死の生を離れ、如來常住の法性の生を得し、大我の眞相を體得するところを開演せり。

次釋<sub>ニ</sub>虚妄分別所由<sub>一</sub>故。云<sub>レ</sub>秘密主若彼不<sub>レ</sub>觀<sub>ニ</sub>我之自性<sub>一</sub>則我所生<sub>レ</sub>也。若彼觀<sub>レ</sub>察諸蘊皆悉從<sub>ニ</sub>衆緣<sub>一</sub>生<sub>レ</sub>。是中何者是我。我住<sub>ニ</sub>何所<sub>一</sub>爲<sub>レ</sub>即<sub>レ</sub>蘊異<sub>レ</sub>蘊相在<sub>ニ</sub>耶。若能如<sub>レ</sub>是諦求當<sub>レ</sub>得<sub>ニ</sub>正眼<sub>一</sub>。

又曰く

今行者觀心實相亦復如是。出過一切戲論如淨虛空。於內證所行得深信力。薩婆若心堅固不動。離業受生成就眞性生。萬行功德從此增長故曰菩提心爲因也。

此の如く我の眞性に體達せんには、衆縁無生の觀に住せし、阿字の大空三昧に住せざるべからず、しからずして我等の分別思惟を以て、我の自性を知らんとせば、我の眞性を得ざるのみならず、却て種々の妄見を生ずると、その分別妄見を三十種示されたるが、その三十種の外道のうちに地水火風空が萬有の因なりとの説あり。

經云地等變化者謂。地水火風虛空。各有各執爲眞實者。或言地爲萬物之因。以一切衆生萬物依地得生故。五大を以て萬有の自性とし、萬有は五大より生起すと説くが如きは、これ密教の六大縁起説に彷彿たるものである。而もこの外道の五大説はこれ十住心に約せば第一住心の説にして、祕密の六大説は第十住心の説なれば、そこに天淵の差あるを知るべきである。即ち外道の説は分別思惟より獨斷的に立てたる説である。されば疏に五大が萬有の因なりとの獨斷的客觀的實在説を破して曰く

以不觀地之自性但從衆縁和合有故而生是見以爲供養地者當得解脫。

その他外道の自在天梵天等は、忽ち見れば密教の大日如來六大法身に同じるが如きも、自在天梵天等の説は凡て以上所説の立場にあるものなりと觀て、三十種外道のうちに屬せり。疏に曰く

謂一類外道計自在天是常。是自在者能生萬物如十二門中難云。若衆生是自在子者。唯應以樂遮苦。不應與

苦。亦應但供養自在則滅苦得樂。而實不爾但自行苦樂因縁而自受報非自在天作。又若自在作衆生者。

誰復作此自在。若自在自作則不然如物不自作。若更有作者則不名自在云。

或言梵王毘紐天等生一切法。然此三界皆悉從衆縁生。求其自性都不可得況令心性同於彼性耶。

かくの如く縁生無性觀より外道神我の説を破せられたるを觀ても、密教の大日如來と梵天自在天等に根本的差別あるを知るべきである。

外道と佛教との教義の相違は如何なる點に存するかは、素より一言に盡し得ざるも、大日經疏に依れば外道とは神我を立て、然もその神は常住にして眞實なれども、神より造られたる萬有は凡て虚妄にして非眞實なりとす。即ち神と人との間隔を立て所謂二偏二見の邪見に墮し神人一體の不二の深理を明かさざるものと觀る。たとひ梵即我といふも、梵のみ眞實在にして我等は非眞實なれば、眞なる梵に没入するを説くものである。されば而二の隔執たる根本無明を斷除せる位に、大日本覺の體を開見せんとする密教の大日如來とは同義に解すべからざるや明かである。

祕密主。世間因果及業。若生若滅繫屬他主空三昧生。是名世間三昧道者。謂一切世間三昧以要言之。至於究竟之處。皆滅壞因果及從因辨果時所有作業。謂此三事若生若滅皆繫屬於他。他謂神我也。所以然者。若行人不解正因緣義。而修證諸禪。必當計著自心以爲內我。彼見世間萬法因心而有。則謂由神我生。設令不依內我必依外我。即是自在天梵天等也。若深求此中至蹟。自然撥除因業。唯我性獨存。乃至無一法入心。

而證空定。最是世間究竟之理。是故垂盡三有遺墮三途。雖於禪定中發種種世間勝智具五神通。研其宗趣終歸是處。故以斯一印統收一切世間三昧道云云

外道の説は他主空三昧なり、即ち他主に繋屬して因縁の中道を知らず、或は我性のみ獨り存す乃至一法として心に入ることなし等の文を讀まば、自ら外道と佛教との教義の相違の一端を知り得らるゝであらう。即ち外道は生滅の萬有は凡て他主なる梵天自在天等の所造なりとし、天は獨存常住なるも、天の所造の萬有は虛妄空なりと云ふ。此の如く神は常住主宰の自在力あるも、人は生滅虛妄の存在なりとの説の上には、自心に大菩提大涅槃を證する眞解脱の門開けず、故に神は有にして人は空なり、神は眞實にして人は虛妄なりとの説は、二偏二見を帯びたる邪計なりと排するのである。

諸法は神我所造なりとの説を排して諸法因縁生の義を明かすは佛教なりとは上來屢々述べしところなるが、諸法因縁生の義を説くも、因縁有自性の義を説くは小乘佛教にして、因縁生無自性を談ずるは大乗佛教である。即ち小乘は從縁生法は無常變異なり隨つて從縁生法に於て常一主宰の我ありといはざるも、未だ從縁生法の自體たる五蘊の法體の空を明かさず。しかるに大乘にてはその五蘊の自體も畢竟空なりと説く。而して小乘にて五蘊の自體を實有なりと云ふは諸法唯心の理を明かさざるに因る。萬法唯心の理を知れば自ら諸法の空を知る。されば大乘の初門たる唯識宗にては萬法唯識の義を説き、人法二空の旨を示す。唯識宗にて唯識觀に依り法空の理を知り、唯識の性に悟入するも、未だ

唯識の性たる眞如と萬法との一如を語らず、所謂事は有爲、理は無爲にして性相各別と觀る。しかるに三論宗に至れば從縁生法畢竟空を説き、この畢竟空の理と縁起の事とは即一不二なること、水波の如く、一理縁起して差別の事となり、この理事終に別なきを示す。蓋し唯識及び三論宗の説は大日經に説く第二劫即心幻の法門にして、一心を能性の本とし、諸法を所生の末とし、假法となし、所生の末を攝し、能生の本に歸還せしめんとし、或は縁起の萬法を畢竟空に歸せんとするものにして、未だ眞の理事一如眞俗の不二を明かさざるものなるが、第三劫に至れば、事理不二、有爲無爲一如の理を説くものである。即ち第二劫の三論宗にて示す畢竟空の眞如の體は、頑靈無知の體にあらず、照々として法界を照らす大智慧光明の體である。寂照不二の一心である。この寂照不二の一心と諸法との不二一如の理を明かすものは第三劫の法門である。疏にはこの義を釋して

前劫悟萬法唯心外無法。今觀此心即是如來自然智亦是毘盧遮那遍一切身。以心如是故。諸法亦如是。根塵皆入阿字門云云

また曰く

●從縁生即無自性。若無自性即是本不生。本不生即是心實際。かくの如く縁起の不生を觀じて心の實際に至り、寂照不二の一心に住するは、悟道深きが如くなるも、なほこれ如來自證の境に至らざるものとして、疏にこの心に住するとき諸佛の警覺開示あることを明



かす。

行者初觀空性時。覺一切法皆入心之實際。下不見衆生可度。上不見諸佛可求。爾時萬行休息。謂爲究竟。若住此者。即退不墮二乘地。不進得上菩薩地。名爲法愛生。亦名無記心。然以菩提心勢力及如來加持力。復能發起悲願。爾時十方諸佛同時現前而勸喻之。以蒙佛教授。故轉生極無自性心。乃至心之實際亦不可得。雖解脫一切業煩惱。而業煩惱具存。至此不思議地。乃名眞離二乘地也。

寂照不二、空性無境の一心に住するをば、大師は第八の住心とし警覺開示に依つてこの心も不可得なりと觀するを第九住心となす。盡し空性無境の一心に住し、沈空滯寂、上み諸佛として求むべきを見ず、下も衆生として度すべきを見ざるは、これ宛も小乘の寂滅涅槃に入れるが如くなるゆゑ、諸佛警覺し給ひしものである。この空性無境の一心に住する第八住心に、大師は天台宗を配屬せられたるが、かゝる空性の一心の義は天台の山家山外の中、寧ろ山外の理心に親しき觀あるも、十住心の法門よりいへば、能攝の住心の義と所攝の宗教の説と全く一致せざることあるも、義の相應を以て相配せるものと知るべきである。蓋し天台に理具の三千事造の三千の不二の理を説き、理を全うして事用を起すが故に、緣起の萬法その體を改めず、三千の性徳を具するとなし、事心の三千圓具を觀するは、これ佛界の果徳を九界の迷中に引き下したるものにして、かく因心の本具をのみ偏重するは、自他を高く佛界に引攝する精進勇猛力を失するきちひなき乎。即ち上諸佛として求むべきを見ず下も衆生として

度すべきを見ざる法愛生無記心に住するものにあらざるなきか。この境もなほ心の實際にあらずとの警覺開示の要あるべきか。密教にて天台を第八住心とし華嚴を第九住心とするは、華嚴は理事無碍の法も無自性と觀じ、かゝる理事無碍の法に住せず、事々無碍に轉回し、重々無盡の一大法界觀を明かにするも、大師の立場よりいへば、華嚴は緣起因分に於て事々無碍の義を説くのみならず、不可説果分の實在を暗示するによる。即ち華嚴には不可説果分の實在を示すと、もに性起の義を明かし九界は凡て性果の顯現なる義を説き、九界の迷をして佛界の引き上げんとするもの、即ち祕密莊嚴の曼荼羅の實在を暗示すると共に祕密果上緣起の片影を明かすゆる華嚴をして天台の上に置き給ひしものである。寂照不二の一心も不可得と觀じ、當位に住せず、後位の金城に進む中間が第九住心である、こゝに理より事に、本體より現象に轉回し、事々無碍法界融三世間の一大佛身觀を成するに至るも、この第九住心もまたこれ極にあらずと警覺開示せられ、つひに第十住心へ趣入す。大師此義を釋して極無性心者雖云融法界而證三世間身等帝網得一大法身。猶是成佛因初心之佛。五相成身四種曼荼羅未能力具足。是故不可住。謂未得爲得。未到謂到。

又曰く

水無自性遇風即波。法界非極蒙警忽進

或はまた

諸法無自性、故去卑取尊。故有眞如受熏之極唱。勝義無性之祕告。これらは皆第九極無自性も、心の實際にあらずとの警覺に依て、第十住心へ趣入すべきを示し給ひしものである。

かくの如く第八住心の寂照不二の一心も、第九住心の極無自性心も共に心の實際にあらず、眞の所住の地にあらず、無自性と觀するとき、理事、眞妄、因果等の不二一如を唱しながら、而も事より理に、因より果に、生滅より眞如に有相より無相に歸せんとする所謂眞妄に於て取捨を見る分別の細念を離れ、不二一如の祕密曼荼羅の果界開かる。この祕密曼荼羅の果界とは理智不二、色心不二境智不二の自覺體たる菩提心の轉起を明かすものである。かの大日經の三句五轉の法門、金剛頂經の五相五部等の法門は、この菩提心體の無限進行の道程を説くものである。而して六大體大とはこの理智不二、色心不二の菩提心體を釋せるものである。

なほ上述の意を要約していへば、佛教々理の淺近なるものは、因果應報の理を示し、五戒十善を修せしめ人天勝妙の果を得る道を明かす、かの十住心の前三ヶの世間教の當分である。しかるに五戒十善を修し、人天の果を得るも、これなほ生死因果界を出でざるものなれば、究竟厭離すべき境なりとし、この生死因果の系統を離れ、寂滅無爲の涅槃に歸入すべきを説くは小乗である。即ち小乗は有よ

り空に入る旨を示すものである、小乗は生死の自體たる五蘊の法體を實有と觀るゆゑ、生死界に大恐怖を懷き他を救ふの餘裕なく自ら急いで涅槃に入らんとするものである。しかるに大乘に至れば生死の自體たる五蘊の法體も畢竟空なるを悟り、生死の假有を知るが故に、生死實有と觀る小乗の人の如く生死に恐怖を懷かず、自他運濟の大道を全うするに至る。大乘にて五蘊の法體の空を説くも、この空は五蘊の法體即ち有の外にある空にあらずして、有即空の空にして、單空にあらざるが故に、大空とも不空とも、眞空ともいふ。またその有も單有にあらず、空即有なれば假有とも幻有とも妙有ともいふ。即ちこの眞空と妙有、平等と差別、無我と慈悲、實相と因果、眞如と生滅、眞諦と俗諦、止と觀、悟と迷、涅槃の生死、これ大乘佛教の二大原理にして、大乘佛教はその教義より云ふも、また信條より云ふもこの二門より成れるものである。固より大乘の精神は此等二門を止揚し統合するにあるが故に、有空中の三諦を説き、生死即涅槃、因果即實相の不二一如の理を明かし或は有即空にして有に本來堅實の自性なく、所謂無自性無障無碍なるより一法に一切を具する圓融の玄旨を示し、一念三千、一即一切重々無盡帝網無碍の理を説くに至りしも、これ有即空の理を擴充して明かすまでにして因縁生法無自性の原理を出でず。

而して密教にてはこの空と有、無我と慈悲、止と觀等の二大原理を勝義、行願の二門として示し、しかもこの勝義行願の二門は凡てこれ凡夫の我執を除くを主とする、遮情遣迷の教へにして、未だ如

來自内證の眞實義を示さざるものと見る。因縁生法の無自性空を觀じ、無執無我にして生死に住せず、また因縁幻有の差相を觀て同體悲愍の念止み難く、利他のために涅槃に住せざるは、何れも己を空しうしたる遮情の教である。この無我と慈悲、止と觀、勝義行願を双修双運し、分別我執の迷妄を除き無上大覺位を成せんとするものである。随つて空有止觀の行はこれ無上菩提に至らんとする菩薩修行の方規にして、未だ直に大覺の自内證の境を説きし法門でない。即ち如來は止觀双修して大覺位を成じ給ひしが故に、如來の行じ給ひし外迹を蹈んで、如來の至り給ひし處に至らんとする道にして、かくして到達せし如來の自内證の境に直入直證する道でない。祕密眞言門には眞空妙有、止觀双修の法門は我等因人の我執を除くを本とする遮情教にして、如來の自内證の境に直入直證する表徳の教にあらずとし、この二門の外に三摩地の法門を説く、釋摩訶衍論には、眞如生滅の二門の外に不二門を立て、弘法大師は九種住心の上に第十祕密莊嚴心を開かるゝは皆この祕密教の理趣を示されたるものである。

また大師は顯密二教論に華嚴、天台、法相、三論の四家大乘教の所説を眞俗二諦に歸し、しかしして二諦不二を説くも、極致は眞諦の無相空に歸するにありと斷じ給へるが、これ顯教は有を説くも此空を本として立つる有である。表徳を明かすもこれ無相眞如の理内の萬徳にして遮情のうちの表徳である。或は一念三千、事々無碍圓融を談ずるも、これ一念無性の故に三千宛然たり、空有無碍の故に

事々無碍をなす。即ち此等は眞空妙有、緣生無性の理の上に成せる教義にして、その究竟するところ遮情遺迷にありとなす。

要するに顯教の大小乗は空理を宗とすといひ得らる。小乗の有より空に歸するは常に云ふところの如く、法相宗の勝義勝義廢詮談旨一眞法界體妙離言、三論宗の獨空畢竟の理體、天台に求<sub>二</sub>三千法<sub>一</sub>亦不可得言語道斷心行處滅或は法華經には離相滅相、究竟涅槃、常寂滅相、終歸<sub>二</sub>於空<sub>一</sub>といひ華嚴には理圓言偏言生理喪といひ、華嚴經には無礙寂滅觀、是則佛正法等といふ。即ち顯教大小乗の極理は空にありされば有を明かすもこれ空中の有にして幻有なり假有なり夢有なり。妄念緣起の假法と觀て究竟空に歸するを説くものである。かくの如く究竟空を宣示する所以は、上述の如くこれ衆生の我執迷妄を除くを主とする遮情教なるゆゑである。この空觀に依つて分別思惟を絶したる如來自證の境は空なるにあらず眞有である。弘法大師は一切佛法に第一義諦を言斷心滅なりといふは、これ因人所用の四種言説、九種の心識に依る、しかるに密教に果界の實義を説くは、これ果人相應の言心たる如義言説、一一心識に依ることを委説せられたるより觀るも、密教は果界眞有の實際を説くものなることを知り得らるゝのである、かの華嚴の賢首大師性海果分は不可説なりと宣示せるを凝然の通路記に、如來究竟自在圓滿の大果たる性海果分は理に約して果分と名くるや、亦事に約して果體となすやとの問を設け、究竟自在果海の法は事理を該羅し、性相を貫括す、一切諸法佛果の中に入れば即ち是れ如來

の所知にして己が分にあらざるが故に事理をえらばず一切の諸法唯如來に望めて皆果分と名づく。但し文に性海と言ふは事理の性源を窮むるが故に、理智事理性相體義各其性あり、本源に約するか故に眞理を獨り性海と名くと謂にはあらずと釋せるが、これ祕藏記に性の處の性相は宛然として本有なり等の密教の釋義と懸かに其義相同するものと云ふべきである。その性相常住、理智本有の果界の體とは上に云ふ理智不二の菩提心體なり、自覺の體なり。六大體大はこの體を釋せるものである。大師は如來の自内證の境を開示せずは、佛法の眞意顯はれぬと觀給ひしが、蓋しこの自證の體を示さずは佛教の道德も信念も其眞意が顯れぬであらう。菩薩因位の六度等の修行は、これ無我法性の理に順ずる行にして、無上菩提を成ずる宗教的修行にして、また同時に佛教の道德なるが、この行はこれ無上菩提を成ずる爲めの方便行なれば、この行の當位に絶對的價值存せぬこととなり。また大覺位を成せし後の大慈悲化他の萬行なるものは、これまた方便行にして、法性自爾常住の眞實行でない。即ち大覺を成せし後の化他の萬行とは報應二身の妙用なるが、この報應二身はこれ衆生の妄心に熏せられて起るところのものである。即ち顯教の說に依れば因位の萬行は、これ自證のための方便行にして、また大覺を成せし後の化他の妙用は、これ衆生の妄心に熏せられて起る方便行といふこととなりて、自證化他の行、共に其當位に絶對的價值なきものと云ふことに歸す。しかるに祕密教にては發心の最初より如來自證の境に住する佛地の三味道を説き、この佛地の三味道に住するもの、三業は、皆これ衆生

を成就し佛國を莊嚴するもの、即ち一の行爲に絶對不盡の價值あることを説き、また究竟の大覺位たる自性法身に法爾常恒に大悲化他の妙用あり、無盡の三密を以て無盡の衆生を攝取するを、佛果究竟の體なる旨を明かすものである。

なほその宗教的の信念よりいふも、顯教の大乗教は因縁の無生を觀じて心鏡の妄雲を拂ひ、無盡の圓融を觀じて法界の自心にあるを觀するを説くも、弘法大師の九種心藥拂外塵而遮迷。金剛一宮排內庫而授寶等の釋に依れば、これなほ遮情空觀を出でざるもの、一念三千、一心法界を觀するも、これなほ空裏の幻華理内の萬德にして大我の眞性を體得せるものにあらずと觀る。然るに密教には本尊と自心と感應瑜伽の境に入る祕觀を明かしこの加持感應の極致本尊と自心とを二つながら忘れ眞に大我法身と一致し、如來の自在力、自心にあるを體し、如來に代て如來の妙業を成ずる道を示すものである。かゝる方面の詳説は今略するも、たゞ我執分別を除かんとするを表とし、無我空觀を宗とする顯教と、我執分別を絶したる、如來自證の境を明かす密教とに如何にその所説の不同あるやを示さんとして、以上の解をなせしものである。

十八會指歸に云く

五部互圓融。如來部即金剛。蓮花部即寶部。互相涉入。法界即眞如。般若即實際。於假施設有異。於本即一體文。

## 十住心論に曰く

經云何菩提謂如實知自心。此是一句含無量義。堅顯二十重之淺深。橫示三塵數之廣多。

即ち能所分別たる微細妄執を離るゝところに、理智不二の菩提心體を體顯することを得、この理智不二、色心一如の菩提心體を大師は即身義に六大と釋せられしものである。即ち自宗は都絶能所の性徳圓滿海に於て、六大緣起の説を立するものである。以上は佛教々義上より六大體大説の立場を明かさんとして辨じたるものなるが、これ世間往々眞言の六大をば科學の分子や電子と同一の立場に於て論じ、或は哲學の獨斷的實在論と同義に解し、或は小乘の五蘊、天台の三諦の假諦、華嚴の事法界と同一立場にて釋し、または顯教の無相眞如と同一理趣に觀て、六大各々無自性空なる義なり等と解せんとするものあるより、冗長を厭はず、如上の解をなせし所以である。

如來自内證の境界たる祕密莊嚴心の體を明かすに、密教の經論說一ならず、大日經には阿字本不生と説き、金剛頂經には五智法然の體性として開示せられ、釋摩訶衍論には不二性徳の體として明かされ弘法大師は六大なりと開演せらる。密教の所説は都絶能所の不二果海の境を示すものなることは釋摩訶衍論に依つて知られこの果海を弘法大師は理智六大と開説せられしは、これ兩部大經の理趣を闡明せられしものとも觀らる。即ち兩部大經は何れも理智不二の實義を説くも、而も大日經は寧ろ理を本

とし、金剛頂經は智を主とす。しかして大師の六大説は大日經所明の本不生の理、即ち Hiranya 心を開いて五大となし、また金剛頂經所明の智、即ち Citā 心を第六識として六大説を建立せられしものとも觀らる。こは一應兩部を理智と分つ立場より釋せしものなるも、上述の如く兩部各々理智の實義を説くが故に、大日經の不思議疏には本不生の理に自ら理智有て自ら本不生を覺るといへるが、大師の六大説はこの本不生の理智を開説するものとも觀らる。或は即身義に金剛頂經三摩地儀軌の五字輪觀の文を以て、六大の義を證せられたるより觀れば、一心を五大と開くことは、金剛頂經に依り給ひしものともいひ得らる。なほ大師が六大説を立するに當り依憑とし給ひし、兩部大經の文について觀んに、即身成佛義に大日經第二具緣品に菩提の實義を説く文を引いて六大の義を證せらる。其經文とは

爾時毘盧遮那世尊。與一切諸佛。同共集會。各々宣說一切聲聞緣覺菩薩三味道。時佛入於一切如來一體速疾力三昧。於是世尊復告執金剛菩薩言。

我昔坐道場。降伏於四魔。以大勤勇聲。除衆生怖畏。是時梵天等。心喜共稱說。由此諸世間。號名大勤勇。我覺本不生。出過語言道。諸過得解脫。遠離於因緣。知空等虛空。如實相智生。

大師の釋に依れば以上經文のうち我覺本不生等の五句は六大義を明かすものである。而してこの經文はこれ大日如來の自證菩提の實義を示すものなるがゆゑに大師の説に依れば、六大を指して菩提の實

義と名け、また六大の實義を知るを如實智と號す。即ち大師は六大義を由として即身成佛の義を立せられしものである。今引證の經の我覺は能覺の智なればこれ識大にして本不生等はこれ所覺の境たる五大である、其中本不生の三字は阿字地大、出過語言道は縛字水大、諸過得解脫は囉字火大、遠離於因縁は訶字風大、知空等虚空は欠字空大なり以上の如く見てこの經文は六大義を明かすものなりと大師は釋し給へるが、善無畏三藏の大日經疏には、今の經文は阿字本不生の義を示すと釋せらる。即ち我覺本不生の句をば謂覺、自心從、本已來不生、即是成佛。而實無覺無成。これ自心の心源たる阿字大空三昧を體得すれば、無上覺を成せしものなりとの意なり、而して出過語言道以下の經文はこれ阿字本不生の義を轉釋せるものと判せらる。即ち善無畏三藏は阿字本不生の義を説くと解せる經文を大師は六大義を明かすと觀らる。此の如く同一の經文に兩祖異解をなすは、これこの經文に淺深重々の義を含むゆゑである。即ち善無畏三藏の釋に依れば阿字本不生の自體は能緣所緣等の分別を絶せる不生一如の體なることを示すものなるが、この都絶能所の一法界の阿字一如の體は、これを表德的にいへばこれ理智不二、色心一如の菩提心體である。この菩提心體を開演して六大と説き給ひしものである。尤も善無畏三藏も、疏の第七卷に五字五大の義を釋するに殆ど今の經文と同一の文を以てせらるゝを觀れば、大師は我覺本不生等の經文を五字五大と釋成せられしとて、敢て疏の釋に違するものでない。而して大師は此經文について六大の義を證せられ、其意を結示し、此經偈約五佛三摩地作如是說

といへり。かの聲字義にも五大の義を釋し顯五大者如常釋。密五大者五字五佛及海會諸尊是といへり、此等は大師の六大説を知る要文なれば殊に留意すべき文なるが、此文につき古來これ能生の五大即五佛の尊形なりとの意なりや、また五大五字の體はこれ五佛所證の法門にして、尊形にあらざりや等の説あるも、此等の説はつひに一致に歸すべきものと思ふ。即ち我覺本不生等はこれ大日如來の自證菩提の體性にして、また一切如來の自證の體である。而して此境界は因人の思惟言心を絶するより、出過語言道、諸過得解脫等と説せられたるも、これこの自體虚無にあらず、表德的にいへば、これ毘盧遮那具體の身なり、また五佛の眞身とも、一曼荼羅諸尊の體とも稱し得べきである。

また六大の義を證せんとして、金剛頂經瑜伽修習毘盧遮那三摩地法の文を引用せられたるが彼の儀軌の文に

然後結三摩地印。入法界體性三昧。修習五字旋陀羅尼諸法本不生。自性離言說。清淨無垢染。因業等虚空。旋復諦思惟。字字悟眞實。初後雖差別。所證皆歸一。不捨是三昧。兼住無緣悲。

この經文の中、大師の即身義に六大の證文として引かれたる諸法本不生。自性離言說。清淨無垢染。因業等虚空の文は、これ眞言行者の五字々輪即ち自證菩提の體を説ける文にして、不捨是三昧以下はこれ化他の義を明かせしものである。上の大日經の我覺本不生等の文は、これ已成大日如來の自證菩提の體を明かせるものにして今金剛頂經は行者について自證菩提の義を示すものである。即ち兩經

因果の異なりあれども、共に自證菩提の實義を明かす文について六大義を證釋せられたるが、こは上來屢々述べしが如く六大とは、これ菩提心體を開說せられたるものなるゆゑである。其他即身義には六大説を證せんとして、大日經第五阿闍梨眞實智品、及び祕密曼荼羅品、悉地出現品等を引き給へるも此等の釋を略し、かゝる根本經典の意に依つて釋成せられたる、六大四曼三密の三大圓融の實義を説ける、六大無碍常瑜伽等の二頌八句の作者について一言せんに、古來學者の說に八祖相承の頌文なりともいひ、或は青龍寺の惠果和上の結誦なりといひ、また弘法大師の結頌なりとの説あるが、固より、頌文の義趣よりいへば八祖相承とも稱せらるべく、また惠果和上の結誦なりともいひ得らる。而もこの頌文は大師の著作にかゝる即身成佛義及び大日經開題のうちに始めて見るものなれば、この結頌は弘法大師なるべしとの説が正鵠を得たものであらう。如上の兩部大經の經文は、一應無相一法界の義を明かすとも觀らるゝも大師は六大多法界の義に釋成せられたるものにして、六大義は大師の即身義に初めて明かに開演せられたるものである。しかるに惠果和上の口訣を大師が記せられたりといふ祕藏記に六大能生の義を示されたる文あり。即ち祕藏記に

問六大能成四種曼荼羅及三種世間意何也。答曰有誦問彼誦何耶誦云

能生隨類形諸法與法相諸佛與聲聞救世因緣覺勲男菩薩衆及仁尊亦然衆生器世間次第而成立生住等諸法常恒如是生

斯彼誦也問此誦相配能造所造何也答初能生二字是能造也自餘諸句則所造也。

この證文は大日經第五祕密曼荼羅品第十一の文にして、即身成佛義に六大能生萬法所生の證文として引用せられたる文なるが、此の如き釋文已に祕藏記に存するを見れば、六大體大の義は大師惠果和上より相傳せられたりと推測せらる。其他祕藏記にはなほ六大の實義を釋すと觀らるゝ文あり、

率都婆變一字所成。又阿卑羅呼鈿五字所成。任取一一可觀自性清淨心眞如佛性如來藏法性。

又曰く

本不生際心虛空不生不滅。是本不生不可得。阿卑羅呼缺也。

此等の釋は自性清淨心、本不生際の一心を五字なりと説くものなるが、五字即五大の實義を説くものと見れば、これまた六大體大の義を説けるものである。即ち本不生際の一心とはこれ Hridaya の一心なり、この Hridaya はこれ非情草木の心なりとも解するが、この非情の心を明かすに用ひる。

Hridaya なる語を以て、自性清淨本心に名くるは、これ自性清淨の一心の無分別無意識なる義が、一應非情草木の心に似たるものにあるに因る乎。而も自性清淨の一心は草木心の如く頑靈無知の者にあらず、この一心遍照法界の用あり、この一心を五字なりと云ふは、これ阿卑羅呼欠の五字の不可得を觀じこの一心の體に契證する意にも解せらるゝも、この本不生際の一心は、能所一如、主客末分の絶對體にして、所謂如來の自然智なり、またこれ毘盧遮那の遍一切身なり、この境智無碍、色心一如、

理智不二の眞如法性の眞際を五大、五字と説くものなれば、自性清淨の一心を五字なりと釋せらるゝ文は、これまた六大體大説の依憑なりともいひ得らる。その他

草不非情成佛義。法身微細身五大所成。虚空亦五大所成。草木亦五大所成。法身微細身。虚空乃至草木。一切處無不遍。是虚空是草木即法身。於肉眼雖見麤色草木。於佛眼微細之色。是故不動本體稱佛無妨礙。

かくの如きの釋はこれ一切諸法五大所生の義を示すものにして、五六六大開合の不同なれば、これまで六大體性の義を説くものである。或はまた祕藏記に出づる五字嚴身觀、依報正報の五字五大の釋等皆これ六大能生の義を明かすものである。即ち識大は五大に遍在するが故に五大の文を六大と同義に解するのである。其他安然の菩提心義の五供養の釋のうに

復作是念五供諸色塵六大所和合云

此偈高野和上復命上船之日。大唐山師追所馳送云

上述の如く六大體大の義は、兩部大經に顯はれ、近く惠果和上の口訣と稱する祕藏記に示され、また大師上船の日、惠果和上より遙かに六大義の要文を送られたりとの文に徴すれば、六大體大の義は八祖相承の祕旨なりとも、或は惠果和上の相傳の説なりともいひ得らるゝも、而も六大四曼三密の三大圓融の義を成じて、即身成佛義を成立せるは、弘法大師なりといはねばならぬ。

上來一般佛教の教理上より見たる六大體大説の立場、及び大師が六大説を立するに當り依憑とし給ひし經文等につき一應述ぶるところありしがゆゑ以下正しく六大説を明かさうと思ふ。六大説を釋するには種多の方面よりの觀察を要するも、さきに述べしが如く六大體大はこれ如來の自覺自證の果體である。随つて六大とは大日如來の三摩地なり五佛の三摩地なり、一切如來の三摩地にして、また一切衆生の菩提心體なることを了知することが、六大説を解する關鍵である。されば密教の教理上より更にこの義に言及しようと思ふ。

凡そ佛教に二つの途がある。一は我等衆生の妄分別たる無明煩惱を滅し、寂滅に歸することを教ゆるもの、即ち生死より涅槃に、有爲より無爲に、生滅より眞如に、有限より無限に、差別より平等に有より空に、因より果に、此岸より彼岸に至らんことを示す途にして、一は妄想分別の絶離の極致たる如來果體に直住する教である、即ち直に無限に住し、永劫無限の見地より一切を見んとする途である。後者は眞言密教の立場なるが眞言密教は入佛道の最初より佛地の三昧道に住する教なり、直住月宮の教なり等と云ふは、凡て如上の祕旨を語るものである。また眞言密教は從凡入佛位の階級を明かすに初地の一位を説き或は因行果の修生の五轉も、これ初地の上に建立するを以て經の正意となすといひ、または初地の前に六無畏の階級を立て初無畏發心を説くも、これ第八識發心にして眞言行者は發心の最初より、生佛不二の三昧耶戒を受け、三密平等の法門を修するものにして、六無畏を経て初



地に契證すと云ふも、たゞこれ生佛不二の心地の開顯の淺深に外ならず等の説は、凡てこれ眞言密教は入佛道の最初より如來果體に歸入し、如來果地のうちに分別妄念を空しうし感應道交、入我々入一念に佛智を成就する法門なることを示すものである。一切諸法は皆これ如來の本誓三昧耶を表現する差別智印にして、事々の當位に絶對價値を觀んとするものである。『大日經疏』第十二に

夫眞言者從<sub>レ</sub>自心<sub>レ</sub>發。乃至欲<sub>レ</sub>識<sub>レ</sub>眞言行乃果報<sub>レ</sub>亦從<sub>レ</sub>心而現。出<sub>レ</sub>此心<sub>レ</sub>外無<sub>レ</sub>別法<sub>レ</sub>也。所以者何。此漫荼羅名<sub>レ</sub>之爲<sub>レ</sub>淨。以<sub>レ</sub>一切衆生自心本來清淨。而以<sub>レ</sub>無明蔽覆不能<sub>レ</sub>了知若淨<sub>レ</sub>此心<sub>レ</sub>即是漫荼羅處。不<sub>レ</sub>從<sub>レ</sub>餘處<sub>レ</sub>來<sub>レ</sub>也。

等の祕釋は能所分別を泯じ、法爾瑜伽の能所たる理智不二の菩提心體に契證せば祕密曼荼羅の果體を現身に體得せらるゝ祕旨を示すものである。而して六大無碍常瑜伽の説は、これ果體爲本の祕密教の原理を開示せられたるものにして、祕密曼荼羅の果體よりいへば、一切諸法は六大法身の表現にして、萬法は當位に於て色心不二の毘盧遮那具體を呈露せる曼荼羅體なる祕義と、感應道交、入我々入現身に佛身を體得する修生三密の成ずる理趣を開演せられたるものである。

眞言密教は果上の法門なること、及び顯密二教に因果二分の異なりある等のことは、二教論、寶鑰等大師の御作の書の處々に示されたれば、密教を教理上より解せんとするものゝ等しく知れるところなるも、こは六大體大の實義を解するに重要な點なるゆゑ、兩部大經の開題の文を引用し、更にその意を述ぶるであらう。

大師の金剛頂經の開題に曰く

蝸角民盲<sub>レ</sub>羅睺。蚊蚋族聾<sub>レ</sub>大鵬。況乎法佛三密四種言語不能<sub>レ</sub>及。曼荼四身九種心識不得<sub>レ</sub>緣。是故名言絶而機水涸。身土隱而應月沒。大惠懇請能仁不<sub>レ</sub>許。迦葉至扣寂尊猶闕。海妙但見<sub>レ</sub>月光。地藏略讚<sub>レ</sub>日蔽。大衍稱<sub>レ</sub>其絶離。地論顯<sub>レ</sub>其不説。三大異<sub>レ</sub>域一心別<sub>レ</sub>源。廢詮之客憩<sub>レ</sub>郊放<sub>レ</sub>牛。絶慮之賓臨<sub>レ</sub>廟待<sub>レ</sub>鷄。冰照椎輪摧<sub>レ</sub>轆染淨之岳。水波游艇折<sub>レ</sub>揖風水之海。

以上の釋は顯教の大乘教たる法相、三論、天台、華嚴も如來自證の果體を開説せざることを示すものである。即ち人法二無我、八不中道、三諦圓融、事々無碍法界觀等は皆これ因分の衆生の妄分別を絶離するを宗とするものにして、その絶離の極致に顯はるゝ如來の自覺自證の果地の實相を開説せざることを述べしものである。次に如來内證の果境を開演するものは眞言密教なることを明かして

妙雲開塔之朝。金薩灌頂之時。三密秘藏<sub>レ</sub>神光<sub>レ</sub>而曜<sub>レ</sub>大虛。五智大我湛<sub>レ</sub>妙相<sub>レ</sub>以坐<sub>レ</sub>靈臺。十六輪王各領<sub>レ</sub>自國。四攝宰輔分<sub>レ</sub>職利<sub>レ</sub>他。恒沙萬德森羅自居。無盡莊嚴塵麻非<sub>レ</sub>喻。各奉<sub>レ</sub>大日之垂拱。如<sub>レ</sub>衆星共<sub>レ</sub>北辰。三十七圓智微細住<sub>レ</sub>自然。四種曼荼羅本居<sub>レ</sub>金剛性。四種法身共<sub>レ</sub>陳<sub>レ</sub>斯道。十八瑜伽同示<sub>レ</sub>此趣。斯乃不<sub>レ</sub>捨<sub>レ</sub>此身<sub>レ</sub>頓證<sub>レ</sub>佛位。不共佛法速疾神通之教也。

以上は金剛頂經はこれ諸經論絶離の、如來自證の果界の實相を開説するものなることを釋すものなるが、金剛頂經と同じく大日經もまた如來自證の境を開演せるものである。大師の大日經開題に曰く

夫法界淨心超十地以絶絶。一如本覺孕三身而離離。況復曼荼性佛圓圓之又圓。大我真言本有之又本。風水之龍不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>動<sub>二</sub>其波瀾<sub>一</sub>。業轉之霧不能<sub>レ</sub>蔽<sub>二</sub>其赫日<sub>一</sub>。恒沙眷屬鎮住<sub>二</sub>自心之宮<sub>一</sub>。無盡莊嚴優<sub>二</sub>遊本初之殿<sub>一</sub>。然非<sub>二</sub>輪王之性金剛之種<sub>一</sub>。誰能見<sub>二</sub>三密之曼荼<sub>一</sub>。聞<sub>二</sub>四印之神秘<sub>一</sub>。所謂大毘盧遮那成佛神變加持經者。是則諸佛之大秘衆生之極妙。云云

かく兩部大經はこれ如來の自覺自證の果體の實相を開説せるものにして、六大體大とはこの自覺の果體なりとは、これ大師の教義の中樞である。されば中古の宗學者は齊しく大師の教義の正意の發揮につとめしものである。例へば宥快法印の大日經住心品疏の鈔に曰く

眞言自宗ノ意ハ兩部ノ大經ヲ以テ所依ト爲ス。爰ヲ以テ大師釋シテ云ク、眞言密教兩部祕藏是法身住金剛法界宮及眞言宮殿等自受法樂故所演説<sub>文</sub>

此ノ意兩部ノ大經ハ諸佛理智ノ體性、衆生色心ノ實相ヲ開示スル也。爰ヲ以テ大師當經ノ開題ニ大毘盧遮那成佛神變加持經者。是則諸佛之大秘衆生之極妙<sub>文</sub>

此レ理智色心生佛二界ハ本來不二則一ノ故ニ兩部又タ不二ノ體性ナリ(中略)

他宗ノ意ハ差別ヲ會シテ一味ニ歸スルヲ所宗ト爲ス。法相ノ廢詮一實、三論ノ獨空畢竟ノ理。天台ノ一乘一如ノ談、華嚴ノ智寂不二ノ一心皆此ノ意ナリ。(中略)

然ルヲ今自宗ノ意ハ兩部ヲ以テ諸法ノ本源ト意得<sub>レ</sub>ル事其ノ源意如何。答顯教ハ是レ對機遮情ノ教ナル故ニ差別ヲ會シテ平等ニ歸スルヲ宗旨ト爲シ。遮情トハ迷情ヲ遮遣スル義ナリ。迷倒ノ衆生ハ

而二隔歷ノ差別ノ境ヲ緣ス。彼情ヲ遮遣センカタメニ差別ヲ遣テ平等ニ歸ス。彼ノ遮情ノ上ニ顯ルル所ノ各々守自性、各々自建立ノ性徳ヲバ未ダ顯サズ、故ニ獨空一如ノ理ヲ以テ至極ト執スルナリ

大師吽字義ノ中ニ此事委細ニ釋シ玉フ。今自宗ノ意ハ即事而眞ノ道理ヲ談ズル故ニ色心生佛ノ各々ノ當相ヲ動セズシテ、實ノ如ク實相ヲ開示スル是レ表徳ノ實義ナル故ニ遮二詮一ノ義ナシ。就中自宗ハ六大ヲ以テ諸法ノ本源ト爲シ。六大トハ色心ナリ。此ノ色心即チ兩部ナリ。仍テ兩部ノ外ニ別ニ所歸ノ法體ナシ。此ノ色心兩部ノ法ニ付テ不二ノ義ヲ談ズルハ只是レ義用ナリ。實ニハ色心ノ外ニ法體ナシ。之ニ依テ大師ノ御相承ハ兩部ヲ極位ト爲ス。他門相承ノ眞言ノ中ニハ兩部ヲ以テ而二トナシ此外ニ蘇悉地ヲ立テ、不二ノ極位ト爲ス猶ホコレ即順常途ノ義邊ニシテ顯網ノ域ヲ出デザルナリ。云々

これ眞言密教は諸佛理智の體性、衆生色心の實相を開示する教なることを釋すものである。即ち色心に即して實相常住の理趣を體得すべきを説くものである。大日經には如實知自心といひ、大師は十住心論に祕密莊嚴住心とは即ち是れ究竟して自心の源底を覺知し、實の如く自身の數量を證悟すといへり。而して色心理智の法門を明かすに一應再應の二門あり一應は金剛界は心法即ち智の實相を明かすものにして修生、胎藏は色法即ち理の實相を示すものにして本有なり、而も再應は兩部各々理智色心本有修生を具有し、兩部何れも理智本有六大一實の理趣を明かすを宗の祕旨となす。即ち法の本源は

理智六大の不二無量の體にして、色心各々萬德を具足し法界曼荼羅の實義を成する旨を明かすものである。此の如く眞言密教は色心、迷悟、染淨、陰陽等の無量無數の差別の對立、即ち而二の當位に即して、色心不二、主客合一の不二の一如具體の法身を體得する道を示すものである。所謂六大無碍常瑜伽の義を説くものである。眞言密教は因分を超え、直に果分に住する祕旨を明すものなりと云ふも、その果分の境界として因分の外に其實體あるにあらず、一切衆生色心の當相本來不生にして、同一實際に住するを本覺法身といひ本來果分に住すと云ふ。所謂一相一味到於實際と云ふものこれである。而して眞言密教も始覺修生門にては、都絶能所の無相觀を明す。即ち如來果地のうちに、我等の分別妄念を空しうし、如來果體に應同する義趣を説く。この密教の無相觀と顯教の無相觀と釋相同じければ、人多くその紫朱に迷ふ。古來密宗學者にしてその正宗の發揮に努めたるもの多きうち。今果寶師の自宗學者所傳傍正事なる古草の所釋に準じ、以て密教々理上に於ける六大體大説の立場を更に示さうと思ふ。

兩部大經の説相廣しといへども、其綱要を明かせば大に二重あり、初めには心地の不生を明し、後には祕密瑜伽を示す。即ち金剛頂經には、初めに無識身三昧に住する義を明かし次に五相成身を示す。また大日經に依らば、初めに自心等空の觀を示し後に五輪成身を明かす。これにつき中古の自宗の學者の所見區々たるも、大途三傳に歸す。

第一傳には初めに心の不生を示す、之を以て所依となし、更に加持方便の妙用を起すを五相五輪の觀門となす。而して佛法の歸するところ修行の本づくところ、たゞその不生觀にあり。即ち金剛頂經の無識身觀、大日經の自心等空觀たる不生觀にありとなす。

かくの如く不生觀の上に加持の妙用を起すとは、諸佛内證の境界をば空三昧と名け、また正覺三昧と稱す。如來この不生空三昧に住するも、この不生空三昧は因人の思議を絶するが故に、如來この三昧にのみ住し給ふときは一切衆生を攝取すべからざるが故に、如來この不生自覺の體を動せずして、十方三世の無盡の衆生界に化他のために無盡無數の三密門を示現し給ふ。一念に不生を觀じ、如來自證の不生の體に契證し得ざる隨他の機根はこの如來示現の三密門を修し、この神通の寶輅に乗じて如來自證の體に契合す。而も所修の三密も所成の妙果も、凡てこれ因縁所生にして不生空なり。即ち畢竟等空三昧に歸す。

このうち顯教と密教との所説を分別すれば、その不生空三昧に至つては、顯密の不同あることなし、この等空三昧より無盡の三密門を示現し、この三密門を修して不生空の體に契證するは密教にして、止觀六度の行に依て不生の覺體に契ふは顯教なり。即ち顯密二教の所歸の不生空三昧は一なるも、二教の差はその三昧を發得する所修の行體にありとなす。

第二傳には初傳にて不生空觀は顯密の教體なりと云ふも、この不生觀はこれ遮情の方便教にして、なほ入佛道の初門とし、この遮情不生觀より表德觀に轉じ、その表德の法體を眞言密教の教體なりとす。即ち因人の能所思惟を絶せしところに顯はるゝ法爾瑜伽の能所たる理智不二、色心不二、六大無碍、兩部曼荼羅の法體を正しく密教の教體となす。寶鑰には

九種心藥拂<sub>ニ</sub>外塵<sub>ニ</sub>而遮<sub>レ</sub>迷。金剛一宮排<sub>ニ</sub>內庫<sub>ニ</sub>而授<sub>レ</sub>寶

又曰く

心外礦垢於此悉盡。曼荼莊嚴是時漸開。云云

理趣經開題に曰く

人者此有<sub>ニ</sub>五部之別<sub>ニ</sub>。(中略)是即五大所起五智所成。自性之又性。法體之又體。三自三大未<sub>レ</sub>見<sub>ニ</sub>其邊<sub>ニ</sub>一如一心誰到<sub>ニ</sub>其極<sub>ニ</sub>。云云

かゝる高祖の解釋を以て本經の説相を案するに、大日經には三劫十地の階級を立て以て地位の淺深を示す。而してかの自心等空の觀行は、これ第三劫の法門なり。十住心論第一に如上二宮、但<sub>レ</sub>芟<sub>レ</sub>雜宅中之荒穢。猶未開<sub>ニ</sub>地中之寶藏<sub>ニ</sub>。大日經に曰く。此經宗從<sub>ニ</sub>初地<sub>ニ</sub>。即得<sub>レ</sub>入<sub>ニ</sub>金剛寶藏<sub>ニ</sub>故。云々即ち此等の釋に依れば地前三劫の位には未だ金剛寶藏を開かざるなり。しかれば云ふところの金剛寶藏とは自體何物なりや、これ釋摩訶衍論に明かすところの不二果海の十界曼荼羅にして、二教論に二重の二諦を

建立し、言説の相を離れ、名字の相を離れ、心縁の相を離れ生佛の假名を絶すると云ふ顯教の眞諦、即ち諸經論に明かす絶離の境を密藏の本分としこの絶離の境に開く十界曼荼羅、即ち眞言密教の眞諦これ金剛寶藏の自體である。空三昧に住し、能所の分別を絶し、時空因果の束縛を遠離し、理智法爾の本有菩提心の開見せられたる境界にして、この境にては一切は皆如來の本誓を表現せる三昧耶身なり、差別智印なり、四重海會の聖尊字印形像の體性なり。萬法皆阿字大空位に住し、一相一味到於實際の無盡莊嚴の體なり、大師の六大無碍常瑜伽とはこの法性自爾の境を釋せるものである。即ち如來の自覺自證の境を六大無碍と釋し給ひしなり。この心内の無盡莊嚴藏を開かんに、心外の礦垢たる分別妄念を絶せざるべからず、この故に經には衆因緣生本來不生の觀門を示して、凡夫妄執の心地を平治し、然して後に本有の無盡莊嚴藏を開見す。されば經に自ら彼の自心等空の觀門を指して初法明道といひ寶鑰第八住心に、無相虛空相及非青非黃等言。並是明<sub>ニ</sub>法身眞如<sub>ニ</sub>一道無爲之眞理<sub>ニ</sub>佛說<sub>ニ</sub>此名<sub>ニ</sub>初法明道<sub>ニ</sub>。智度名<sub>ニ</sub>入佛道初門<sub>ニ</sub>。言<sub>ニ</sub>佛道者指<sub>ニ</sub>金剛界宮大日曼荼羅佛<sub>ニ</sub>。於<sub>ニ</sub>諸顯教<sub>ニ</sub>是究竟理智法身<sub>ニ</sub>。望<sub>ニ</sub>眞言門<sub>ニ</sub>是則初門<sub>ニ</sub>。大日世尊及龍猛菩薩並皆明說<sub>ニ</sub>不須<sub>ニ</sub>疑惑<sub>ニ</sub>。金剛頂經には無識身三昧のうち十緣無生の觀を明かしこの無生觀は入佛道の初門なれば、この觀に住するとき、諸佛の警覺開示あることを説いて曰く

諦觀諸法皆由<sub>ニ</sub>自心<sub>ニ</sub>。一切煩惱及隨煩惱纏界入等。皆如<sub>ニ</sub>幻焰徒闍婆城<sub>ニ</sub>。如<sub>ニ</sub>旋火輪<sub>ニ</sub>。如<sub>ニ</sub>空谷響<sub>ニ</sub>。如<sub>ニ</sub>是觀已不<sub>レ</sub>見<sub>ニ</sub>



雖具能所能所之體本空。空有之理本無中道之心斯契。今此建立金剛界三十七尊大曼荼羅及賢劫千佛外金剛部二十天及四十天等。此爲初原。展轉相生無量曼荼羅也。

大日經疏に曰く

今觀諸法無生乃至無待對故。則知阿耨多羅三藐三菩提於法平等無有高下。是故如來亦名一切金剛菩薩。亦名四果聖人。亦名凡夫外道。亦名種種惡趣衆生。亦名五逆邪見人。大悲曼荼羅正表此義也。

即ち眞言密教は兩部曼荼羅を宗體とす。兩部曼荼羅とは無相觀に依り、一切分別の念を絶し、無分別智を以て見れば、諸法々爾として阿字大空位に住し、境智不二、理智不二、法界遍周の毘盧遮那法身の徳を表現せる境地なり。この無盡莊嚴の曼荼羅の體これ眞言祕密の體なり。

第三傳 初傳には顯密二教同じく無相空三昧を正宗とするも、二教の差は一は六度止觀に依つて空三昧を體得すると、一は五相三密の妙行に依つて契證するの修行の異なりでありとし、第二傳は二教の相異はたゞ修行の異なりのみならず、所證の理趣に異なりありと觀るものなり。即ち密教は遮表不二の菩提心體を體得する道にして、顯教はその遮情無相の理に契證するを教ふるものなりとす。而して今第三傳よりいへば上來所説の第一傳第二傳の中には大師の密教の正意は第二傳にありとし、而も初傳の無相觀これ無盡莊嚴の曼荼羅の體に契證する能入の門なりと見るものなり。

凡そ一切衆生發心して佛果菩提を成ずるに至る修行の歷程を觀れば、實に無量無數なるべし。所謂

機根萬差なり隨つて機根分類古來種多の説あるも、今かりに修行成佛の機根、發心即到即ち極大頓機の二つに分ち、その修行成佛のうちに最初顯教に依つて修行し後に密教に入るもの所謂迂回の機根と(常にこれを別に扱ふことあるも今は同じく修行成佛の機根として觀る)最初より密教に入り五相三密の行を修する機根ありとの見地より解せんに、顯教より密教に入る迂回の機根にしても、最初より祕密曼荼羅の行を修するものにしても、修行成佛の機根は何れも初めに遮情無相觀に住し、分別妄執を超越して、遮表不二の無盡曼荼羅の菩提心に契證す。即ち初傳の等空觀に依つて第二傳の表徳の體に契ふものなり。最初より密教に入り三昧耶戒を授り、生佛不二の開示を蒙り、三密平等の如來果地の法門を修するも、なほ隔歴妄執の念を離れず、能所差別の念あるを以てたとひ三密平等の觀行を修すとも、所感の佛身は加持身にして、眞に能所を絶する遍一切の法身を見る能はず、故に行者無相觀に住して心垢を除淨し、遍一切の法身を證得する道は、これ六無畏を経て初地に入る階級なり。即ち眞言門の行者も心地を除淨する道として無相觀を修す。所謂心を本生際に住し、無念にして念じ、不信にして信じ加持感應と無相觀に依つて能所の細念を離れ、加持身に即して能所を絶せる具體法身を體驗するを得るなり。此の如く顯教より密教に入る迂回の機根も、また最初より密教を修する直往の機根も共に無相觀を修するも、細かに見ればそこに種多の相違ある。今それらの異點を委説すること省略するも、顯教より密教に入る機は因より果に歸するもの、即ち有限より無限に歸せんとするも

のにして、最初より密教を修する人は、直に如來果地に住し、如來果體のうちに分別の細念を空しうして、如來の果體に應同するの異なりありといひ得らるべし。しかも迂回の機根も直往の機根も、修行成佛の機根は何れも初めに遮情無相觀を修し、後に表徳の境に入る。次に發心即到無相頓大の機根は、無我遮情觀に入らず、一切諸法皆これ、色心不二、理智相即の毘盧遮那具體法身の體と見るものなり。義訣に無識身三昧を釋して

若頓入者亦不由之。一切色塵爲佛事。故云。

余は六大體大の義を述べんとして、その本論に入るに先だち、上來餘り多く語つたきらひがある。しかし六大體大説は種々の立場よりこれを解せらる。而も六大説を正當に解せんには、佛教々理上より、また密教々理上より觀て如何なる立場にて解すべきかを明かすことが緊要なれば敢て如上の説をなしたわけである。が以下正しく大師の六大説を釋するであらう。大師は即身成佛義に六大説を立せんとして、大日經及び金剛頂經の六ヶの文を引いて六大義を證釋し、更に此等の經意に依り、六大義を宣説せられたる文ある。大師の六大説は此の釋文に顯れたれば、今その文を引用し、一應その釋をなし、更に聊か所見を述べようと思ふのである。

如此經文皆以六大爲能生。以四法身三世間爲所生。此所生法上達法身下及六道。雖麁細有隔大小有差。然猶不出六大。故佛說六大爲法界體性。諸顯教中以四大等爲非情。密教則說此爲如來三摩耶身。四

大等不離心大。心色雖異其性即同。色即心心即色無障無碍。智即境界即智。智即理理即智無碍自在。雖有能所二生都絶能所。法爾道理有何造作。能所等名皆是密號。執常途淺略義不可作種種戲論。如是六大法界體性所成之身。無障無碍互相涉入相應。常住不變同住實際。故頌曰六大無碍常瑜伽。無碍者涉入自在義。常者不動不壞等義。瑜伽者翻云相應。相應涉入即是即義。

この文義多含なるも、其主なる理趣をあぐれば

- 一、六大を以て十界の依報正報の體性、即ち法界の體性となすこと。
- 二、六大は色心不二、境智不二、理智不二の體なることを明かす。即ち諸顯教中以四大等爲非情。乃至即智無碍自在に至るまでは六大とは色心不二、物心一如具體の眞實在體なることを示す。地水火風空の五大を普通非情物と云ふも、この非情にも心を具すれば、非情物にあらず、不二摩訶衍六大一實の境地よりいへば、これ心智を具する如來の三摩耶身なることを示す。
- 三、六大は能生萬法は所生なりと云ふも、この能所はこれ不二果界都絶能所の能所にして性相常住なることを明かす。即ち

雖有能所二生都絶能所。法爾道理有何造作。能所等名皆是密號。執常途淺略義不可作種種戲論。これ能生所生共に法爾無作の義を示すものである。即ち六大體大は理智不二、境智未分、色心一如の毘盧遮那具體の法界體なり。所謂六大體性はこれ分別妄念を絶せる如來の自覺自證の果體なれば

分別智を以て解すべき境ならず。されば六大能生萬法所生といへども、都絶能所の果界に立つる能所なれば、密號名字の能所にして、常途の能生所に異なり、性相常住、即ち實在と現象の不二即一なることを明かす。此くの如く六大體性は第九識の所縁にあらず第十一心識の所縁にあらず不二心所證の佛果の境地なり。随つて凡夫の分別智を以てこの境を解せんか、これ戲論に墮すとの御釋は、殊に留意を要すべき點である。

四、六大は無碍常瑜伽の體なる義を明かして、體大より見たる即身成佛義を示す。

如是六大法界體性所成之身。無障無碍互相涉入相應。常住不變同住實際。故頌曰六大無碍常瑜伽。無碍者涉入自在義。常者不動不壞等義。瑜伽者翻云相應。相應涉入即是即義。これ六大體性より成せし無盡無數の身は、無障無碍にして、互相涉入し常瑜伽の體なる義を明かすものである。即ち法界の衆生は眞實在たる體大に於て、一即多、多即一、圓融無碍をなし、各々の當相を動せず、壞せず、法界を統攝し、法界曼荼羅を成せし、即身成佛の體なる秘旨を示すものである。

上述の如く六大能生萬法所生と云ふも、この能所は都絶能所の能所なるが故に能所の二相あるにあらず、同一六大體の平等と差別、統一と分化、一と多との両面にして、この一即多、多即一、一多不二なるを六大法界の性相となす。六大體大より觀れば萬法は皆六大體大の所成の身にして、六大體大は一多不二、六大無碍常瑜伽の立場に於て、一切を統攝せる唯一不二の法界身なるも、所成の

身よりいへば、一切が各々守自性、各々自建立にして、その當相を動せず壞せず、また一多不二、六大無碍常瑜伽の立場に於て無盡法界を統攝し、法界曼荼羅を成ず、即ち六大より成する一切の身は、各々六大法身の萬徳を顯現せる差別智印にして、六大法身に統攝せらるゝと共に、各々の當位に於て法身の全體を顯現し、絶對自主である。當相即全體である。この立場よりいへば能成所成、統攝するものと統攝せらるゝものゝ區別なく、唯一不二の法界體である。此の如く六大法界體性所成の身は一多不二、無碍常瑜伽の立場に於て法界を統攝し、法界曼荼羅を成せる即身成佛の體なることを示す。所謂法身三密入纖芥而不進。亘大虛而不寬。不簡瓦石草木不擇人天鬼畜。何處不遍何物不攝。即ち法身は一切に周流し、一切の差相に即して全體を表現するものなれば、一にして一ならず、多にして多ならず、一多不二具體の體である。六大所成の無盡無數の身は、各々六大無碍常瑜伽の立場に於て法界を統攝し、法界曼荼羅を成せる即身成佛の體なることを明かす。

大師は即身義に重々帝網名即身の義を釋すに當り、三部三昧耶の中の入佛三昧耶の眞言たる

ॐ ॐ ॐ ॐ ॐ ॐ ॐ

即ち無等にして三平等なる眞言を引いて、三大圓融無碍の義を證述せられたるが、この眞言はまた以て六大無碍常瑜伽の義を釋すべきである。所謂心佛衆生の六大の體性は無碍常瑜伽、平等々々にして法界に周遍し、重々無盡各々當位を動せず壞せず、法界を統攝し法界曼荼羅を成じ、當位即全



體、絶對自主にして待對すべきものなき義である。六大無碍常瑜伽の義は此の如く入佛三昧の眞言を以て釋すると共に

ॐ 妙 法 蓮 華 經

の 妙 法 蓮 華 經

即ち我身は法界の自性たる毘盧遮那に同なり、我身は法界自性たる金剛に同なりとの、法界生及び轉法輪の眞言の義を以ても釋し得らる。

要するに大師は六大體大の義を演暢し給ひしは、これ一種の哲學を説かんがためにあらずして、我身法界に周遍し、身心の當相を動せず、**ॐ 妙 法 蓮 華 經** 即ち本來解脱の床に住せる、即身成佛の體なることを明かさうがためである。

しかして即身義の文に顯れたるが如く、法界の體性たる六大は色心不二、境智不二、理智不二の具體の眞實在體なること、及び六大は法界の體性たる眞實在なるも、かゝる形而上學的實在があつてこの實在體より萬象が生起すべきものと解すべきでない。即ち能所の相對分別智を以て説くべき境でない。また分別智を以て認識すべき境でない。即ち因人の思議を絶せる境なれば、分別智の邊よりいへば、不可得なり、無相なり、空なりと説き、遮情否定によつて詮示するより途なし。今云ふところの六大は分別智を絶したる都絶能所の、不二佛智見の境界である。如來の自覺自證の果境である。

ある。六大體大は因人の分別思惟を絶せる果地の境なれば、分別智を以て種々の釋をなすも、凡てこれ戲論邪見に墮すること、及び六大體性は本來無碍常瑜伽の立場に於て法界の一切を統攝し、法界曼荼羅を成するが如く、六大體性より成せし一切の無盡無數の身も、また各々其當相を動せず、六大無碍常瑜伽一多不二の立場に於て法界を融攝し、各々法界曼荼羅を成せる金剛身なり。毘盧遮那法界身と同なりとの秘旨は六大説を解せんとするもの、留意を要する點である。

以上の六大説をなほ布演しようと思ふが、眞言密教には、法界の體性即ち如來の自覺自證の體、及び衆生の菩提心體を、大日經には阿字本不生といひ、金剛頂經には五智といひ、釋摩訶衍論には不二摩訶衍といひ、高祖大師は六大と説き給ふ。固より此等は釋相の相違にして意越一致と相承し來れるが、今六大説を敘するに當り兩部大經及び釋摩訶衍論の所説にも言及しようと思ふ。蓋し大師の六大説は此等諸説に依り給ひしものにして、此等諸説は六大説の基礎たるゆゑである。大日經は如實知心即ち自心の實相を如實に體得する道を説くものである。しかして自心は本不生なりと示す。この本不生に遮情表徳、淺略深祕等重々の義あり、今詳説を略するも、要は自心の無相を觀じ、分別の妄念を離れ、生死業生の生を絶して、如來法性の生を得する道である。即ち分別妄念を遮する道として、遮情の義を説かれ法性の性たる如來の生を得する秘義として表徳の義を明かさる。この表徳門には實

に無量の深趣が存する。即ち本不生の一心とは如來法身の體である。この法身は不生不滅遍法界身なれば、この法身を得せば、利衆生の化他の妙業法性と共に盡くすることなきこと等を明かさる。

不可得空之自性。即是第一常住法佛之身。以離空非空等八顛倒相。是即甚深從緣起法。無爲無作而能不動。法界普應衆生。機應相關如月現清水。如是緣起法不可思議也。空之自性常有。不先無。今有。已有。遺無。云云。(大日經疏)  
或有說言。若如是者。便是無因果。墮斷滅見者。此亦不然。但離業生之性。既離業生。即有法性之生。等於虛空。虛空無邊。故當知所成功德。利衆生事。亦無邊無盡。故非斷也。(大日經疏)

今此菩提之性(中略)離於因緣。實相常住。即是大日如來之體。云何不離生死耶。(大日經疏)  
出過一切戲論。如常虛空。於內證所行。得深信力。薩婆若心堅固不動。離業受生。成就眞性生。(大日經疏)

この本不生の體は色心不二、理智不二、境智不二の體なることを明かして曰く

初云。識心。是心自覺之智。次又言。心即是心之實相。意明。境智俱妙無二無別。故云。(大日經疏)  
本不生。理自有。理智。自覺。本不生。故。(大日經疏)

如上大日經疏に云ふ本不生の理智を、大師は六大體大と開説せられしものである。

金剛頂經については慈覺大師は教王經疏に

正明。經體。者爲二。謂總別體。初總體者是即本有阿字一部之指歸。衆義之都會也云云

これ金剛頂經も大日經と同じく阿字本不生を経體と觀るものである。金剛頂部には所々に阿字不生の

理を説けるを見るのである。されば古來兩部共に理智色心の本不生の義を明かすと云ふ。されど金剛頂經を一應大日經に對比せば金剛頂經は五智を教體とすと云ふべき歟。金剛頂經は理智を説くも寧ろ智を表とすることは、かの金剛頂經義釋に

一切諸法體性空寂。諸佛妙智依空而轉自在無礙。一切建立及不建立依空不空。智相常住。猶如虛空遍一切處。照用無歇故。大空自在無智無用無緣無依爲智所依。智唯實相。空非實相。空性唯空無所得故。妙智不空善巧用故。是以大日如來以一切智現其智相。名不空王也。極智妙相稱之爲王云云

以上は不空王菩薩の釋なるも、理智のうち不空の智を表とすることよく看取せらる。法性の無相を觀じ、有空分別の念を絶するところに廓法界に周ねき自在無碍の大智を成就す、この無碍自在の大智の妙用の示現を明かせしものは金剛界の曼荼羅なることを開説せる文を金剛頂經の處々に見るのである。また金剛頂大教王經、瑜祇經等に本有の五智を現證せる大日如來より曼荼羅を示現せる釋文、或は大師の金剛頂經開題に

密義五智佛名一切如來。聚一切諸法共成五佛身故。此五佛則諸佛之本體諸法之根源。云云  
或は祕藏寶鑰に、「五相五智法界體」といひ即身義に

法然具足薩般若。心數心王過利塵。各具五智無際智。圓鏡力故實覺智

等と釋せられたるが、此等は五智を法界體性とせるものである。即ち金剛界は心法を本とし、その心

法に無盡の性徳あるも五智に攝盡す。これ五智を法界體性となす所以である。而して即身成佛義に五智と六大と同一理趣として釋し

上文所引我覺本不生乃至遠離於因緣偈。及諸法本不生乃至因業等虛空。如是等偈皆明法然具足之義。

大日經及び金剛頂經に明かす六大の經文を以て五智の義を成す。これ五輪即是五智輪即ち色心不二の見地より金剛頂經の五智法界體性の義を六大法界體性の義に釋成せられしものである。

釋摩訶衍論は不二の實義を説くを以つて、弘法大師同論を眞言密教の論藏と制定し給ふ。而して不二の義は性宗の齊しく説くところなれば、その義また淺深重々である。或は衆因緣生法即空、即ち色心の當體即空なるを不二といひ、或は色心共に眞如一心の所變にして色心同じく眞如なるを不二といひ、或は色心當體即空の故に無障無碍にして、三諦圓融、三千具足の實相の體なるを不二といひ、或は法界緣起を説き色心共に重々無盡の法界體なるを不二といふ。而も大師の見地よりいへばこれ皆眞妄和合の緣起の上の説である。有空相即を根底とせる説である。即ち因分の説である。しかるに密教の所説は眞妄未分の法爾法性の上の説である。性相常住不二果分の上の説である。釋摩訶衍論はこの法爾法性の性海果分を開説する論藏なるより、祕密の奥旨を開説する眞言密教の論藏となすのである。

問如是一法界一道眞如之理。爲究竟佛。龍猛菩薩説。一法界心非百非背千是。非中非中背天背天。演水之

談足斷而止。審慮之量手亡而住。如是一心無明邊域非明分位。

又云性淨本覺三世間中皆悉不離熏習彼三而爲一覺。莊嚴一大法身之果。是故名爲因熏習鏡。云何名爲三種

世間。(中略)因熏習鏡亦復如是。熏一切法爲清淨覺令悉平等。問如是一心本法至極住心。龍猛菩薩説。三

自一心法。一不能一假能入一。心不能心假能入心。實非我名而目於我。亦非自唱而契於自。如我立名而非實我。如自得唱而非實自。立立又立。遠遠又遠。如是勝處無明邊域非明分位。

又曰く

九種住心無自性。轉深轉妙皆是因。眞言密教法身説。秘密金剛最勝眞。

十住心第九に曰く

諸顯教皆以眞如爲諸法體性。佛華法華等亦以此眞如爲至極。

以上の釋文はこれ天台華嚴宗の如き、顯教中にて最上の教と稱するものも、これなほ因分無明の分域にして、法爾法性の不二摩訶衍の境地を明かさるることを示すものである。

この不二摩訶衍はこれ自性法身の果境なれば、因人の分別思議を絶せることを示し金剛頂經開題に曰く

法佛三密四種言語不能及。曼荼四身九種心識不得緣。又云はく

然非九種心量之所緣。一一心之所緣而已。又非一一心所緣。不二心之所證而已。

不二法身の果體は、因人よりいへば不可得無相空なるも、法身如來よりいへば法界を統攝せる無盡莊嚴の曼荼羅體である。二教論に曰く

喩曰所謂不二摩訶衍及圓圓海德諸佛者即是自性法身。是名祕密藏。亦名金剛頂大教王。等覺十地等不能見聞。故得祕密號。具如金剛頂經說。

不二摩訶衍の境界とは自性法身の身土である。即ち法身如來が從身流出の諸眷屬と各々自の本誓三昧に住し、各々三密門を示現し、自證の體を開説する所謂自受法樂各説三密の境界である。大師は此境界を説いて

不二之理甚深難解。一如之趣祕奧難入。所謂不二一如豈只遮二詮一之名乎。

或は

同一多如多故如如理無數智智無邊恒沙非喻刹塵猶小乃至色心無量實相無邊

これらの提撕に依れば性海果分は、色心因果等無數の諸法宛然並び立ち、而もその當相一相一味平等平等にして、一即全體、當位即絶對である。即ち法身如來は無相大空三昧に住し、性相一如、一多不二、色心不二、智慧不二の自覺體を以て法界を統攝し、法界曼荼羅を成するが如く、一切衆生もまた法身如來と同一覺體たる、菩提心體に於て法界を統攝し、法界曼荼羅を成するを果界の實際となす。大師はこの不二果界を六大無碍常瑜伽と開演せられたのである。

以上の如く大日經の阿字本不生、金剛頂經の五智法界體、釋摩訶衍論の不二とは、これ如來の自覺自證の體を開演せられしものにして、これ衆生の菩提心體であると共に法界の體性である。さうして大日經より云ふも法界體性は理智不二、金剛頂經より云ふも理智不二、釋摩訶衍論より云ふも法爾法性、眞妄未分、一多不二、色心不二の體なるが、この兩部大經、釋摩訶衍論所説の果體を大師は六大無碍常瑜伽と開演し給ひしものである。

台密には大日經金剛頂經の兩部の大經は理智の實義を明かすものにして、この外に不二の實義を説く蘇悉地經ありといひ、或は瑜祇經は金剛頂經の不二、蘇悉地經は胎藏の不二を説く經なり等と觀て、而二の外に不二を立てこの不二を重視せんとするも、密教は而二即不二にしてこの而二の外に不二を立てず、差別の外に平等を求めず、當處即法界、即事而眞、現實普遍の祕義を説く、この而二の外に不二を立てず色心の當處即法界體なりと觀るところに六大體大説の正意があるのである。

衆生の色心の當相は、本來より常に是れ毘盧遮那平等智身なりといひ、或は上み大日尊より下も六道の衆生の相に至るまで各々の威儀に住して、種々の色相を顯す、並びに是れ大日尊の差別智印にして更に他身にあらず等の釋文は佛智見より照らせば一切衆生は一相一味到於實際凡てこれ如來の果徳を實現しつゝある如來の差別智印なることを明かすものである。即ち密教は教理上よりいへば本覺爲